
僕は違います

琥珀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は違います

【Nコード】

N3669X

【作者名】

琥珀

【あらすじ】

転生したので、今度の人生は絶対死なないようなチートを貰った。よし、これで死亡フラグは全部無効だ！　：あれ、苗字が織斑？　なんだこのフラグ。　：え、僕がISに乗れる？　いやいや誤解ですよ、これただのチートです。　はい？　IS学園に編入？　いやいや、なんで僕が…って、東さん。なんで全世界のTVジャックしてるんですか？　そして何故そんな笑顔をこっちに向けてるんですか——！？　これはISを生身でブッ倒すチート主人公の物語である。

※オリ主注意

L i f e 0

少年よ、英雄を抱け（前書き）

息抜きをしたかったんですが、一作品エタった自分としては続けられるか非常に心配だったりします。

が、頑張るぞ…あともう一つのほうも頑張るぞ…

Life 0 少年よ、英雄を抱け

誰だって死ぬのは恐ろしい。

特に僕の場合はそれが顕著である。

なにせ一回死というものを経験したから当然だ。いやはや、ロクなものじゃないんだよアレ。両義式さんも言っていただろう？死と対面するのは静かなことじゃない、むしろ闘争に近いことなんだって。

僕も経験したのは一瞬だったけど、できれば二度と体験したくないレベルだった。もう口じゃ説明できないよ、おぞましすぎて。

まあそんなわけで、僕はバトル展開とか大嫌いである。

いや、漫画とかで他人がやるならいいけど、自分がやるのが嫌だって意味だよ？他人の努力を否定する気はない。ただ、自分だけは安全でいたい。心の底からそう思う。

だから、僕は神様からチートを貰う時にこう言った。

『大英雄ヘラクレスと同じ能力くれ。設定は型月準拠で』

Bランク以下の攻撃全部無効！おまけに12回まで死んでも大丈夫！

ATフィールドと迷ったけど魔術とか無い世界ならこっちのほうがいいに違いないッ！この最強の防御力を持てれば、僕の生涯は安泰だ！いやっほう！！

と、思ってた時期が僕にもありました。

『う、おおおおおおおおおおおッ!!』

——耳を少年の叫び声が満たす。

カギ括弧がついているのは別に彼がカッコ付けているというわけではなく、ただ単に『ISに乗っている』からである。

ちなみに言うなら、彼は現在、僕の身体よりもでかい剣を必死に僕に向かって叩きつけようとしている最中だ。

「——どうしてこうなった」

世の中はうまく行かないもの、なのである。

チート印の動体視力やら身体能力でIS…『白式』の白刃を紙一

重でかわしたり『素手で』ブン殴って刃を逸らしながら、僕は溜息をついた。

何が悲しくて、世界最強の兵器相手に『生身』で勝負を挑まなきゃならんのだ。いくらチートとはいえ色々やるせなくなってくる。加減してください。

：ああ、いや、向こうは僕のことを『装甲が無いIS』と認識してるから、遠慮も手加減も一切してこないのか。絶対防御を過信しすぎじゃね？まあ、実際間違っちゃいないんだけどね。その認識。

『こ、のおッ！！』
「おっと」

ISなりの空中機動を活かして振られた一夏の剣を、僕は最小限の動きで避ける。

：なんか段々、一夏の剣筋が冴えてきた気がするなあ。

剣道の勘が戻ってきたのだろうか？それにしたって空中の動きを織り交ぜた攻撃なんてそう簡単にできるものじゃないと思うんだけど。いやはや、よく戦闘中にそんなアツサりと成長できるな。主人公補正か。

ちなみに、こんなガチガチの近距離戦になっている理由はご存知のとおり、『白式』の武装には剣しか無いからです。男らしいね（姉さんも同じ装備だったけど）。

ついでに言っておくと、僕：つまり英雄ヘラクレスには弓の装備があるので、遠距離では意外と僕が有利である。まあ、さすがに弓がないと飛べない僕としては色々詰むからね。

まあとにかく、色々な事情から一夏はこちらに近づいて、斬る。

斬りまくる。

：サラッと流してるけどこの状況、実は僕、けっこう怖い。『十^{ツドヘンド}の試練』といえどもちよつと気を抜いたら僕の身体は傷つくかもしれないし、そもそも受けた『衝撃』はあるので、痛くないとはいえ身体が停止する。

だから、僕はわざわざ相手の攻撃を避けて、防いで、受け流しているのだ。

とはいえ、そんな状況であることを一夏が知るわけもなく、彼の口から出るのは文句ばかりであった。

『くそっ：なんで、『装甲が無い』のにこっちの攻撃を防げるんだッ！違和感ありまくりだろ！』

「それは東さんクオリティのせいだねえ。あと、いくら平気だって言われたからって遠慮なく剣ぶつけるのはお兄ちゃんどうかと思うんだ」

『千冬姉に勝てる相手に手加減できねえよ、零夏ッ！』

「いや、僕が勝った時は姉さんIS乗ってないから」

ひょっとして、一夏の中ではIS＜姉さん＜僕、という不等号が並んでいるのだろうか？微妙に間違っていないのが恐ろしい。

まあ、姉さんこと織斑千冬さんは生身でも超強いからねえ。そのせいか一夏も僕のことを変な意味で信用している気がする。

まあ、さすがに五次バサカことヘラクレスの能力を丸ごと保有してるんだ、これで生身の勝負に負けたら姉さんは英雄になっちゃうよ。IS乗ったら勝負はわからないけどね。

というか、僕はこういう戦闘とかが嫌だからこの能力を貰ったのに、どうしてこんなことになっているんだろうか？
どうしてこうなった。どうしてこうなった！

とりあえずは、一夏の攻撃を捌きながら、この状況を整理する
ことにしよう――

L i f e 0 少年よ、英雄を抱け（後書き）

というわけで始まりました、『僕は違います』、タイトルにセンスが無いのはきつと気のせいだ！

あと元ネタがわかってても良い子はスルーだ！くれぐれもローソンに凸ったりしてはいけないぞ！

L i f e 1 大嘘吐き、世に憚る（前書き）

漂うマイナス臭。タイトルからも本文からもプンプンしていますね。
この更新速度いつまで続けられるのやら…

Life 1 大嘘吐き、世に憚る

ここはIS学園。

女性にしか扱えない兵器、インフィニット・ストラトスの扱いを学ぶ場所である。

数々の設備、優秀な教師などが揃えられたこの場所は当然ながら女子高である。世界にISについて学ぶための学園はここしか無いので、周りを見渡してみると結構外人が多く、カラフルな髪の人も多い。

…いや、髪については外人は関係ない気もするけどね。要はイラストの都合だよ言わせんな恥ずかしい。

…まあ、前置きはこのくらいにしておこう。

さて、ここで問題です。

どうしてそんな女子の園と呼ばれる場所に、僕と弟は制服を纏って放り込まれているのでしょうか？

「…気まずい…ッ!!」

「…言うんじゃない一夏…! 僕も結構ギリギリだから…!!」

そんな極限状態に放り込まれた僕の名前は、織斑零夏——いわ

ゆる『転生者』だ。

付け加えると、僕は織斑一夏の双子の兄として生まれてきた。いやはや、なんというテンプレっぷりだろうね？

主人公の兄って：できるだけ死亡フラグを立てないのが目標なのに、生まれた瞬間フラグまみれになってるじゃないか。何の罰ゲームなのさ。

このままだと一夏に巻き込まれて苦労したり、ひよっとすると主人公を押し付けられるんじゃないかと当時は思ったりもしたけど、じきにその不安は消えた。

だって、僕はISが『使えない』からね。

ちなみにこれは束さんのトコのISを触ってしつかりと確認した事実である。ふう、危ない危ない：ひよっとしたら使えるんじゃないかと思ってヒヤヒヤしたけど、これなら僕はどう頑張ってもIS学園に転入なんて事態にはならない！

「今思うとこれがフラグだったんだよなあ…」

「待ってくれ零夏！今お前に自分の世界に入られると俺は一人になっちゃうよ！！」

「知らんがな。現実逃避したいんなら予習でもしてなさい」

「その手があったかッ！！」

そんなわけで僕は気をよくしてセカンドライフを楽しんでいく：筈だったんだけどね。一体何が起こったのかというと、

束さんに転生者ってバレた。

：いや、本当にどうしてあの人はあんなに頭がいいんだろうか。
僕の些細な仕草から『十二の試練』^{ゴッドハンド}の特性を見抜いて、なおかつ
巧みな誘導尋問によって僕の口を滑らせるように仕向けるだなんて
芸当をサラッとやるなんて普通でできないと思うんだけど。

これが天才の実力であろうか。くそう、頭がよくて羨ましい。

『いや、アレはれーくんがわかりやすかっただけじゃないかな？』
「やかましい。モノローグに割り込むんじゃないやありません」
「えー、慣性をキャンセルでP I Cがうんぬん…ん、零夏？誰と話
してるんだ？」
「ウサギさん」

変な目で見てくる一夏はスルーしよう。僕がおかしくなったんじ
やなくて、本当にどこからか束さんの声が聞こえたんだから仕方な
い。

そんな風に、『束さんパネエエエエ！』と思いつつも、バレ
ては仕方ないので僕はある程度彼女に事情を話した。

『いや、要するに僕って平和に過ごしたいだけなんですよね』
『え？そんなに強いチカラがあるのに、れーくん何もしないの？』
『ええ。僕の夢は可愛い嫁さんに養ってもらうことですから』
『ふーん…ところで、それどう考えてもニートだよね！』
『ち、ちげーよ！』

確かこんな話をした気がする。今思うと酷い会話だなあ。
まあとにかく、僕としてはチートを自衛以外に使う気はない。お
まけに、どうせ何を言っても僕は『鎧』に守られているのでダメー

ジを貰うことは無い、という安心感もあった。

だから僕は束さんにサラッと

『世の中がどうなろうと、自分の周りが無事なら幸せなんですよ』
なーんて本音を喋ってみたわけさ。そしたら――

『そっかー。：やっぱり、れーくんは異常だね！束さんと同じくらい！！』

――とても嬉しそうに、彼女が笑ったのを覚えている。

「――皆さん、ご入学おめでとうございます！」
「：ん？」

おや、何時の間にか先生が来ていたようだ。

まだ回想終わってないんだけど：ま、とりあえず現実逃避ができたから良しとするべきかな。いくらBランク以下の攻撃無効とはいえ、精神へのプレッシャーまで緩和できるわけじゃないからね。さすがにずっと観察動物扱いされるのもキツイんだよ。

しーん：

ちなみに観察の視線は現在進行形で僕と一夏に向いている。その

せいで先生の爽やかな挨拶も女子一同はガン無視中。

あーあ、先生の顔が微笑のカタチで固まってるじゃないか。彼女もまた被害者の一人であることは間違い無いと思う。

先生正直すんませんでした、これは総て篠ノ之束って人のせいなんです。だが彼女は謝らない。

「た、担任の山田真耶です！ 皆さんよろしくお願いしますね！」

「……………（あれが世界初の男性操縦者なのね…）」

「……………（そしてもう一人が篠ノ之博士が直接目にかけてるっていう男の子）」

「……………（わたくしはどう動くべきでしょうか）」

「……………（一夏…）」

先生が頑張って二の句を告いでも、一同は華麗にスルー…あ、先生がもはや涙目だ。

なんというか、普通に申し訳ないのでここは助け舟を出すことにしよう。

えーと、とりあえず原作ネタでお茶を濁すかな？ こういう時転生してるのって便利だ。…致命的に使い方が間違っている気がするけど。

「へえそうなんですかー。反対側から読んでも『ヤマダマヤ』なんですねー、アハハー（棒読み）」

「「！」「」」

「そ、そうなんですよ！ 先生昔随分からかわれちゃいましたっ！ あ、せ、先生も自分のこと言いましたし、それでは生徒の皆さんも自己紹介もお願いします！」

やべえ棒読みすぎた。ふいー、危なかったぞ僕。一応なんとか先生も場の流れを取り戻せたようで何よりだね。

『ありがとう！本当にありがとう！』と口パクで何度も僕に頷く先生。いや、美人に涙目の笑顔でお礼を言われるなんて嬉しいなあ。しかし先生、そんなに首を動かすと胸部の兵器が上下にぼいんぼいんして目の毒なので止めたほうがいいと思いますよ？

どうでもいいけど、巨乳はやはり人類の宝だと思う。どうでもいいけど。

「「「……………」」」

じーっ。

…しかし、今の行動の対価として一夏に向けられていた視線が一気に僕に切り替わった気がする…！早まったか…！！

「……………」です。よろしくお願いします…」

「はい、それでは次に、オルコットさん」

「ふふっ…わたくしの番ですわね？セシリア・オルコット、代表候補生ですわっ！」

そんなわけで、気を取り直して自己紹介。

現在ドヤ顔なのがイギリスの代表候補セシリア・オルコット、通称ちよろいさん。最初ツンツンだったのに一夏に一瞬でデレたあたりが名前の由来である。

僕の前世の知識通りなら、彼女はこれから一夏とケンカに遭ってヒロインの一人になるはずだ。なんというか、話の都合で彼女のデレるスピードは異常に早かった。

とはいえ彼女のフォローのために言わせてもらうと、これは一夏の女子を落とす技術のせいでもあると思う。隣で見えて思うけど、尋常じゃないモテっぷりだからね一夏も。

やれやれ、今まで何回あの朴念仁に女子がオトされたことやら…主人公ってのは本当に凄いなと思う（いろんな意味で）。

でも正直、双子の兄（僕）を巻き込んだりするのは止めてほしい。

「……はい、それは次に…織斑一夏くん…弟のほうの織斑くんです、お願いします」

あ、次は一夏の番か。噂をすればだ。

なんととはなしに隣にいる一夏のほうを向いてみる（ちなみに僕と一夏の席は中央最前列だ）。このフラグ男はいたいどんな自己紹介をするんだろうか？原作通りだと正直面白くないので何かしらのネタを期待したいところだ。

「………かんは…によって…用化され……」

…ん？独り言？

「？織斑くん？」

「おい、一夏？」

返事がない。どうしたんだろうか、と思い下を向いている一夏の手元を覗き込んでみると、

「…………エネルギー系統の兵器と実弾兵器はやはり現在もほぼ同程度の能力でありそれぞれの特性を理解して把握しておくことが必要ぶつぶつぶつ……」

「……………」

…一夏、まだ必死こいて予習してたのか。気づきなよ山田先生に。どれだけ没入してるのさ。

本当に何やってるんだらうこのバカは…まさか自己紹介以前にツコミ所を用意するとは思わなかった。多少僕のせいだけど。まあ、とりあえず。

「姉さん、よろしくね」

「ここでは織斑先生と呼べ。さて——自己紹介くらい、ちゃんとしろ馬鹿者」

ゴパン！

「うごがぶぶべばッ!？」

IS学園恒例・出席簿攻撃は無駄を生じぬ二段構えである。振り

下ろされた一撃と、机に顔をぶつける姿は非常に痛そうでした。いやー、僕はああいうのを防御できるチートを貰っておいてよかったよ。

「ち、千冬姉…！？なんでここに居るんだ！？」

「『織斑先生』だ。いいからさっさと自己紹介をしろ」

「ご、ごめんね織斑くん大丈夫…？い、いまクラスの皆で自己紹介してて、それで織斑くんの番が来たから、ね？」

「え、ええマジですかもう始まってたのか…！？ていうか、いきなりそんなことを言われても俺無理で」

「次は零夏に出席簿を持たせるぞ」

「それだけは勘弁して下さいッ！！織斑一夏ですよろしくお願いします…！！」

待つんだ2人とも。いくら僕の筋力が人類最強だからと言って、そのやり取りはやめてほしい。まるで僕が出席簿を持ったら一夏が死んでしまうかのようなリアクションじゃないか。本気でやればそうなるんだけども。

一夏が顔を青ざめさせてガタガタ震えているあたりがまた信憑性を与えているらしく、クラスメイトに『えっ、織斑（兄）くんってどんだけ怖い人なの！？』的な目で見られてるよ僕。

「さて…すまなかったな、山田先生。身内が迷惑をかけた」

「い、いえそんなことは！零夏くんのほうは、私にフォローもしてくれましたし…」

「ほう、そうか。まあ多少は本人のせいでもあるしな」

いえ、それは明らかにウサギさんのせいだと思います。

僕のぼっちフラグを立てつつ、しかし姉さんはこれを敢えてスルー……！なんてこったい遊ばれている……！！圧倒的遊戯……！！

まあ、肉体的には僕のほうが強いから姉さんはたまにこのようなコミュニケーションを取るんだけどね。そういう所はやっぱり束さんと似ているんじゃないのかな？類は友を呼ぶというやつか。

「なら丁度いいな。零夏、お前も自己紹介しろ」

「えっ」

「丁度お前の順番だ、問題はないだろう？」

いやいや姉さん。物事にはタイミングっていうものがあるでしょう？ハードルを上げておいてそれはないと思うんだ。

抗議の視線を送ってみたが不敵な笑みで返された。ひょっとすると束さんと同列に扱われた仕返しかもしれない。心を読むあたりも似てるんだけどね。

え、えーと……しかし、どうすればいいんだろう？この状況。とりあえず席を立ててみると一部の女子がビクッ！と動いた。なんか危ない人扱いされて悲しい。

「……えー、皆さんウサギさんのせいでご存知だと思いますが、織斑零夏です。一夏とは双子で、僕が兄ですね。趣味は普通に漫画とか読んでます」

とりあえず普通に自己紹介を言ってみたものの……や、やばい！『

とりあえずさっきの千冬様の発言について詳しく教えてください！
』
的な視線が痛い！！

こ、この後僕は何を言えがいいのさ！？この状況で好きな食べ物とか言っても多分フォローにならない！しかしフォローしないとクラス内で危険人物扱いされる！

いくらチートがあってもこういう状況にはてんで弱い僕である。
仕方ないでしょ！前世はコミュ障だったんだよ僕！と、とにかく何かを言わなきゃマズイ——ええとアレだ！こういう時にはネタに走るか！？ネタって何を言えいいんだよう！！

「なんだ、それだけか？お前にはもっと言うべき特徴があるだろう？」

「え？織斑先生、それはどういう…」

「山田先生も知っているはずだ。なにせ、とある馬鹿者が全国に堂々と放映したからな」

混乱している僕を見て、楽しそうに姉さんが言う。

いや、僕だってソレを言えばフォローになることは分かってるよ！でもあんなこと自分の口から言いたくないってば！

「まあいい、なら私が言うだけだな」

「ちょっ…姉さん！？流石にその落とし方は酷くない！？」

「先生と呼べ。…さて諸君、君達の知っているが、コイツが私の弟であり、世界で2人目のIS男性操縦者であり、そして——」

「――世界初の、『形を持たないIS』の持ち主だ」

（いや、実はそれ嘘なんだよねー）

言うタイミングを完全に逃しちゃったけど、いつ説明できるんだ
ろうか、これ。

L i f e 1 大嘘吐き、世に憚る（後書き）

説明回ですみません。

さつさと女の子と主人公を喋らせたいです。ヒロイン未定とは書きました。精神年齢的にも年上組が絡ませやすいかも。特に山田先生と束さん。

チートが何なのかは次回詳細説明ッ！！

それと、まだ第一話なのに日刊ランキングに載っていました。ありがとうございます、これから宜しくお願いします。

L i f e 2 その魂、鋼鉄の如く（前書き）

※この作品の原作はI Sです。

Life 2 その魂、鋼鉄の如く

大英雄ヘラクレス。

英雄としては拔群の知名度を誇っているその存在を、僕はとあるゲームの中で知った。

『――バーサーカーは、強いね』

生まれた瞬間から死を決定づけられた白い少女。

彼はその少女を主として現代に蘇り、とある『戦争』に挑むことになる。

しかし、彼はその肉体を強化するために、『狂戦士』という位階を与えられ、かつての人生でそうであったように――狂気の呪いを身に受けた。

絶大な力と共に、彼はまたもや理性を奪われたのだ。

結論から言ってしまうえば、それは恐らく失敗だった。

あるいは理性があれば、生死を共にした武器さえあれば、彼は敗北しなかったかもしれない。少女を守り、救えたかもしれない。泥にまみれて、黒く染まることもなかったかもしれない。

けれど。

——言葉はない。理性すらない。

——幾多の敵を屠った、無双の技術も振るえない。

それでも、彼は戦い続けた。

愚直なまでに戦うことしか知らず、幾多の試練が道を塞いでも——その身が滅びるまで、彼は決して止まらなかった。言葉がなくても、彼は確かに、その身の全てで語っていた。

——『少女を守る』、と。

その姿を、僕は心の底から尊敬する。

どれだけの苦難も、危険も、脅威も、傷も、死ですらも、全て彼は受け止めた。誰よりも死に近く、誰よりも死ぬことの恐ろしさを知っているのに、彼はそれでも戦い続けたのだ。

いやはや、真似できる気がしないよまったく……まあ、だからこそ彼は『英雄』なんだろうけどね？僕は別にそんなものにならなくていい。

ならなくて、いいけれど。

——もし叶うなら。

ほんの少しだけでいいから、彼のようになってみたいと思ったんだ。

生前、数多くの試練を越えて、その分だけ彼の肉体は強くなっていった。

そして——すべての試練を越えた彼の肉体はついに、ひとつの『鎧』として成立するほどとなった。それから先、『神秘』を持つたその鎧は、多くの傷から彼を守り続けたという。

その神秘の名を——『^{ゴッドハンド}十二の試練』、と呼ぶ。

『いや、この鎧がまた凄い性能でしてね。彼が越えた十二の試練の数だけ死んでも蘇生して、なおかつアッチの世界の定義でBランク以下の攻撃を無効化するんですよ』

『ふーん。なんていうか、れーくんは設定に酔いまくるタイプなんだね!』

『機械設定に酔いまくるアンタにだけは言われたくないわ!!』

『あ、そういえばそうだね! いやあまたれーくんとの共通点を束さん見つけちゃったよ!!』

『怒らせてよ! 開き直られると僕どうすりゃいいのさ!!』

なーんて会話を束さんとしていた僕だったりする。

転生をぶっちゃけた以降、僕は妙に束さんに懐かれた。

あの時を境に、突然ふらりとやってきて、れーくんのことを教えてーだの一緒に寝ようよーとか言われながら抱きつかれるだのされるようになったんだよね。ちなみに僕が断ると姉さんのところに行つて抱きつき、アイアンクローを食らってまた僕のところに戻ってくる。無限ループって怖くない？

…これが一夏なら何も気付かずに対応するんだろうけど、僕はそこまでニブチンじゃないので『あれ？なんか妙なフラグ立てちゃった？』とか思ったよ。まあでも、どうも無害っぽいので当時は放置することにしちゃったんだ。

どうせ『十二の試練』^{ゴッドハンド}があるから物理的には大丈夫だし、いざとなったら姉さんを頼ればいいやーとか思ってたんだよね。

…今思うと、この選択がそもそも間違っていた。『おっぱい柔らかいぜイヤッホウ！！』とか考えてた当時の僕を宝具で三回くらいブツ殺してやりたい。

そんなわけでグダグダに過ごしていた僕の運命が動いたのはその随分後、一夏がISを起動させちゃった時である。

「そう、それですよお兄さま！ 私たちはその話が一番聞きたいんですッ！！」

「さあさあキリキリ吐いちゃいましょうよ！！」

「いやいや君達急に態度変わったね！ その変わり身に驚きを隠せないよ！！」

「アハハ、大人気だな零夏」

「黙れ小僧！」

自分に対する視線の量が減ったからって僕を煽るんじゃない一夏！ なんなら姉さんに出席簿を借りてきても——あ、ごめん冗談だから。 そんなにガタガタされると僕もマジでへこむからやめて欲しい。

——さて、現在は休み時間である。

姉さんのぶっちゃけトークの直後ということもあり、僕のもとにはクラスメイトが殺到して質問攻めに遭っている状況だ。

さっきまで危険人物扱いしてたのに：好奇心にはやはり勝てないということなのだろうか？ いやまあ勿論ああいう目で見られるよりはマシだけどね：

「で、お兄さま！ そもそも篠ノ之博士とはどういう関係なんですか！？」

「いや普通に近所のお姉さんみたいな感じだけど：というか『お兄さま』って何さ」

「いや、なんだか織斑くんって年上オーラが漂ってきますからつい：そういうところは千冬様にけっこう似てますよね？」

「確かにそれは良く言われるけれどその呼び方はどうなのさ：」

転生者だからね。精神年齢が上なのは事実だからそう思われるのも仕方ない。加えて、ヘラクレスの能力のせいで身体はしっかり筋肉ついてるのも年上扱いされる要因なんだろうなあ。

…でもさ、流石に僕もクラスメイトに『お兄さま』なんて呼ばれることになるとは思わなかったよ。

これが弾あたりに知られたら僕はマジギレされて殴りかかれるかもしれない。効かないけど。

「とはいえ同い年なんだから別に敬語なんていらないよ？」

「い、いえっ！と、特に意味があるわけではないのでお気になさらずッ！」

「偉い人は言いました！『LESSON4 敬意を払え』と！」

「漫画じゃん！というか君達やっぱ怖がってるよね僕のこと！？」

「ひいっ！？ご、ごめんなさいいいい！！！」

「なんか反応がガチですごい傷つくよ！どうしてこうなった！！！」

「ま、まあ落ち着けて皆。零夏は確かに異常な強さだけど、それは束さんのISのせいだって知ってるだろ？」

流石に引け目を感じたのか、一夏が空気を読んでフォローを入れてくる。

確かに僕がドン引きされた原因のひとつは一夏のリアクションなわけだけど——でもそれ、ISのせいじゃないんだよ一夏。

「あ、ああそうそう『形のないIS』についても聞きたかったんですよお兄さん！」

「織斑（弟）くんのリアクションは、『こっそりISを起動して攻撃できるから』なんですすよね！？決して素で頭を吹き飛ばせる能力を持ってるわけじゃないですよね！？」

「え、えーと…うん、そういうことになる…ね？」

「」「良かったあああああ……！！」「」「」

…実は頭を吹っ飛ばすどころか、衝撃波で全身をバラバラにするくらいの力は持つてるんだけど、この流れだと真実がものすごく言いづらい。ごめんなさい、今僕はウソをつきました。

はあ、まいったなあ…こうして僕は束さんの策略にハマッていくのか…これだと誤解を解こうにも解けないじゃないか。そもそも、束さんがああいう真似をするから僕が色々勘違いされることになったんだよ。

うん、折角だからその時の様子を思い返してみよう。はい回想シーンはこちら。

『結局、一夏はISを起動したけど僕はなーんもなかったなあ…よかったよかった』

『やれやれ、薄情なことだな。弟がISを起動させたというのに』

『むしろ向き合い方を変えないところを褒めてほしいよ姉さん。…あー、平和なメシは美味いなあ』

——その時僕は、僕はお菓子を食べながら自宅の居間でグダグダしてる最中だった。

ちなみに一人ではなく、たまたま休日だった姉さんも寝転びながら酒を飲んでいるところである。

『ブリュンヒルデが酒を飲む』とか書くと絵画のワンシーンのよう

に聞こえるけど、実際飲んでるのは缶ビール：一気に俗っぽくな
ったね。仕方ないね。

『落ち着いたものだ：お前はまさか、束から何か聞いてたんじゃな
いだろうな？』

『あっはっは、それは無いって。というか聞いてもわからないでし
ようぜ：って姉さん、僕のポテチ取らないでよ』

『このくらいはいいだろう、たかだか一枚だ：というか、相変わら
ず食う量が多すぎないかお前は』

『姉さんこそビール七本目は多すぎるんじゃないかな？』

『ここのところ忙しかったからな。今日一日はゆっくりさせろ』

『まあ、IS学園の教師なら仕方ないか：まったく、いつあんなと
ころに就職してたのやら』

あ、ちなみに僕は身体の都合かやけに大食らいな体質である。漫
画とかでよく大食いキャラがメシ屋を荒らしたりするけど、まさか
自分でやるとは思ってもみなかったね。

今もポテチ（大型）を三袋目を開けたところだ。ちなみに飲み物
は普通にコーラだけど、これも2リットルの3本目。それなのに特
に太る様子もなさそうなので世の女子を敵に回しそうだ。

『：いやーしかし、のんびりするのはやっぱいいね』

チートなんて使わないに限るよ。色々バレたりこっそり使ったり
したこともあったけど、人生危険とは無縁なところでゆっくりして
いるのが一番さ。こうして姉と寝転び無駄な時間を過ごすことは非
常に幸せなことだ。平和万歳。

そういえば、今頃一夏はどうしてるかな？そろそろアイツは家に

帰ってこれるんかねえ…あ、ニュース見ればすぐわかるか。何しろ最近『世界初の男性IS操縦者』で持ちきりだからねえ。

姉さーん、TVつけてー。え、面倒だから自分でやれ？なんだよケチだなあ…まあいいか、リモコンリモコンっと。

ピッ

『【いえーいちーちゃん！箒ちゃん見てるー！？織斑零夏ー！通称れーくん見てるかーい！！】』
『ぶふウツツツ——！！？』

——思わずコーラ吹いた僕を許してほしい。

脈絡もなく突然TVに知り合いが映ったら貴女はどう思いますか？それがたとえ世界を変えた天才であっても、僕なら正直超ビックリすると思います。というか今まさに驚愕の最中だ。

『ゲホガホ…た、束さん！？』

『……零夏、TVを今すぐ消せ。今日は休日だからな』

『え、スルーすんのこれを！？』

『【おっと待ったちーちゃんその扱いはないと思うな！わざわざTVの全チャンネルをハックした束さんの手腕を褒めるところだよここは！…！】』

『アンタ今リアルタイムでここを見てるだろ！ナゼミテルンデス！？』

って待て！今さりげなく束さんがとんでもないこと言ったよね！
これ今全国で放映されてるのかよ！僕の名前も思いっきり今放映中
なの！？

高校受験も無事に終わらせて平和を満喫してたのに何をやらせる
気さー！あ、ちなみに学費の安いところをサクッと推薦で通りまし
た。みんな、勉強しておくのは大事だぜ。

やばい、なんか脳内がちょっとづつ現実逃避を始めている。嫌な
予感しかないよ…！僕の前世までの経験やら英雄の危機察知能力
が叫びまくってるよちくしょう！

『そんなわけで僕はTVを消すぞジョジョオー！ってあれ、消えな
いし！なんで！？』

『ふっふっふ。れーくん甘いね！束さんの魔の手から絶対に逃れ
られないよ！』

『アンタうちの家庭に何か色々仕込みまくってるだろう！というか
さっきから微妙に危ないネタ混ぜるのやめなさい女の子なんだから
！！』

『…何をする気だ束…ここまで大掛かりな真似をしている時点で、
既に色々問題は出ているだろう』

『ぶー。束さんは悪くないよ？そもそもこんな真似をしたのはい
つまでたつてもれーくんがノーリアクションだったのが原因だもん
』

『？一体何を言って…』

『さーて世界中の皆さん束さんのニュース速報だよ！なんといっ

くんのお兄さんのれーくんもISに乗れることが判明しました!!」
』

えっ。

いや、乗れませんけど。

『いやーあの時はビックリしたね!なぜか束さんの極秘開発してたISに適合したんだよ!せっかくだからどーんとそのままプレゼント——』
』

そんなものを貰った覚えは無い…というか、束さんの言いたいことがわかりかけてきたぞ?

彼女はどうかやら、僕のことをIS操縦者の仕立て上げたいらしい。
：いやいや、やめてよ!束さんのことだからIS学園に放りこんだら面白そうだなーとか考えてるんだろうけど僕バトル展開とかダメなんだってば!

は、いや待て。冷静に考えると僕がISを使えないのは本当だし、何か言われてもラファールだの打鉄だのを触って『ほら動かないでしょ?』とか言えればいいだけ——

『——したのがかれこれ数年前だよ!凄いでしょれーくん!バレずに色々仕込んだ束さんの手際をほめてほめて!』
』

『アンタ何やってんだああああああ!!?』

『【いやはや、束さんもいい仕事をしたよ!あ、ちなみに絶対安全なようにれーくん以外には起動できないようにしておいたから!まあそのせいで他のISに反応しない変なバグが出たけどたぶん大丈夫なんじゃないかな!!】
』

『開発者のくせに何故そんなに適当なんだ…』

それはね姉さん、そもそも僕的能力はISじゃないからさ。興味が無いからたぶん投げっぱなしなんだろう。そもそも作り話だし。…というかこれ、完全に逃げ道が塞がれているんじゃないか!?

『…おい、零夏。とりあえず持ち物を確かめろ、今の話が本当なら待機形態のISがあるはずだ』

『【ああ、ダメだよーちゃん。その方法じゃ見つからないから】
『なに…?』

『【なにせそのISは——世界初、『形のないIS』なんだからね!—!』

とまあ、これがTVで壮大に放映された内容である。

篠ノ之博士直々にTVをジャックして発表された内容だけにかなりの信憑性だったらしく、その後僕はなんやかんやで日本政府に呼ばれ↓IS学園に転入のコンボを食らってしまったのであった。

くそう、あの時点ではまだフォローができた範囲だったのに…学園の転入試験でつい相手をボコしてしまったのが間違いだったんだ…!

「とはいえ、そのISの詳細はぜんぜん説明されてないよな」

「あー、そういえばそうだねえ」

そもそも一夏も僕のことを知ったのはごく最近だし、戦闘シーンを見たのは姉さんと一部の相手だけだ。詳細に至っては束さんです

ら完全には知らない。まさしく謎に包まれたISに見えているに違いない。

「ねえねえ、よかったら教えてくれませんか？クラスメイトのよしみということぞ！」

「えー、あー…？どうしようかなあ」

「えー、勿体ぶらずにささっと教えて——」

と、名も知らないクラスメイトが僕を急かそうとした瞬間——

「——ちょっと、いいか？」

「——ちょっと、よろしくて？」

「「え？」」

2人の少女の声が重なった。

僕と一夏がその声のする方を向いてみると、

——黒髪の少女が、一夏のもとに。

——金髪の少女が、僕のもとに。

様々な想いをその胸に込めて、目の前に立っていた。

かくして、物語は始まる。

しかし、それが台本通りに進むかどうかは、まだ誰も知らない。

Life 2 その魂、鋼鉄の如く（後書き）

ヒヤッハア！何故ランキング五位とかに乗ってるんですかね！プレッシャーで潰れる！潰れる！

いやはや予想外の評価に驚きですね。皆さんありがとうございます！

本文のうんちく。

英雄ヘラクレスはゼウス神さんとその愛人的な人（？）との子なのですが、ゼウス神の奥さんであるヘーラーさんという方はヘラクレスを酷く憎んだそうです。

ヘラクレスが狂気に満ちたのはこのヘーラーさんが吹き込んだせいのようなですね。Fateの本編を考えるとなんとも皮肉なものです。ぶっちゃけヘラクレスって狂気が無ければマジで対抗できるのは本気のギルくらいしか居ないそうです。気の毒に…

L i f e 3 乗り手の矜持、彼の者知らず（前書き）

セシリアさんとダベツてたら終わってしまった…

このままだとアレなのでこの後L i f e 4を連続投稿します。

しばらく後で、しかも短めになると思いますがお待ちください。

Life3 乗り手の矜持、彼の者知らず

セシリア・オルコットの気分を一言で表すなら、彼女はひどく不満だった。

ISが開発されてからの十年で、世界がその形を変えたことは記憶に新しい。

その中で最も顕著な変化は、男性の地位が下がり、女性の地位が上昇したことにより女尊男卑となったことだろう。街の一角で女性が男性を使い走りに使う程度のことは、今では世界中に溢れてしまっている。

——記憶に蘇るのは、ただ母の言うことを聞くことしかなかった父の姿。

セシリアにとって男というものは、自分の意志すら表に出せない情けない存在でしかなかった。

プライドもなく、全てを諦めてしまっている姿はとても、とても彼女には我慢できないもので、いつしか彼女は男性というものが心底嫌いになった。

だから、自分はああはなるまいと彼女は努力を重ね——ついに、イギリスの代表候補生にまで成長する。

家族の名に恥じないように。

自分の誇りを裏切らないために。

そして、彼女はまだ歩みを止めることはない。

(わたくしは、もっと、もっと——強くなります)

——あんな『弱い』男達とは違うのだと、証明するために。

それが変わったのはごく最近のことだ。

世界初のIS男性操縦者の登場——それを聞いて、世界の誰もが驚いた。

セシリアもそれは変わらない。しかし他と違う、代表候補生という立場の彼女は、こうも思ったのだ。

——ひょっとしたら、その男は、自分が知らない『強い男』なのかもしれない。

そんなかな希望はしかし、数日後にとあるニュースで揺れ動くことになる。

『形のないIS』を動かした、とある少年の登場によって。

「頑張るんだモッピー！僕は君のことを全力で応援してるぞっ！！」
「その名で呼ぶなこの馬鹿者があああっ！！」
「貴方、わたくしのお話を聞く気がありますのおおおおおおッ！！？」

やあ、ようこそIS学園へ。この出席簿はサービスだから落ち着いて受け取って欲しい。

うん、すまない。メインヒロインの出番は『カット』なんだ。謝って許してもらえとは思ってない。でも、確かに彼女はここに居てしっかりと一夏をイベントをこなしているからそこは安心してほしい。

彼女の魅力を知りたいなら原作を読もう。じゃあ、この叫んでる子に意識を戻そうか。

なーんてメタ発言満載のことを思いながら、僕は今こめかみに青筋を立てながらこつちを睨んでいる金髪さんの方に向き直る。

え、結局箒ちゃんはどうしたのかって？今一夏と屋上行っちゃったよ？束さんのこともあってか僕はあの子にあんまり好かれていないだよねー。

だからまあ、とりあえず一夏とのアイコンタクトによる協議の結果、オルコットさんのことは僕が引き受けて、一夏には箒ちゃんを任せることにした。

どうせ次の時間には一夏もオルコットさんに色々言ったり言われたりするんだ、これくらいが妥当だろう。しかし一夏は休み時間ごとにフラグを立てる作業を行ってるなあ…

「(……ビキビキッ!)」

と、いい加減オルコットさんが僕に殴りかかってきそうなので謝っておくことにしよう。流石に三分ぐらいスルーし続けていたらこうなるよね。

「いやあ、ごめんねオルコットさん無視しちゃって。あの子とは数年ぶりに会ったからさ、挨拶くらいはしておこうと思って」

「明らかに彼女を煽るためだけにやってみましたわよねえ！？人が真面目な話をしようとしている時にそんな態度を取って恥ずかしくないんですの！？」

と、言われましても。

この後一夏に『この私と話せて光栄だと思いませんの！？』とか言う人が言えるセリフじゃないよねえそれ。女尊男卑とはいえモラルの問題は大事だと思うよオルコットさん。まあ、僕がそんなこと言えた義理じゃないんだけど。

：それにしてもこの子、からかうと非常に面白いな。今後ともちよくちよく遊ぶのもいいかもしれない。レイカは楽しそうだといやっちゃうんだ☆ レイカ知ってるよ、セシリアはちよろくてえろい女子なんだってこと。

「この：ツ：ふ、ふう。まあいいですわ、それよりも貴方には聞きたいことがありますもの」

「ん、なんだい？」

「本当は織斑一夏のほうにも聞いておきたかったですけど――」

おや、切り替えの早さは流石代表候補生と言ったところだろうか。まあ煽ったのは僕なんだけどね。正直すまんかった。

ほら、僕って精神年齢が上だからさ、年下で遊びたくなることがたまにあるんだよ。姉さんも束さんもよくやるアレさ。これはたまにバカやりたくなる病気みたいなものだからね、仕方ないね。

そんなくだらないことを考えていた思考は、彼女の次の言葉で一気に冷却されることになった。

「――貴方にとって、ISとは何ですか？」

その質問は、僕にとって避けられない言葉だったと思う。

『形のないIS』について、周囲に知られている情報はあまりにも少ないが——それを全て並べるならば、以下の通りになる。

ひとつ——そのISには、形がない。

装甲はない。それどころか、待機形態すら存在しない。ISに存在する様々な出力装置を小型化したのか、透明にしたのか、はたまた肉体の中に仕込んだのか、『それら全てが一切不明』であり、防御は全て不可視のエネルギーシールド——すなわち、『絶対防御』のみで行う。

故に、パッケージの換装や、武装の変更などは不可能。今の世界で主流となる『あらゆる目的に適応する』ことに真っ向から逆らう、『最強の一』を求めたIS。

ひとつ——そのISは、飛行能力を持たない。

他の全てのISが持っている、空を、宇宙を飛ぶための翼が、それには無い。

宇宙空間での使用を前提にしているはずなのに、その機能をオミットし——その代わりに、他の全ての現行機を超越する出力を持つIS。

ひとつ——そのISは取り外せない。

すなわち、調査不能、解析不能、そして制御不能なIS。

その機体を使えるのはただ一人だけ。すなわち——この僕、織斑零夏『のみ』にしか扱えないのである。

…とまあ、これらが僕の能力の概要。

そういうわけで、これらの力を持っている僕の背中には、とんでもない責任がのしかかっているわけだ。

『形のないIS』を持っていることの異常性はそれだけでは済まない。なにせ隠密製に特化しているのにパワー最強、現行ISとは別ベクトルで集約された技術力。どれも価値があるというだけの一言では済ませられないレベルだ。

おまけにこのISは束さんお手製の『どの国にも所属していない』機体ということになっているので法的な拘束も難しく、同時に、あらゆる国が引き入れることに躍起になっている存在でもある。

だから、僕はいつか問われるだろうと思っていた。

——ただの1学生のお前が何故、いきなりそんな力を手に入れられるんだ。

お前は、我々の努力をなんだと思っているんだ、と。

「：なんで、そんなことを聞くんだい？」

「わたくしは、代表候補生ですから」

思考に区切りをつける。

とりあえず、彼女の質問に回答するには保留して、こちらからも問い返して情報を得ることにしよう。質問を質問で返すのはよくないがまあ仕方がない。

「代表候補生というのは、そう簡単になれるものではありませんでした。座学も、実習も、実戦も：わたくしは他人よりも努力して、だからこそ今の居場所に居ます」

「だから、いきなり専用機を渡された僕が気に入らないと？」

「それもありますが：正直な話、貴方と織斑一夏はモルモットのようなものでもあります。それだけならばわたくしもこんなことを聞きはしません」

オルコットさんの真面目な雰囲気を感じてか、周りのクラスメイ

トは沈黙を保ったままだ。空気が張りつめて少し息苦しい中、僕と彼女は会話を続ける。

：モルモット、というのは確かにそうだ。力を手にするかわりに、他人からの視線は否応なく突き刺さってくる。何かを得るためには同等の対価が必要だ、というのはある程度確信を突いた言葉ではあるよね。

無言で先を促す僕に、彼女は問う。女性として、代表候補生として、IS操縦者という努力をした者の代表として、僕に言う。

「わたくしが聞きたいのは——貴方達のISは結局、篠ノ之博士の都合で『渡された』ものでしかないのではないか、ということですよ」

それが彼女の不満の理由だった。

東さんの都合。そう考えるのは大勢の人にとって極めて自然な流れだ。

ISの『製作者』——篠ノ之束。

世界最強の『ブリュンヒルデ』——織斑千冬。

世界初の男性操縦者——織斑一夏。

僕のまわりには、こんなにもISの重要人物が溢れている。故に、あらゆる人が思っただろう。織斑零夏は、ひょっとしたら織斑一夏も、

篠ノ之束に『選ばれたから』ISに乗れたのではないかと。

彼女が求めているのは強い男性だ。だから、こんなにも『都合よく』織斑の関係者だけがISに乗ることができているのが気に入らない。

ひょっとしたら、僕達はただのエコ贖罪でISに乗れているだけではないのか？

結局は強い男性など居らず、ただ女性に力を与えられているだけではないのか？

そう、彼女は『不満』を…あるいは『不安』を抱いている、ということだろう。

「そこでISをどう思っているか、に戻るわけだね」
「…そうですわ」

何を思っているか。どう受けとめているか。力が手に入ったと喜んでいいのか、こんなものは必要ないと憤っているのか。

そんな僕の様子から、彼女は男性というものがどういうものなのかを推し量ろうとしているのだろう。

はてさて。一体僕はこの問いにどう返すべきなんだろうね？

様々な回答が脳裏に浮かんでくる。僕はその中から自分の選ぶべき言葉を捜そうとして――やめた。

…考えるまでもないことだったね。

「身体の一部だよ」

「…え？ な、なんですって？」

「意味がわからないだろう？ ああ、これはISのことを大切に思っているわけじゃない。正真正銘、僕にとって『これ』は『身体の一部』でしかないんだよ」

「な——何を言ってるんですの、貴方は!?! ISには自己進化を促すコアが搭載されています、そんなことすら知りませんの!?!」

知っているさ、そんなことは。

だからこそ、僕はこう答えているんだから。

「:『これ』を君たちがどう捉えているかなんて僕にわかるわけがない。だってそもそも、僕にとっての『IS』と君たちにとっての『IS』は別のものなんだから」

「そ、それはどういう意味ですの!?!」

「説明してもわからないさ。僕が君の言葉をわからないようにね」
「な、何を…」

僕が返すべき回答。それは——

……。

——そんなもの、あるわけが無いッ!

大体、束さんの大嘘を信じているオルコットさんの真面目な話を、僕が真面目に返していいはずもないだろうに。そもそも、僕はISに乗れないんだからそんな文句を言われるのはお門違いだよ!

そういうのは『本当にISに乗れる奴』に言うべき文句でしょうに。僕は違います、人違いです!

噂でバカにされるくらいは我慢してあげるから、君は本当に文句を言うべき相手に言えばいいんだ。

「だけどもあ、君の文句も一応スジが通ってるから、ヒントくらいはあげよう」

「ちょっとお待ちになりなさい！話はまだ終わって——」

「一夏と向き合えば、答えは出るよ」

「！！」

そう、考えるまでもない話なんだ。

ヒロインには主人公を当てればいいだけの話さ。

ISの誇りとか僕は知らないよそんなこと。『英雄』の誇りの話なら真面目に対応するけど、男の操縦者うんぬんな話題に関しては全部一夏に言いなさい。どうしても僕に文句が言いたいなら束さんを連れてきて一緒に怒るべきだね！

というわけで、僕は彼女の怒りを全部一夏に丸投げすることにした。うん、それが妥当なことだと思う。そもそも、僕は本来いないはずなんだから、このくらい許されるだろう。多分。

だから、僕は彼女に言ってる。

「君に答えを出すのは僕の役目じゃない。一夏の役目だよ」

そう、彼女に告げた瞬間。

キーンコーンカーンコーン。

「「あ」」

かっこよく決め台詞を発した瞬間にチャイムが鳴った。なんという狙ったようなタイミングだろうか。いやはや、チャイムとセリフがかぶったら僕恥ずかしすぎて死んでたね。厨二病とかいうレベル

じゃなかったよ。

今の音で硬直が解けたのか、わたたとクラスメイトが座席に戻っていく。次の授業の準備もしておかないと出席簿が飛んでくるだろうからねえ。教材がめっちゃ厚いのもあって面倒だね、仕方ないね。

「く、この…っ！あ、後で弟さんと一緒にまたお話を伺いますからねっ…！」

そう言い残してオルコットさんは去っていった。

ああ、申し訳ないけど僕、次の休み時間は男子トイレ搜索の旅に出なきゃいけないからその要望には応えられそうにないや。実は原作で『男子トイレないんじゃない？』疑惑があったから割とマジで探しておかないとやばい。

…っていうか、あるよね？男子2人になったしトイレくらいあるよね？用務員のおじさんも居るらしいし、頼むからあると言ってくれ——ッ——！！

「ん、どうしたんだ零夏？ヘンな顔して」

ちなみにその後、どうやらよっぽど焦っていたらしく、戻ってきた一夏にそんなことを言われてしまった。はっはっは、一夏も気付いたら似たような顔になるさ。

Life3 乗り手の矜持、彼の者知らず（後書き）

※本文を見返すとただかっこいいだけの空気を匂わせていたアホだったので修正しました。

補足しますと、

そもそも零夏は文中で言っている通りISには乗れません。

故に、嘘のせいで自分が色々言われているのことに對して、なんでわざわざ自分が返答する必要があるんだ、と彼は考えています。

また同時に、ウソを自分で受け入れて彼女の望むような回答を出すことも不誠実だというのが零夏の思考ですね。

※という事を書いていたつもりが、訂正前はただのかっこ良い空気を出しているだけのアホでした。作者の顔は真っ赤です。

こういう点からさりげなく、『IS』と零夏の『異能』には決定的な断絶が広がってるんだ、なーんてことをアピールしてみたり。

さて、次のあとがきでは忘れそうなので書いておきますが、僕はリアル生活の方では風邪をひいてしまいました。

皆さんも体調管理にはお気をつけてください。寒いのはヤバイです。さて、その分を取り戻すためにも次を書くぞー。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂（前書き）

前話を修正しました。

色々ミスがあったのです：なんというか、自分の伝えようとしていたことが書いてみると意味不明なことってよくありますよね：

とか短いはずだったのに過去最長だよ！一体どういうことなんだ！もう朝チュンの音が聞こえてるわ！

推敲は申し訳ありませんが昼頃になると思います：誤字や意味不明な部分等あったらすみません。

Life 4 凡人の心、英雄の魂

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

時は流れて、現在三時間目の頭である。

結局次の休み時間をトイレ搜索に費やした僕は、教室に帰ってからオルコットさんにキッ！と睨みつけられるという流れを経て座席に座っていた。あ、ちなみにトイレはきちんと見つかりました。よかったよかった。

実は二時間目、山田先生がぼろつと『ISはブラジャーに関連してますよね』なんて話をして、またもやクラスメイトの視線を釘付けにした事件等があったけど割愛させてもらうよ。原作通りだったし。

ちなみに僕の目は恥ずかしがって胸を押さえた山田先生の、寄せて上げられた巨乳に釘付けでした。男だもの仕方ないでしょう…その後姉さんに出席簿攻撃を食らったけど、僕に悔いは無い。痛くないし。

「クラス対抗戦とか代表って、要するにそのまんまの意味ですよね？」

「ああ、そうだ。付け加えるなら、代表者は今後もクラス長扱いで一年間は変更無しになる」

で、今の状況は姉さんの思い出すような発言に対して一夏が手を上げ、それに姉さんが応えたところである。

いやーそれにしてもすごいよ一夏、原作より頭いいね！原作だと

代表候補生の意味もわかってなかったからね！これもHRでの現実逃避のおかげだろうか。

ちなみに蛇足だが、一夏はやっぱり間違えて必読の教材を捨てたので、僕のを代わりに貸した。でも結局全部をきっちり覚えることはできなかったみたいで姉さんの愛の出席簿は無情にも振り下ろされたのだった。

ん、僕？ 束さんとISと魔術・魔法についての熱い設定の語り合いをした時にけっこう覚えたから必要なかったよ。やっぱりああいう会話って楽しいよね！でも他人に迷惑かけちゃダメだぞ！

それにしても、クラス長かー。

こういうのって僕の前世ではあんまし立候補とか無かったなー。で、仕方ないからクジ引きで決めて最後に残ったやつががっくりと肩を落とす、っていうのがテンプレだったよ。

小学校ではけっこう立候補する人が居たんだけど、思春期で色々気恥ずかしくなるからかな？

IS学園ではどうなんだろうね。高校というのものもあるけど、この学園本当に外人が多いから他のクラスでは立候補とかも多いのかもしれない。まあ、一組では無理だけどね。原作通りの流れなら、ここれらのタイミングで――

「はいっ！ 織斑くんを推薦します！」

ほらきた。まあそりゃ、学園唯一の男子だし、こうなるのは仕方ないな。一夏頑張れ。

「はい、織斑くんがいいと思います！」

「わたしも織斑くんがいいかと！」

「わ、私は織斑くんがいいです!!」

…多いなあ、推薦。

流石ハーレム男だ、何時の間にそんな人気を獲得していたんだか。もうアレか、身体から女子を惹きつけるフェロモンが出てる疑惑が浮上するレベルだよこれ。

そんな風に考えて…いや、『現実逃避』していた僕の思考は、

「では、候補者は織斑兄弟ということで構わんな」

「「ちよっと待った」」

姉さんの台詞で一気に現実に戻された。

うん、ほんとにちよっと待った。貴方が何を言っているのかわからないよ姉さん。ここはしっかりと間違いを指摘しておかなければならないね。すうー、と息を吸って、

「何言ってるんですか先生! 織斑って言ったら僕の右に座っているこの朴念仁のことに決まってるでしょう!? 僕のことを巻き込むのはやめてくださいよ!!」

「何言ってるんだよ先生! 織斑って言ったら俺の左に座っているこの人間プレス機に決まってるでしょう!? 俺のことを巻き込むのはやめてくださいよ!!」

.....。

「お前がやれエエエエエ！！！」

「黙れ貴様ら」

スパパァン！と姉さんの手が恐ろしい速度で動き、僕と一夏の頭を強打した。うがぁ！いつ…たかないけど凄まじい衝撃が頭にツ！
　　というか僕と一夏の2人を叩いたはずなのに音がほぼ重なって聞こえたぞ！姉さん、ひょっとするとIS乗れば燕返しとかできるんじゃないだろうか。相変わらず凄まじいスペックの姉である。

それはともかく、今の一撃でなんとか頭は冷えた。つまり…

…どういうことだってばよ？ いかん！まだ混乱してるぞ落ち着け僕！

「うごがぁ…お、織斑先生…！どういうことなんだよこれは…！！」

「どうもこうもあるか。女子の視線と意識は明らかに均等にお前らの方に向いているぞ」

「なんでッ！？」

驚愕する一夏。かくいう僕もビツクリだよ。

あたりを見渡してみると、確かに女子の視線が僕と一夏、それぞれ丁度半々くらいに集中していた。中には手を挙げたまま指をこっちに指しながらキラキラした目を向けている子までいる始末だ。

って、いやいやいや！一夏はともかくなんで僕にまで代表の推薦が来るのさ！？別に僕はたいしてイケメンでもないし、むしろ女子には最初怖がられてたくらいだったのに。

とりあえず後ろを向いてクラスメイトに聞いてみる。え、えーと、君たち？僕を推薦した理由はなに？

「お兄さまってすっごく頼りになりそうな空気を纏ってますから！」
「なんというか、大樹というか鋼鉄というか…寄りかかっても揺るがないというか」

「さっきオルコットさんと話してたときの、面倒そうではあるけど優しげな横顔が…」

いやいや、そんな空気だけで言われても困るよ！多分それチートのせいだよ！あと最後の人、アレは一夏に責任を丸投げしただけなんだよ！？もっとそういうヘタレの部分に注目してよ！

え、ええい！どうもクラスの皆さんは男子に対する線引きがまだしっかりしてないぞ！僕は弟とは違います、そういうのは全部一夏に頼んでよ君たち！

「え、ちょっと待っていや俺はなんで推薦されて——」

「黙れこのイケメンリア充野郎！」

「零夏ああ！！せめて俺の疑問くらい解消させろよッ！」

君の理由はもういろいろとお腹いっぱいだから喋らなくていいです。とりあえずもげろ。

ちなみに、僕の台詞を聞いてクラスメイトの一部、具体的に言うとかポニーテールの和風女子さんがうんうんと同意するように頷いていた。

箒ちゃん、ちなみに言葉のどこに納得したんだい？それ多分僕のことだと思ってると同じだよ。君は嫌がるかもしれないけど、一夏のどうしようもなさについては一度2人で話し合うべきかもしれないね。

と、教室が喧騒に包まれ、姉さんがため息をつきながら出席簿を持ち上げた瞬間――

「――納得がいきませんわっ！」

バンツ！という音と共に、金髪少女――オルコットさんが立ち上がっていた。

「そのような選出は認められません！その人の話を聞かないヘタレ男と野猿のような野蠻男の2人が揃って代表だなんて、このセシリア・オルコットが許しませんわ！」

僕等を指差して、オルコットさんは叫ぶ。

：あの怒りようからすると、適当に話を誤魔化して終わらせたのがそろそろバレたに違いない。はっはっは、まあ冷静に考えると一夏に丸投げしただけだからね。でもこれで騙されちゃうからちよろいさんなんて言われちゃうんじゃないかなあ。

とはいえ、今の発言はナイスだ、と僕は隣の一夏を見ながら思う。不快げに眉をしかめている様子を見れば、一夏がそのうちポロツと本音を出すのは確実だ。いいぞオルコットさんもっとやれ！

そして、一夏が挑発に乗って思いっきり自爆しようと、僕は彼女の言葉に反応しなければそれで戦う流れはスルーできる。完璧じゃないか：！（フラグ）あとは一夏が適当に目立って僕は地味に振舞ってればそのまま一夏がクラス代表になるだろう。間違いない！（フラグ）

「――としても後進的な国にいること事態、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

「イギリスだってたいしてお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ…なんですってえ!？」

などと考えている間に一夏がやらかしていたようだ。原作通りとはいえ本当に口が軽い男である。とはいえよくやった! 僕のことなんか忘れてそのまま犠牲になってしまえ!

…でもね2人とも、悪口を言い合うならせめてお互いのことを言うべきだと思うよ? 国レベルで言い合うって色々情けないだろ? まあ、お互い容姿が整ってるから悪口言いづらいのもあるんだろうけど。

よし、これは後でちゃんと一夏に言っておこう、なんて思っている間に、あれよあれよと会話は進み——「決闘ですわ!」「おう、いいぜ」「ハンデはいるのか?」「わたくしを馬鹿にしすぎですわ!」——2人の模擬戦が行われることが決定した。

パンパン、と姉さんが手を叩いて場のまとめに入る。

「話はついたようだな」

やれやれ、危ないところだった。これで一応の区切りがついたな、

と僕は胸を撫で下ろす。これで妙なバトル展開はなさそうである。
いやあ良かった。バトル展開とか心から御免被るからね。

と、そんな風に安心している僕のほうを見て、姉さんはクラスに
結論を通知した。

「では、試合の日程は来週の月曜日と火曜日だ。各自訓練をしてお
くように」

——ん？

ちよつと待った。何か聞き逃せないことが聞こえなかったかな。

…火曜日ってなに？え、二日…って、これはまさか！

「？織斑先生、何故二日に分ける必要がありますの？」

「…はあ。お前達、そこでコソコソしている奴の存在を本気で忘れ
ていたのか？」

「「あっ！」」

「ブルータスお前もかああああ！！」

「誰がローマ人だ馬鹿者」

ねえさああああああんツ！！余計な事をおおおおおお！！
まさかの裏切りである。なんだよ別にいいじゃないか僕のこと
はスルーで！本人たちがヒートアップしているんだからそこに水を差
す必要は特に無いじゃないか！

バカな…どうしてこうなった！せつかくこの流れから逃げられる
と思ったのにツ！真の敵は身内にいたというのか…！オ・ノーレエ！

「やれやれ…言っておくが、別に嫌がらせで言ったわけではないぞ
？」

「いやあそれは明らかに嘘だよね姉さん！口元が微妙にニヤけてるのがなによりの証拠だよね！」

「……まあ、どうせお前は参加することになっていた。政府からお前のデータを取るように言われているからな」

「黙殺された！っていうか何でデータがいるのさ！僕入学試験のとき教師と戦ったでしょ！？」

「馬鹿者。あんな戦い方でデータが取れるか：そうだな、月曜日に零夏と一夏、火曜日にオルコットと男子2人が戦え。オルコット、できるな？」

「ふんっ、問題ありませんわ！」

「どんな戦い方したんだよ零夏！」

って、最初から僕が戦うの決まってたの！？それならもっと早く言つてよ！今の僕のニヤケ面とか完全に姉さんの掌の上だったじゃないか恥ずかしい！！

というか、やっぱりあの戦い方じゃダメだったのか：でも、ああするのが一番勝率が高かったからやらざるを得なかったんだよなあ。僕飛べないし、相手が油断してたしね：

「見ていなさい織斑兄弟！このわたくし、セシリア・オルコットが実力の違いというものを見せ付けてやりますわ！」

「ハッ、言つてろ！俺たちは負けねえからな！」

「はあ……」

後悔先に立たず。

2人の宣言を横目にしながら、やっぱりこうなるのかと、僕はがつくりと机に突っ伏した。

ちくせう。命がヤバイ勝負なら何があっても逃げるのに：この場合、『安全な戦い』だからなおさら否定しづらい。どうも最近本気

を出したのが原因かなあ…戦うなんて危ないこと、心の底から嫌いなはずなんだけど。

「——やれやれ。結局お前は戦いたいのかそうでないのか、どっちなんだ？」

「戦いたくないに決まってるじゃないですか…はあ…」

「そうは思えんがな。…まあ、別に死ぬわけでもない。お前も私の弟なら、ひとつの『試練』だとも思えばいいさ」

「————」

ぴくり、と身体が動いた。

——『試練』。

その言葉を聞いた途端。

僕は確かに、身体の奥底で、

魂が、震エルノヲ感ジタ。

(…まいったなあ)

わずかな期待を含ませた、姉さんの言葉を聞いて——僕は思う。

（…その言葉には弱いんだよね、本当に）

机に突っ伏したままでよかったなあ、とぼんやりと思う。

多分——今の僕の顔は、獣のように笑っていたと思うから。

——放課後になった。

「あ、2人ともちょっと待ってくださいーい！寮の部屋割についてお話があるんです！」

「…え？俺たちは自宅通学じゃなかったんですか？」

これからの予定に憂鬱になりつつも授業を終え、さあ帰るか…と

一夏と席を立った丁度その時、山田先生がこちらに駆け寄ってきてそんなことを言った。

…ああ、忘れてたよ。そういえばこれがあったねえ…

「いえ、貴方達は色々危ないことが起こりそうなので急いで部屋を用意して、今はその説明をしに来たんです」

「ああ、そうでしたか。お疲れさまです先生」

「い、いえっ！ れ、零夏くんも朝はありがとうございましたっ」

「いえそんな」

ああ…この先生いい子だなあ…精神的には年下なのも手伝って、つい頭を撫でてあげたくなるよ。さっきのやりとりで消耗してた僕の心がすごい勢いで癒されていきますよ！

しかし、癒されるのはいいんだけど…ひよっとしてこの流れだと、一夏は箒ちゃんと同室になって、僕もどこかの女子と同室になっちゃったりするんじゃないか？

やばい、多分これ当たりの気がする。…なんてこった…僕は疲れた心を家に帰って休ませることもできないのか。知っているか？ 女の園からは逃げられない。

い、いや、まだだッ！ まだ可能性は残っている…一人部屋が、栄光の一人部屋が僕にはあるはずなんだッ！！ 悪足掻きでもいい、せめて可能性だけはつながなきゃいけないんだ！

「先生っ！ 部屋を用意したという話ですけれどもっ！」

「ひゃあ！？ あ、ははははいそうですか何か！！」

いきなりの大声、おまけに急に呼びかけられたことでテンパり気味の山田先生だが、申し訳ないけど今の僕にそれを気にしている余裕は残念ながらない！ 一気に質問させてもらいますッ！！

W
W』

ふ…ふふ、燃え尽きたよ…真っ白にね。そんな僕に束さんの爆笑がどこからか聞こえてきた。どうして音のはずなのに草を生やしていることがハッキリ伝わってくるのだろうか。非常にウザい。

「し、しっかりしてください零夏くん!!!」

「いや先生…なんでそんなに反応がマジなんですか…?」

呆れた一夏にまでツッコミを入れられつつ、それでも僕を駆け寄って抱き起こす山田先生。

その目にはなぜか大粒の涙が溜まっている始末である。…ああ、この子本当にいい子だなあ、こんなバカコントに付き合ってくれるなんて。ちょっと本気で感動してしまった。うん、ヘコんだ時はこの先生に癒してもらうのが一番だな。

「ああ、すいませんね先生…ちょっと、バカやりすぎたみたいです
よ…」

「ご、ごめんなさい私の力不足で…というか今どこからか爆発音が聞こえてきましたよ!? 大丈夫だったんですか!?!」

「——大丈夫だよ先生。僕もこれから、頑張っていくから」

「それは去るときの台詞ですよ零夏くん!? 明らかな消滅フラグです!!!」

「ああ——安心した。…がくっ」

「それも死亡時の台詞ですってばあ! れ、零夏くうううううううんっ!!!」

「…教師に何をやらせているんだお前は…」

正直このネタやりただけだった。反省はしている。

結局、この悪ふざけは、日誌を書き終わった姉さんのツッコミが

入るまで続いたのであった。

…ちなみに、何時の間にか一夏はどこかへ去っていた。まあ、たぶんトイレを探しに行ったんじゃないかな。六時間目の授業の終わりにくらいに気付いたみたいだし。

こうして時間を潰して、部活後の箒ちゃんのシャワー時間と鉢合わせることになるんだろうね。さすが一夏である、最早感動的な手際の良さだ。もう色々どうしようもない男だと思う。

「…はあ。んで結局、これからは逃げられないんだよなあ」

——全力でフザケまくることによって、なんとか心の余裕は回復したものの、『女の子と同室』であるという事実は当然ながら消え去ったりはしなかったようだ。

はあ…。気が重い。

一応、姉さん達は一週間くらいで個室を用意してくれる、とは言ったものの、女子と同室で一週間心が休まらないってことなんじゃないかな、それ？年頃の男には厳しいものがあるよ…

…仕方ない、ここまできたら相手がいい子であることを祈ろう。

『1037』と書かれた扉を前にして、まずは当然、ノックを試みる。さて、一体誰が同室なんだろうね？

コンコン

……。

…ありや、無反応？

チートの身体能力を活かし、物音や気配を探してみると——ん？中に一人いるみたいだなあ。なんで反応がないんだろうか。もう一回ノックを試してみたがやはり返事がない。寝てるんだろうか？だとしたらえらく早い就寝になるけれども。

…僕は万が一にも一夏のようなヘンなフラグは起こしたくない。中に入る時は十分用心しないとね。

というか、あんなラッキースケベを散々やってたら普通理性のほうもたないと思うんだけど。姉さんの下着やらなんやらで慣れすぎてる、なんて言っても普通、慣れたりしないと思うんだけど。僕は全然下着には慣れないしね。

とにかく、貰った鍵を挿し、ゆっくりと用心しながら僕はドアを開けて——

「…は？」

目の前の光景に、硬直した。

…いや、えーと…なんだこれ？

冷静に部屋を見渡してみよう。IS学園の寮のデザインは玄関から入って、左手にシャワールームがある。どうやら洗面所も兼ねて
るみたいだね。まあそこは別にいい。

で、ちょっと進むと各々の勉強机が置いてある。ここも問題ない。
そして実はこれが一番最初に目に入ってたんだけど、特徴的な
が大きなベッド二つ…ふんわりとした、一目で上等なヤツだとわか
るものである。

で、そのうちの 하나가、ぬいぐるみで完全に埋もれている。

うんおかしいね。

詳しく状況を説明すると、ベッドの枕から足の部分まで全てがぬ
いぐるみで埋め尽くされており、もはや布団が判別不能な状態だ。
というか積み上げすぎてベッドからこぼれ落ちてしまっている。そ
れらも結構な数が僕の足元まで転がってきてるね。

え、なにこれ。

僕、ドン引きである。こんな膨大な量のぬいぐるみ、専門店でし
かお目にかかれないんじゃないのかな…ひょっとして、この部屋の
主は店ひとつを全て買い占めたんじゃないだろうか。とはいえこん
な数の量だとそもそも部屋に入りきらな——

『…きゅー…』

「って埋まってんのかよルームメイトさーんっ！！」

まさかの崩落事故だった！。何があったのさ一体！？

ええい、とりあえずぬいぐるみを退かすぞ！後片付けの手間は今は考えずに、ぽいぽい人形を退かして…ってめちゃくちゃ多いな！あーもう鬱陶しい！

「おりゃああああっ！！」

「わっひゃあああああ！！」

どばー！と怪力を利用してぬいぐるみを纏めて吹き飛ばす。勢いでその下にあった誰かもゴロゴロとベッドから転がり落ちた。

…おいおい、ここまでぬいぐるみに囲まれていながら本人は着ぐるみまで着ているぞ…どこまで徹底しているんだか。最早呆れを通りこして尊敬まで覚えるレベルである。

「ふはー…あ、ありがとー助かったよー…あれ、おにーさま？」

「……え？」

「あー、ひどいようおにーさま同じクラスなのに忘れちゃったのー？」

——この声を。

僕の思考が、その声を聞いた瞬間に硬直する。

その姿が、朝見かけたクラスメイトだからではない。もっと別のところで、心が…あるいは魂が、起き上がってきた少女の声に、既視感を訴える。

——僕は、この声を知っている。

それに戸惑う僕には気づかずに——少女は、のほほんとした挨拶を交わした。

「^{のほとけほんね}布仏本音だよ？ よろしくね、おにーさま」

——バーサーカーは、強いね——

その声は、どこか。

——『白い少女』の声に似ていた。

L i f e 4 凡人の心、英雄の魂（後書き）

英雄の力は果たして人間の器に収まるものなのだろうか。
彼は本当に『彼』なのか。

そんな疑問が、ひとつの少女の『声』から生まれた。

というわけで声優ネタを織り交ぜながらのほほんさん登場です。
一応ヒロイン候補の一人ですね。ルームメイトという強力な補正を
引っさげてます。しかし、僕はいいい加減ヒロインを決めるべきかも
しれない…

あと、勝手にのほほんさんがぬいぐるみ大好き少女だという捏造設
定をねじ込みました。

本当はそんなつもりじゃなかったんですけど、モフモフに埋まって
顔だけ出してるのほほんさんを想像したら自然と手が動いていまし
た。仕方がないね。

※まさかのタイトルミス。修正しました

幕間 壱（前書き）

ISのカケラもないお話です。
幕間なのでスルーしても問題はありません。
ちなみにこの後もう一話投稿します。

☆アンケートのお知らせ☆

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついていないキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

- 1 束さん
- 2 のほほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

それでは、よろしく願いします。

幕間 壱

——夢を見る。

白い。

最初に浮かんできたのは、そんな言葉だった。

空を見上げてみれば雪が降っている。…ああ、だから白いのか、と今更ながら僕は得心した。

一体いつから降っていたのだろうか、などと考えようとして、そんなことはどうでもいいことだと気付く。

ぼんやりと、辺りの輪郭を曖昧にしながら降る氷の粒は——考えるのが馬鹿らしくなるくらいに、綺麗だったから。

辺り一面は白く白く染まっていて、他の色はわずかに見え隠れする樹木の色くらいしかない。

今の季節は春だというのに、こんなにも雪が降り積もっているから…ああ、これは夢なんだな、と場違いなことを心の片隅で思った。

——深い深い、森の中。
——地面も、木々も、一つ残らず白に染まる。

その景色があまりにも美しくて。あまりにも神秘的で。
時間が経つのも忘れ、僕はこの白い世界に見入っていた。
肩に積もる雪も、吐く息が白くなるのも気にせず、ただぼんやり
とそれを見続ける。

…どのくらい、そうしていただろう。
ふと、誰かに呼ばれた気がして——僕は後ろを振り向く。

『…え?』

不可解な事象に、思わず疑問の声が出た。

いつの間にか、僕の後ろに道ができている。

いや、道かどうかはわからないけれど——その場所だけ木が無
い。まるで森そのものが、その場所に育つのを拒んだかのように、
僕の背後にだけ不自然な空白が生まれていた。

どうして、と思ったけれど、そもそもこれは夢だったと思い出す。
なら、きつとこの先に何かがあるのだろう。ぼんやりと…まさしく
夢心地で、僕はただ足を動かした。

踏み出した足跡は、すぐさま降り積もる雪に覆われて消えていく。
何故だかわからないけど——それを、とても悲しいと僕は思っ
た。

——そして、その場所に辿り着く。

この白い世界で——そこだけが違う色だった。

よく知っている少女の眠っている姿。

その身体に、無遠慮に絵の具を上から塗りつけたように——その部分だけが違和感を撒き散らしていた。

あまりにも鮮やかな、真紅が。

『——』

鼓動が、呼吸が、早くなる。目の前の光景を、脳が否定する。平衡感覚がおかしくなるのを感じた。歪んでいるのは僕なのか、

それとも世界なのか。それすらも判断がつかない。

ただ食い入るように少女を見つめて、僕は彼女の姿を見続ける。

——凍えた風が吹きつけ、木々を揺らした。

けれど、彼女は目覚めない。まるで寒さに気付かぬように。

——降り散る雪が、頬に触れた。

けれど、彼女は目覚めない。まるで寒さに呑みこまれたように。

氷の粒が『融けない』という事実が、突きつけているようだった。

彼女はもう、人形ホームンクルスに戻ってしまったのだと。

もう二度と、彼女が目覚めることは無いのだと。

これが、死だ。

『——守れなかったのか』

逃げろ、と心が叫ぶ。

自分に降りかかる死も、他人に降りかかる死も。何もかもが恐ろしい。

これは僕のトラウマだ。生きている限り、この感触を忘れることはないだろう。まるで刻まれた烙印まじゅつのように、どうしてもなく僕を締めつける。

アレは在ってはならないモノだ。誰もが恐れ、否定し、遠ざけようとする、生きている全てと相容れないモノだ。

だから逃げろ。今すぐ逃ゲロ。振り返ラズニ走りダセ——！

叫びに押されるように、よろよると心が揺れる。

意識がはつきりしない。呼吸も覚束ない。手足の感覚なんてとっくに無くなっていて、それでも立っていられたのはたぶん奇跡みたいなものだろう。

目の前には死。後ろには生。——なら、どっちを取るかなんて、決まっているはずだ。そもそも僕にとって、これは選択肢ですらなかった。

ああ、なんて弱い——自分なんだろう。

その事実には、反吐が出そうな不快感を抱きながら。それでも僕は、

前へ進んだ。

『…白い少女よ』

勝手に動く身体に呆然としながら、僕は今更なことに気付いた。これは確かに夢だ。

だけど、ここに立っているのは——僕じゃない。

『私は、貴方を護れなかった。それでも』

吐き出す言葉には、確かに少女への深い感情が感じられた。

ただ、死そのものが恐ろしくて逃げようとした僕とは違う。『彼』にとって、これは譲れないことなのだろう。立ち向かって、勝ち取らなければならない何かがあるのだろう——

『貴方に渡された言葉、この誇りがある限り——』

少女を抱え上げ、『彼』は痛みをこらえるように、拳を握り締めながら——それでもなお、足を止めずに森から去っていく。

…夢だということに気付いたからだろうか、僕の意識は急速に薄れていく。恐らくはもうすぐ、この夢から覚めるのだろう。

遠のいていく白い世界にはただ、『彼』の独白が響いていた。

それを聞いて、思う。

…ここが僕の夢の中なら、どうしてこんなものを見たのだろうか？ 逃げ出そうとする僕、挑もうとする彼。夢の中では僕たちは別人で、はつきりと分かれている。けれど、現実の…本当の僕は一人だけだ。なら、この夢は僕の『中』から出てきたのだろう。

ひょっとして、僕は——

『貴方のために、闘い続けます——』

——『英雄』のようになりたいと、望んでいるのだろうか？

幕間 壱（後書き）

とある平行世界。

アインツベルンはセイバーとしてヘラクレスを召喚し、その無双の技術で次々と勝ち進んでいく。

しかし、そこに巨大な壁が立ちふさがった。バビロニアの最古の英雄王、ギルガメッシュである。

彼の持つ『神を縛る鎖』の前には令呪すら効かず、彼は捕縛され、今回の『聖杯』でもあるイリヤを奪われてしまった。

鎖が解けて、急いでマスターの元へ向かうも：既に少女は、心臓である聖杯を抜き取られて息絶えていたのであった。

しかし、彼は止まらない。戦いをやめることはなかった。

少女の言葉に、望まれた誇りに応える為、魔力が切れ、いずれ消え行く体でも――それでも、ヘラクレスは少女を抱え、進んでいく。彼はまた、いつかの日々のように、途方もない試練へと向かっていったのだった。

彼の剣は果たして、太陽のごとき王に届くのだろうか――

という夢を見た、というお話でした。

前半はただの夢、後半からがヘラクレス視点ですね。

ちなみにこの世界線の基本はUBWルートなのでこの後小聖杯はシンジに突っ込まれています。ワカメエ：

今回はバサカ枠は無しで、セイバーオルタちゃんがアヴェンジャー名義で呼ばれて士郎に救われる話、という脳内設定。

ぶっちゃけオチは特に考えていませんが多分ギルが慢心して負けます。相変わらずいつも通りの慢心である。

さて、ある程度次の話でも説明していますが、今回の話は零夏の見

た『夢』です。色々な意味でヘラクレス強いよ生きるの辛いよというテーマでした。

裏話をしますと、零夏 능력は『ヘラクレス』の力を直接そのままコピーしたのではなく、冬木の聖杯により『サーヴァント』というカタチの概念に変換されたものをコピーしています。

神代の時代と現代とは『常識』などの尺度が違うので、このように濾過、あるいは翻訳しないと零夏には理解ができないわけですね。『現代に即した英霊化』というヤツです。

：まあ、『イリヤのことを覚えているヘラクレス』を出すための設定なんですからね。

要はバサカをクラスカードにしてから身体に突っ込んだようなものですな。狂わないけどね！

しかしバサカを喋らせると違和感が凄いですね。

一応きのこシナリオの某ゲームでは正気に戻ったバサカが書かれますけど、口調が執事のくせしてぱんつはいてない、更に虎聖杯には特注サイズの衣装を頼むっていうフリーダムっぷりでした。

こんな資料になるわけねーだろ菌糸類イイ！！

Life5 嵐の前に、朝食を（前書き）

やっとメインヒロインさん出せた！やったー！ポテチヨサトシクン！

次回、ようやく戦闘です。VS一夏をお楽しみに。

☆アンケートのお知らせ☆

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

- 1 束さん
- 2 のほほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

それでは、よろしく願います。

Life5 嵐の前に、朝食を

——目が覚めた。

「…ああ、朝か」

一言呟き、僕は起き上がってカーテンを開ける。

シャアア、という音を立てながら日光が部屋に入ってきて、眩しさで少し目を細めた。

昨日に続き今日も晴れである。うーん、今日もいい天気☆

とりあえず、何の気はなしにパシパシと顔を叩く。痛みはないけど、衝撃があるのでここは現実のようだ。…うん、夢との区切りはしっかりつけないと、ね。

時計を見ると、時刻は六時半。いつもよりちょっと早起きというくらいだろうか。

寝起きはいい方なので特に眠気などは残っていないが、今見た夢のせいか微妙な気分である。

「『誰』の夢なんだか、まったく…」

つつい、溜息が漏れてしまった。

先程見たことを思い出す。

白い世界、血まみれの少女、とあるサーヴァントの誓い——

誰かに話したら『漫画の読みすぎだろう』と言われることは間違いない。そんな内容の夢だった。

：僕の知っている聖杯戦争にあんなシーンは無かったから、やっぱりアレはただの夢でしかなかったのだろうか？ バースーカーのはずなのに喋ってたし。

あるいは、幾多の平行世界から『英霊の座』に集められたひとつの戦いの歴史なのかもしれないが：まあ、そんな考察はやめておこう。

キリがないし何より、違^{ちが}うとわかっていても、自分の中に他の誰かが居るなんて仮定は気持ちのいいものじゃないしね。

：それに、『平行世界』という単語を出すと、とある魔法使^{宝石翁}いのことが——正確には彼が作った危ない危ないステッキのことが連想されそうだから危険だ。アレは色々まずい。

嬉々として混沌を振りまく東さんと、洗脳されて大変なことになっている姉さんの絵面があまりにも鮮明に浮き上がってくるし、一夏の周りの女子がそれに加えて更なる騒動を——マジでこのへんにしておこう。本当に実現しそうで怖いから。というかこのネタたぶん既出だ。

：うん、馬鹿なことを考えてたらいい感じに落ち着いてきたよ。

「相変わらず、僕は僕だ。吞まれないようにしないとね」

敢えて言葉に出して、自分自身の確認をしてみた。

僕は『織斑零夏』だ——他の誰でもない。

人生を長く太く、幸福に生きて、死ぬのからひたすら逃げ続ける。それが僕だ。たとえ仕方なく戦うことがあったとしても、『ヘラクレス』に変化するわけじゃないんだ。

そう自分に言い聞かせる。僕の心に鎧は無いから、こういうケア

はきつちりとしておかないと。見た夢のことはとりあえず忘れて、今日もいつも通りの僕でいなきゃ、ね。

——なんてことを心に決めていたら、

「…んにゅむにゅむにゃ…」

「ん？」

もぞもぞと隣のベッドで音がした。

…ああ、そういえば昨日はルームメイトと顔合わせしたんだった。あれだけ意識していたのに今まですっかり忘れて、気配も探っていなかったあたり、今の夢で僕はけっこう動揺していたらしい。

まずったな、独り言とか聞かれてないよね？　というかカーテンを開けたりするんじゃないかったよ。迷惑だった。

「…うーん、朝あゝ？　ぐっどもーにんぐ…？」

「ありゃ、これは申し訳ないなあ」

起き上がる声でしたので、結局彼女も起こしてしまったようだ。大失敗である。

とりあえずは謝罪をして、朝ゴハンを奢るあたりで許してもらうことにしよう。そう考えながら、僕はとりあえず飲み物でも用意することにした。

「——ごめんね本音ちゃん。起こしちゃった？」

僕の『能力』は、第五次聖杯戦争の『バーサーカー』の…つまり、大英雄ヘラクレスの力を得る、というものだ。

それは、ただ単に宝具や身体能力を手に入れる、ということではない。

そもそも普通に暮らしていた僕が唐突なバトル展開とかができるわけがないのは明らかだ。力というものは道具だけでは決まらない。拳銃ひとつだって素人はそう当てられるものじゃないんだ。

だから僕は、ヘラクレスが持っていた『経験』、『判断力』、『技術』など——数多くの彼を構成するパーツすべてをそのまま貰い、身体の内にも保持している。

「くう…すぴー」

「こらこら本音ちゃん起きてー。年頃の男に簡単に寄りかかっちゃダメだよ？」

「…んー…ねむいのはおにーさまが起こしたせいだよ…」

「それを言われると申し訳ないけどさ…というか、『おにーさま』ってやめない？ そもそも同じ年だし」

「はぁ…いい…じゃあ、他の名前考え…すやすや」

「ああ、寝ちゃった。…というか、さっきから思ってたけど…なんだこのかわいい生き物」

これにより、僕は（体格などの一部を除いて）英雄の戦闘力をそのまま手に入れることができている。はっきり言って、今の僕を倒せる存在なんてISを含めても殆どゼロだろう。それほどヘラクレスという存在は強力なのである。

だが――『経験』があるということはつまり、様々な『記憶』もあるということだ。

英雄本人の『人格』は無いにしろ（あったら僕なんて押しつぶされてるかも）、『記憶』というものは人格形成に大きな影響を与える。その上ヘラクレスは勇猛さでその名を轟かしている英雄でもあるから尚更だ。

だから、教室でそうだったように、『ヘラクレスに関連したこと』を感知した場合、僕はやや性格がブレることがある。そういう意味でも、戦闘とかが好きじゃないんだよね。やってる最中はやけに好戦的になって、後になってものすごい後悔やら恐怖やらが押し寄せてくるから。

「ふー、朝練疲れたー飲み物飲み物…って、おおお兄さまッ!？」
「そんな!？既に女の子と朝チュンを迎えてッ!？」

「僕は違います。…というか、まだ朝だから静かにね？」

「「あ、御免なさい…」」

「…すぴー」

「よしよし。で、この子は普通にルームメイトなだけで、抱きついてるのはむしろ小動物的なコミュニケーションの一端だと思うよ」

「ああ、なるほど…」

「そりゃー本音だもんね…」

「…なんか妙な信頼だねえ君たち…あ、本音ちゃん食堂着いたよー」

「はっ！デザートっ！！」

「「眠気より食い気！？」「」」

さて、そんな話はそろそろ切り上げるとして、現在の状況を説明しよう。

時刻は七時十五分。

僕はコーヒを一服してから身支度をして、本音ちゃんと食堂に来たところで…っと、その前にルームメイトの説明がまだだったね。

僕の隣にいる眠たげ少女。彼女の名前は、布仏本音という。

一夏は原作で『のほほんさん』と呼んでいる少女だ。いつも袖が余っている服を着ていたり（というか今の彼女の格好は完全に着ぐるみだ）、間延びした口調、柔らかい笑顔、あと個人的には穏やかな声などが印象的で、周囲に独特のほんわかとした空気を振りまいてくれる子である。

故にあだ名が『のほほんさん』。実は一夏は途中まで本名を知らずあだ名で誤魔化していたという経緯がある。なんて奴だよまったく。

で、どうして僕がそんな彼女を名前呼びしているかと言うと、特に好意やらの意味があるわけではなく、むしろ自分へのケジメのよきなものである。

時は遡り、昨晚。つつい『白い少女』と目の前の彼女をどうしても比べてしまい表情が硬かった僕に、『ルームメイトなんだから名前呼びでいいよー』と本音ちゃんが親切心から言ってくれたのが切っ掛けだ。

なんというか、それを聞いた時にようやく僕は自分の無礼に気付

き、心底恥ずかしく、また彼女に非常に申し訳ない気持ちになった。人はそれぞれ明確に違うというのに、声が似てる程度で何をやってるんだ僕は。数分前の自分をブン殴りたい気分である。

そんなわけで、今後は絶対に声なんぞに惑わされずに接するぞ、という決意も込めて彼女のことは名前で呼ぶことにしたわけなのだ。

…ただのんびりとしているわけじゃなくて、こういう気を配れるところが本当にいい子だなあ。山田先生と並んでの癒し系筆頭少女、それが本音ちゃんだ。非常にありがたい話である。

そして状況説明に戻ると、そんな彼女を連れて現在食堂に来て、朝練帰りであろうクラスメイトの女の子2人に出会ったというところである。

どうやら友達からも本音ちゃんは恋愛からはほど遠いと思われるようだ。…まあ、原作では一夏にもぺたぺたくっついてたみたいだしその通りなんだろう。たぶん。

「じゃ、ここで話してるのもなんだしとりあえず朝メシ食べちゃおうか。僕は案外大食いだから時間取るんだよね」

「え、意外ですねお兄さま、そんなに食べるんですか？」

「一夏の五人分とか余裕」

「「!？」」

「今日はいつもあり豪華なデザートだ〜！」

そんな僕の話に反応することなく、本音ちゃんはこれからの食事に思いを馳せていた。その目はキラキラと光っていてどこことなく漫画のような瞳になっている。

…そんなに僕の『奢るから許してくれない?』という言葉が嬉しかったんだろうか? まあ、IS学園だから値段が高いものも揃って

るのかもしれないね。僕の財布は案外金入ってるから大丈夫だけど。
：女の子なのに朝から色々食べて大丈夫かな？とも思ったけど、
まあそこまで口を出すことでもないか。

さて：お待ちかねの食事タイムだ。

学園では他の生徒がいるからあんまし迷惑をかけないように注文しなきゃいけないけど、この時間ならたっぷり量は摂れるはずだ。
焦る必要はどこにもない。

：さーて、IS学園のメシはどんな味かな？美味いと評判だし、
今から色々楽しみだな：！ククク：！！

「――行くぞおばちゃん。米の貯蔵は十分か：！！」
「フ、こちとら和洋中全て取り揃えてるよ――！！」
「え、なにこの展開っ！？」

ツツコミの声を敢えて無視し、僕は食券の自販機にコインを突っ込む。

僕はこう見えてけっこうな量のメシ屋を泣かせてきた大喰らいだ
ツ！味にはけっこううるさいぞ！！（ウザい客である）
フードイーター

これからお世話になる身としては最初が肝心！料理を作ってくれたことに感謝しながら――おばちゃん！その能力、測らせて貰うぞッ！！

「……………頂きますッ!!」

ゴォッ!と、謎のオーラを出しながら、差し出されたA定食の箸を掴み取る。

こうして、後に『伝説の始まり』とも呼ばれる、僕たちの最初の闘いが——幕を開けたのだった。

「うーん、この鯖がいい感じの味出してるな!。箸、そう思うだろう?」

「あ、ああ。そうだな」

「いやー、後で味の出し方教えてもらえっかな? 企業秘密とか言われるかも」

ぱくぱくと朝食を摂る一夏を横目で見ながら、こっそりと——誰にも気付かれないように、篠ノ之箒は溜息をついた。

自分は、織斑一夏のことが好きである。

それはどうしようもなく明らかなことだ。本人に言えるかは別問

題として、箒はその気持ちを認めていた。ずっと、健気に、箒は一夏のことが好きなのである。

では、織斑零夏のことをどう思っているか？と聞かれると、彼女は非常に返答に困るだろう。

そんな、一言では言い表せない複雑な感情を、彼女は零夏に抱いていた。それは、彼女が姉に持つ感情に似ているかもしれない。

さて、ここでひとつの疑問が生まれる。

一体なぜ、一夏が隣にいるのにわざわざ別の男のことを彼女が考えているのか？

…その答えは簡単だ。

「いやー、美味かった。これが毎日食えるとか幸せすぎるよ」
「またお前はそういう荒らし行為を…昔賞金を荒稼ぎしてただろうに」

「国の税金でメシがうまい！」

「お前は一回怒られろ！」

「正直すまんかった。…ああそうそう、一夏。結局、ルームメイトは誰だったんだい？箒ちゃんかな？」

「あ、よくわかったなあ。そうだな」

単純に、目の前に他の男——織斑零夏がいるからである。

ちなみに、彼は既に食事を終えており、隣ではそのルームメイトが幸せそうにパフェを食べているところだ。朝からそんなにカロリーを摂って大丈夫なのだろうか、などと箒は頭の隅で思った。

しかし、正直な話——そんなことを指摘する余裕は、彼女には

ない。

(…私に話題が及ぶ前に離れるべきだな)

一人そう思い、箸は静かに息を吐く。

食べるスピードを少し上げる。箸が止まっている一夏よりも早く食べ終わるように。なるべく『隙』を見せないように静かにしながら、箸は目の前の魚をつまもうとして――

「ふーん。じゃあもうとつくに箸ちゃんは、一夏にセクハラされたんだろうねー」

――バキィ!と、持っていた箸がヘシ折れた。

「な、何言っただよ零夏っ!? おい箸、大丈夫か? 怪我不いか?」

「あ、ああいや、だだ大丈夫だももも問題ない」

「全然大丈夫じゃなさそうだぞ!」

箸を折ったこともさることながら、心配した一夏が顔を近くに寄せたことも大丈夫じゃない原因なのだが、当の本人はそんなことはまったく気付いていないようである。

昨晚、バスタオル一枚の姿をガン見したのを早くも忘れているのだろうか? この優しさもヘンな具合に問題になっているようである。そんな一夏の反応に嬉しいやら呆れるやらで顔を赤くしていた箸だったが、

(…!?! し、しまッ)

今の行為は——致命的な『隙』だった、ということに今更ながら気付く。

ハッ！と気付いてそちらを向くと、零夏がその様子をニヤニヤしながら見ていた。あまつさえ、『よかったね』などと口パクで付け足してくる始末である。

怒りと羞恥で顔が赤くなるのを感じて、思わず拳の一発でも喰らわせようとした箒だったが、しかし一夏が近くにいるせいで大きなアクションを取れなかった。『これも計算通りなのか…ッ！』と、零夏の（無駄な）手際の良さに非常にイライラする箒。

そう、これが箒が零夏を好きになれない理由のひとつだった。

要するに、彼は箒で遊ぶのである。

昔からどういうわけか自分の恋愛感情を知っていて（※バレバレでした）、箒が本気で怒らないくらいのレベルでからかってくる。たまに『アメ』のような一夏との接触をさせたりするから尚更、まるで動物扱いされているようで箒は彼のことを苦手としていた。

そう、恐らくは自分に意地悪な兄がいたらこんな感じだったろう、と箒は思う。同じ年のはずなのに、どういうわけか零夏は大人びていて、自分は無口だったこともあり絶対に口ゲンカでは敵わなかったのだ。

得意の剣道に持ち込もうにもものりくらりとかわされ、最終的には何故か一夏と練習をすることになり有耶無耶にされていた。そして箒も何時の間にかその状態に満足して誤魔化されていた。

（ぐッ…こ、今度は忘れんぞ…ッ！…）

しかし——もう箒も高校一年生である。さすがにあの時のようにはいかなかったろう、と彼女はタカをくくっていた。

これからの学園生活ではキツチリ文句を言って、誤魔化されないようにするのだ、と彼女は誓ったのだ。

大事なのは口車に乗せられず、『アメ』に引つかかったりしないことだ。故に、これからは零夏の行動に細心の注意を払っていれば問題ない。そう、細心の注意を——

「いや、ゴメンゴメン。まさか箸は折れるとは思わなかったよ」

「違うだろ！まずセクハラ云々のことを謝るべきだろうに！」

「え？してないの？」

「………してない」

「…バレバレじゃん…まあ、正直それはどうでもいいや。ねえねえ箒ちゃん、箸が折れちゃったんならさ——」

——来たか！これを言わせるわけにはいかないッ！

これさえ止めれば大丈夫だ、たとえどんな『アメ』が来ても、心構えさえあれば問題はないのだ！

「ふんっ！おい零夏、悪いと思っているならお前はこれ以上喋るな。もう私はお前に騙されたりは——」

「一夏に『あーん』してもらったら？」

「しないのだ——えっ」

思わず、箒の動きが止まった。

……。

……。

長い沈黙が過ぎ、そして――

その後、零夏と本音が去ったテーブルの後には、なんだか甘酸っぱい、周囲からガン見される妙な空気が漂うことになる。

結局――箒はまたもや、零夏に逃げられてしまったのであった。

Life5 嵐の前に、朝食を（後書き）

また朝チュンだお…ねむいお…

今回は日常編。で、本編同様ISの修行なんて零夏にはないので一週間はキンクリさせて頂きます。ご了承ください。

それにしても、箒ちゃんが本当に動かしやすいです。感動です。

というかモッピーまでちよろいキャラになっちゃいましたけどこれ大丈夫なんですかね…？

でも、原作でもだいたいこんな感じなんですよね。将来大丈夫なんでしょうか。弄んでおいてなんですが心配です。

しかしここまで力入れてもシャルロットとラウラが来たら吹き飛ばされるのがモッピー。

すさまじいキャラパワーですよねあの2人は。特にシャルが。がんばれモッピー！君の明日はどっちだ！

…え、その前に一人抜けてる？何の事やら…（すつとぼけ）

さて、ヒロインの方ですが、午前六時現在、こんな深夜／早朝にもかかわらず結構な量のアンケートに関する感想が来しました。みなさんありがとうございます！

現在のはほんさんが優勢ですね。なんというか、優遇しすぎたかもしれません。次点は束かな？

しばらくアンケートは実施いたしますので、お暇な方は投票をどうぞ。

あと、僕今右手が腱鞘炎になりかけてるんで更新が遅れたら病院送りになってると思ってください。

三日、四日に一回は更新していきたいと思いますので、申し訳ありませんがお待ちください。

Life 6 強さの在り処、強者の在り方（前書き）

アンケートが一気に40件以上来てびっくりでした。

感想の海に溺れる！溺れる！

これが嬉しい悲鳴というやつですね、ありがとうございます。

アンケートはもう少し募集させて頂きます。

で、思ったのですが、ハーレムという書き方ではなく『のほほんさんと束さんがいいです』的な書き方もすごく多かったですけど、これは複数の女の子と三角関係的な流れを望んでいるってことでいいんですかね？

女の子全員の幸せが望まれているのか、悲しい二択の末に選ぶのが美しいのか。うーん悩みどころですね。番外編という手もあるしなあ。

あと、今回の話は前編です。延々と書いてたらバトルに入ったところで途切れちゃったよ！これが予告詐欺か！申し訳ありませんでしたッ！！

☆アンケートのお知らせ☆

今作のヒロインがまったく決まらないので皆さんの意見を募集いたします。

- ・一夏のハーレムメンバーでない
- ・名前のついているキャラ
- ・亡国の人達は無理

以上の条件で皆さんの希望するヒロインをお聞かせください。
一応選択肢も書いておきます。

1 束さん

- 2 のほんさん
- 3 山田先生
- 4 千冬さん
- 5 楯無さん（たぶんまだ一夏ハーレムじゃないですよね？）
- 6 それ以外
- 7 そんなことよりハーレムだ！

Life 6 強さの在り処、強者の在り方

そんなこんなで、一週間が過ぎた。

今日は月曜日。

一組女子一同が待ちに待った、織斑兄弟の――つまりは、僕と一夏の対戦日である。

え？話が飛びすぎてる？いや、だって仕方ないじゃないか。一夏にはどうも色々なイベントがあったようけど…僕については、正直たいして何もなかったんだよねえ。

あの後僕がやったことと言えば、授業を受けて、また食堂でごはん食べて、たまに箒ちゃんをからかって、高笑いと共にやってきたオルコットさんの挑発をスルーして怒らせからかった程度だ。

…ああいや、そういえば一応今日に備えての行動もしたっけか。何もしないと姉さんに色々言われそうだったから。授業が終わった放課後はIS学園の資料室で様々な世界大会の対戦風景を映像で見たりした。

なぜか本音ちゃん他一部の女子もついてきて上映会みたいになっちゃってたけどね…本来止めるべきの山田先生もノリノリで解説役になってたのには笑った。

ちなみに、一夏と箒ちゃんの剣道には僕は呼ばれていない。理由？いろんな意味で箒ちゃんが嫌がったんじゃないかな。

まあ、一応僕と一夏は敵同士だし、あんまり一緒に特訓するべきじゃないだろう。そこまで厳密なライバル関係を結びたいわけでもないけど、まあ要は気分の問題だ。

…そういえば、そもそも箒ちゃんは僕の身体能力については知らないのかな？一夏は僕と姉さんが一度だけ戦ったのを見たことがあるけど、アレは箒ちゃんが転校した後だった気がするし。

なら、ひよっとすると今回のことが終わった後で箒ちゃんの対抗心に火をつけちゃって『零夏！私と剣道で勝負しろ！』とかいう展開になるかも…

…いや、多分ないな。あの子はそれよりも僕にからかわれることが嫌で近寄らないだろう。苦手に思われているのは知ってるけど、箒ちゃんって不器用だからつい遊んだり助けたりしたくなっちゃうんだよねー。

「…はあ」

それにしても、憂鬱である。

一夏と戦うことに関して…では、ない。まあ流石にここまで来たらある程度は覚悟を決めたさ。憂鬱の原因はそちらではなく、もっと別の問題である。

今、僕は既に決戦の舞台（というのは誇張表現だけど）である第三アリーナの選手待機室みたいところで闘いが始まるのを待っている状態だ。

そう、問題はこの『待っている』という状況だ。何故僕がここまで延々と脳内の思考を垂れ流していたか考えてほしい。物事には何事にも理由というものがあり、この回想もれっきとした意味がある

のだ…ってまあ、これは大げさすぎるか。
要するに、僕は暇なのである。

「まーだ『白式』は到着しないのかなあ…」

——僕がここに入ってから、既に四十分が経過していた。

いや、うん。原作で到着が遅れるのは知ってたけど、まさかここまで待たされるなんて誰が思うだろうか。

今にして思えば、姉さんが月曜日を僕と一夏の対戦日にしたのはこのための伏線だったのか…！『一夏が経験を積めるように』なんて身内鼯肩をする人じゃないから不思議だったんだけど…赤の他人を待たせるよりは身内でいいか的思考だったんだね！僕の扱いが酷くて悲しい。

しかも、今の僕はピットに独り。一夏は篝ちゃんや姉さんと時間潰しができたかもしれないけど、僕にはそれすら無いよ！クラスの女子は本音ちゃんを含め観客席だし、山田先生は準備で大忙しだし！僕に味方はいないのか！

『呼んだ？』

「呼んでません」

貴方は味方かどうか怪しいじゃないですか。

「というかこの四十分ずっと僕のことを観察してたの！？暇だったんだからさっさと話しかけてよ！」

『お、期待通りのツツコミだあ！いや、そのリアクションが欲しい

がために待ってたんだよ!」

「やっぱりアンタは僕の敵か!」

…しかし、前から思ってたけど…僕、明らかに監視されてるよね？
プライバシーはどこへいったのやら。

まあ、東さんはきちんと僕の精神に配慮して、極端な嫌がらせ行為は控えてくれていると信じてるよ。なにせやりすぎると姉さんの暴力が待っているからね。東さんもそこまで自由はできないだろう。

OHANASHI
…ちなみに、場合によっては僕も参加します。あんまりにもアレな日常を見られていたら記憶喪失になるまであらゆる手段を強行せざるを得ない。そこらへん理解してますよね東さん？

『だだだ、大丈夫だよ！東さん特性センサーでそこらへんの節度はきっちり守ってるから!』

「いやいやいや。どんなセンサーならそんなことできるのさ」
『すごいセンサー!』

——恐らくこれはツツコミを入れてはいけないところなのだろう。うん、アレだ。篠ノ之博士は世界一イイイイ!としか言いようが無い。

ああそうそう、暇つぶしも兼ねて、どうして東さんが僕のことを『監視』してられるかの解説をしておこうかな。これからの試合にも無関係じゃないし。

さて、今更説明することもないと思うけど、ISの対戦というのはそもそもお互いのシールドエネルギーを削りあい、先にそれを0にしたほうの勝ちとなる。

戦闘で多少装甲が吹き飛んだりして戦闘不能になることもあるが、基本的にはシールドエネルギーの有無で勝敗が決まる。当然ながらIS同士の戦いではこれが一番重要な要素なわけである。

どのように相手のエネルギーを削るか、自分のエネルギーを守るか…という戦術を各個人は組み立てて戦うわけだね。

しかし、ちょっと待ってほしい。この短い文章の中に、既に大きな落とし穴があるのに皆さんお気づきだろうか。普通の人なら何も問題はない…しかし、普通じゃない人にとっては明らかに致命的な問題がここには含まれているのだ。

「僕、そもそもISじゃないからシールドエネルギーが無いよ」
『仕方ないね!』

なんということでしよう、僕は世界初・ISと戦うことができないIS保有者なのである! いや、戦闘はできるけどやったら色々ばれてバケモノ扱いされること間違いなしだ!

…そりゃそうだよ、そもそもが本人に話を通さず、束さん一人で勝手に嘘をでっち上げてやってたことなんだから様々な問題が浮上するのは当たり前だ。

しかし、そこは天才・篠ノ之束クオリティ! なんと彼女はそんなまでをきっちり考えていたのである! なんとという(無駄な)手際の良さなのか! せっかくこれを理由に『勘違いです』って言うおうとしたのにバカじゃないんだろうかあの人は! 畜生め!

エネルギー残量すら表示できない(というか無い)僕の『形のな

いIS』。そんな問題を解決するため、束さんが僕に用意したモノ——それが、『コレ』である。

『さあさあ、束さんの自信作をキリキリ取り出すんだよねーくん！』
「テンション高いなあ……えーと——『展開』」

キーワードを呟くと、ISが展開された時のような光が発生し——数瞬後、僕の手の中には褐色のスーツが収まっていた。

その名も——特殊多機能対ISスーツ、『令装』。

束さんいわく、ISスーツのような外見をしたこのスーツを使えば、僕は本来持っていない『シールドエネルギー』の残量を存在するように『見せかける』ことができる……らしい。詳しいことはサッパリわからないが。

このスーツは普段はどことも知れない空間に収納されていて、僕が脳内で念じれば自動的に出てくるようになっていた。専用機持ちはISスーツを格納して自動展開するシステムがあつて、僕のはその応用だそう。ちなみに今はスーツをそのまま手に取り出した状態だけど、自動で装着することも可能である。

……いやいや、応用で済むレベルなんだろうかこれ？ 色々な意味でツツコミどころが満載じゃないか。出したりしまったりするエネルギーとか一体どこから引っ張ってきているのだ。あと何故僕が念じただけで出現するんだ。僕の身体にこっそり何かしてないだろうね束さん……

まったくもって謎の技術である。……どうやったのか聞いてみたいけど、どうせロクなことにはならなそうなので話題を振るのが怖い。我慢しよう。

しかもこのスーツ、偽装だけでなく他にもオマケ機能が大量にく

つついている。IS間のコア・ネットワーク通信もできたり、位置情報のサーチとかも可能だ。そして更に、

「僕のことを盗撮・盗聴する機能がとりあえず確実にしているよね…」

『えっへん！どうだいれーくん！束さんを褒めてくれていいんだよ！！』

「うん、そうだね。次会った時にはアイアンクローをプレゼントするよ」

『えええ！？』

僕の怒りは、既に有頂天なのであった。僕パンチングマシンで計測不能とか普通に出すし。

こうして、束さんに誓いを立てたり、微妙に技術力に引いたりして更に二十分グダグダしていると――ようやく、ピットに備え付けられていた端末が、ピーピーと音を立て点滅を始めた。

それを見て、緩んでいた空気が引き締まる。…と同時に束さんの気配も消えた。恐らくは、これから僕たちの試合を解析することに集中するのだろう。

静かに目を閉じる。…自分の意志とは関係なく、肉体が瞬時に準備を完了させていたことを理解しながら、その違和感を拭い去るように、僕は『令装』の袖をギュッと握った。

今の自分は、どんな顔をしているのだろうか。

そんなことを思いながら、僕はぽつりと呟いた。

「――ああ、やっと始まるのか」

一方その頃、零夏がいるのとは反対側のピット。

「――ああ、やっと始まるのか」

様々な計測器を準備し終え、ようやく肩の荷が降りた織斑千冬は、ふとそんなことを呟いた。

かなり遅れて到着した『白式』は、既に一夏に装着され出撃している。なんの準備もできていない状態だが、そのあたりは零夏との戦闘でなんとかしてもらうしかないだろう。

『むしろ私の弟ならばその程度なんとかしろ』などと思っているあたり、彼女の厳しさや信頼が見て取れる。

「そうですね…結局、零夏くんは随分待たせてしまいましたよね？
後で謝っておきましょうか…」

「なに、気にするな。零夏だから問題ない」

「ええっ!? いくらなんでも扱いが酷すぎませんか!？」

「ち、千冬さん…厳しいですね…」

「アイツも一応『兄』だからな。というか篠ノ之、織斑先生と…いや、今は放課後だ。別にいいか」

…これも厳しさや信頼ゆえだろうか？

真耶が思わずツツコミを入れてしまうくらいに、零夏の扱いは残念であった。本人が聞いたら『ひどいや姉さん! 横暴だ! この休日下着女め!』などと叫んで千冬にブン殴られそうな台詞である。

さて、現在、この場にいるのは三人。織斑千冬、山田真耶、そして——篠ノ之箒だ。

一般生徒にすぎない箒が何故ここに居るかというと、ずっと一夏と『白式』を待っていたために観客席のほうは既に空席が無くなってしまっていたからだ。今回の試合にはクラスメイトだけでなく、一学年の生徒のほとんど…どころか、全校生徒が押し寄せている程である。

実は集団にいるのが苦手な箒だ。千冬のこの配慮には非常にありがたく、先程は深々と頭を下げていたりもした（故に、零夏の扱いの酷さには若干引いていたりもする）。

「あ、一夏くんが出てきましたね」

「!」

真耶の言葉に反応して、箒はISを纏った一夏のほうに目を向ける。

開いたゲートから飛び出した一夏は、アリーナの外周を飛んで時折調子を確かめるようにぐりりと宙返りしたりしていた。

時折見えるその顔立ちは凛々しく、箒は六年の歳月を経て成長したその顔立ちについて魅せられる。観客席からキャーキャーと歓声が飛ぶのに多少ムツとしながらも、箒は自分の鼓動が早まっているのを感じて、彼女は胸に手を当て、こっそりと呟いた。

「……一夏、頑張れ」

「やれやれ。アイツも大人気だな」

「っ!？」

「ふむ、零夏も出てきたか」

小さな呟きにさらっと返答されびっくう!と身体を震わせる箒。

しかし言った本人はそちらのほうを向かずに、ただもう片方の弟に関心を寄せていた。

聞かれた恥ずかしさに顔の紅みを深めながら、箒はバツが悪そうに画面に目を戻し、

「……え？」

身体を硬直させた。

目の前のスクリーンには、解放されたゲートの淵に佇む零夏が映っている。

流石に人間のサイズにカタパルトは使えなかったのだろうか、零夏は金属の床の上を歩いて移動していた。その身体は褐色のスーツで覆われており、見た目だけなら先程のISスーツを着た一夏の格

好と似たものだ。違うところは、彼のスーツには腰に布のようなものがアクセントとして巻きつけられている程度だろうか。

そう、ただ彼は歩いているだけだ。こちらの方を向いてすらいない。

それだけなのに―――箒はなぜか、鳥肌が立った。

「……なんだ、アレは」

先程とは違う意味で、どくんどくと鼓動が早くなるのを感じる。それに気付けたのは、がむしゃらながらも箒が剣道に打ち込んでいたからだろうか。

剣道など、武術を学ぶ者なら誰もが習得する『眼』。観察眼と言いつても換えることもできるだろう。そして、常人よりも優れた箒の眼は、今の零夏を見てある一つのことを語っていた。

―――アレは、ニンゲンを超えている。

気を抜いているだけで彼の『気』に吞まれるような錯覚を覚える箒を横目に、モニターの中の時間は止まらずに進んでいた。

『来たのか、零夏。…本当に『カタチがないIS』なんだな。そうしてるとただのコスプレにしか見えねえや』

『遅れたのはそっちの方だよ？しかし、一時間以上待たせたくせにまだ一次移行も終わってないとは。姉さんは何か言ってた？』

『…千冬姉には「ぶっつけ本番でなんとかしろ」ってありがたいお言葉を貰ったよ』

『ふむ。ひょっとして僕は姉さんに面倒ごとを押し付けられたのかな？』

話しかける一夏に、零夏は文句も混ぜつつ言葉を返していた。大勢の観客が2人に注目するが、流石に彼らも視線にはもう慣れている。

——静かに笑う零夏に、いつものような緩みは見当たらない。むしろ言葉の端に喜悦を滲ませ、零夏は一夏と向かい合っていた。その目に見えない圧迫感に、少しづつ観客席のざわめきが消えていく。『白式』のハイパーセンサーを通すまでもなく、一夏も理解していた。

（零夏は…本気だ）

彼は既に戦闘態勢を終えている。…攻撃してこないのはあくまで、自分の『準備』が終わっていないからに過ぎない。それはまさに、相手が剣を抜くまで自分は切りかからない、という一種の『余裕』だった。

嘗められている、と一夏は思わない。

むしろ当然だと思った。

（——零夏は、千冬姉よりも強いんだ）

取り出したブレードを知らず知らずのうちに強く握って、一夏は目の前の『兄』を見据える。

そうだ、決まっているじゃねえか、と一夏は思った。奇しくも、零夏の持つ『原作』と同じ思いを、彼は心の中で宣言する。

（——他のあらゆる面で負けているなら、せめて心だけは負けなようにするんだ……!!）

それを見て、零夏は果たして何を思ったのか。

『——いい表情だ』
かお

『弟』の顔を見ながら、『兄』は薄く笑ってそんなことを呟いた。

不意に——トン、と零夏が跳躍する。

「っ!?! 零夏くんっ!?!」

「落ち着け、大丈夫だ」

思わず真耶が叫んだのを、千冬が制する。

彼女の言ったとおりに、5メートル以上はあるゲートの淵から跳んだ零夏はそのままアリーナの土に音を立てて着地するも、平然と立ち上がって一夏を見上げた。

負けじと一夏もそれを睨み返す。不敵に笑う兄の姿に、自分の口の端も釣り上がるのを一夏は自覚した。

『ビルからいつ飛び降りても大丈夫そうな強度だな、零夏』

『むしろ飛び移るくらいはできそうだけどね。…さて、一夏』

軽口を言い合いながらも、それでも2人の間の空気は張り詰めている。その空気が限界に達し、双方が激突するのはもうすぐなのだと、この場の全員が理解していた。

『今から始まるのはあくまで前座だ。戦闘とは呼べない、むしろ訓練というべきモノだね』

『…今の俺は、闘う相手として不足だってことか？』

『その通り。一夏はまだ不完全だからね。自分が一番わかってるだろう？』

『…そうだな』

思うところがあるのか、苦々しく返答する一夏。

それを見て、真耶は眼鏡の位置を直しながら、千冬に自らの疑問をぶつけた。

「織斑先生、これはつまり…」

フリースト・シフト

「一次移行を終えていないことを言っているのだろうか」

「：『専用機』として成立していない状態では、零夏にとって一夏は『敵』ではないと？」

不思議そうに、というよりは不可解な表情を浮かべた箒も、それに口を挟む。

彼女にとってISはあくまで『道具』であり、セシリアのような専用機を持つことに対しての誇りは無い。故に、自分と同じようにそんなことには執着しないであろう零夏が、どうしてあのようなことを言い出したのが気になったのだ。

「ここで問題になるのは『専用機』ではないな。言ってしまうば、今の一夏は刀を鞘から抜く方法すらも知らずに戦場に立っている状態だ」

「：あるいは、銃に弾を込めるやり方を知らない、ですか？」

「そうだ。だから、零夏は『これは実戦ではない』と言っているのだろう」

——戦場に立つならば、武器を持つ者はその務めを果たさなければならぬ。

それは、千冬が一夏に学ばせたかったことでもある。『あらゆることには責任が伴い、人は何かをしたならばその対価を背負わなければならぬ』。かつて、千冬が一夏に言った台詞だ。

この言葉は、今すぐにやれ、出来ないならば止めろ——という意味ではない。

出来ないならば、出来るように努力する。途中で投げ出さず、最後まで真摯に自分が行ったことと向き合い続ける。それが、生きていくために一番大事なことなのである。

「要するに、零夏は『今から刀の抜き方を教えてやる、これが実戦

なんて思うな』と言いたいんだろうさ」

「…つまり、零夏くんは『実戦』をしたことがあるんですか、織斑先生？」

「その辺りの話はまあ、そのうちな。とはいえ今回のことは丁度良かった。ISというものは持ち主に適応するように出来ている。あいつの場合、実際に戦うのが一番いい方法だろう」

「千冬さんはそこまで考えて、オルコットの前にあの2人を戦わせたのですか…？」

「…いいや、そんなことは考えていなかったさ。なにせ私は——」

——あいつらの姉だからな、どちらかを贖するわけにはいかないんだ。

最後の言葉は口に出さず、千冬は『弟達』を見続ける。

こうして話をしている間にも、一夏と零夏は言葉を交わし続けていた。

『まあ、一夏ならすぐ闘えるレベルにはなるだろうさ。一夏の『準備』が終わるまでは武器を使わないであげるから、さっさと調整を終わらせてるようにしてよ？』

『…む、ちょっと待て。今、思いつきり手加減する宣言したよな？もう既にしてもらってるのに、そんなハンデ貰えねえよ』

『なーに言ってるのさこのヒョっ子め。そもそも、こんな僕に対し

て今からそのデカイ刀で遠慮なく斬りつける気だろう？もし一夏が強いなら、刃を当てないように闘うことぐらい余裕でしょ。できるの？』

『いやいや！お前に対してそんな加減できるわけないだろ！千冬姉ですらないぞそんなこと！！』

『え、その発言は割りとショックだなあ。…まあ、戯言はこれくらいにしようか』

そう言っ、上空の一夏へ手を差し伸べるように延ばし——零夏はニヤリと笑って、言った。

『僕に剣を抜かせると言うなら——強くなるんだ』

分かり易い挑発だ、と一夏は思う。けれど、彼にとってその言葉は心地いいものだった。

箒の特訓で、自分が怠けていたことはわかっている。零夏の言葉は正しいのだ。今の自分は周りの誰よりも底辺に居て、だから彼の敵にすらなれていないのだと彼は思う。

——でも。

——ここがドン底なら、この先は這い上がるだけだ。

『ハッ——上等おおおおおおおおッ!!』

兄の言葉に応えるように、満面の笑みを浮かべながら一夏は叫んだ。

同時に、『白式』を地面に——零夏のもとに、加速させる。

最初の一撃は肝心だ。だから、今の俺の全力を振るう。そして、その次の一撃は先程の『全力』よりも強く振るう。そうすれば、いつか『戦場』に辿り着き、いずれかは他の皆に、箒に、千冬姉に——そして、零夏に届くはずだ。

だから応えろ、と一夏は強く念じる。この一瞬にも、視界の端に映るデータは彼に最適化されていく。それでも足りない。彼には届かない。もっと、もっと強くなりたいと、彼は願う。

『——行くぞ、白式いいいいっ!!』

接近しながらブレードを振りかぶる一夏に対し、零夏はその場を動かなかった。

ただ拳を構え、ギシリ、と全力で力を込める。

彼は、自分のことを強いと思ったことなど無い。力は借り物で、思考は偽物。こと戦闘に関して強いのは『自分』でなく『彼』であり、ただ力だけ手に入れてしまった自分はひどくチグハグだ。

こうしている今も、心は力に溺れてしまいそうになる。自分には力があるのだ、と。それを使えば全ては思うがままだ、という欲が溢れ出しているのを、僕は必死に抑えつけている。――ああ、こんな気分になるから、戦うことは嫌いなんだ。

だからこそ、一夏には強くなってほしいと思う。自分とどこか似ている弟に、『力と強さは別物なのだ』と教えてやりたい。

だから、零夏は呟いた。

『――行くよ、ヘラクレス…!』

自分は、英雄ではないのだと。

一夏が迫る。白になろうとする刃が振り下ろされる。

零夏が迎え撃つ。英雄になるまいとする拳が振り上げられる。

そうして、互いの刃と拳が、激突し――

――戦いの火蓋が、切って落とされた。

Life 6 強さの在り処、強者の在り方（後書き）

推敲終わり。誤字だらけでした。：後書きも含めてな！自分を殴りつけたいでござる。

さて、本編の話ですが：束さんのチート発明の原理についてはツツコミ禁止です。もうアレはそういうものなんだと思ってください。『令装』の外見についてはバサカというよりホロウのアヴェンジャーみたいな服装（のタイツ版）をイメージして下さればと。コスプレですな。

今回の話では『強さ』がテーマでした。一夏にとって零夏は千冬さんと同じくらいに『強い』存在ですが、零夏は自分のことなんて全然強いなんて思っけません。人の認識の差というものですね。

ちなみに、一夏がなんで零夏を強いと思ってるかは色々理由がありますのでこの後の展開をお待ちください。姉さんとの勝負云々も然り。

で、今回の話で語られている『ISの初期設定すら終わらせていない一夏は弱い』という言い回しですが、これは一夏が弱いという問題ではなく、LV10のキャラクターがLV1（初期状態）のキャラのことを『力不足だ』と言っているイメージで書いたつもりなのです：伝えられているでしょうか。

零夏がやろうとしているのは、『オマエもう経験値は溜まってるんだからさっさとかばたんのトコ行って能力上げて来い』ということです。逆にわかりづらいか：

ちなみに、先程の認識の違いの話をLVで例えると、零夏は自分のことを『LV10のくせにチートで能力だけ上げたヤツ』、というように捉えていますが一夏にとっては千冬さんと並んで『LV99

の最強キャラ』です。

『自分は強くない、力があるだけだ』というのは転生チートモノで僕がよく考えることのひとつです。

今回の話は『力を手に入れた人は、自分のことをどう思うんだろう？』という疑問がテーマですね。

俺TUEEEEの展開も僕は好きですが、自分に自信が持てない人間は強すぎる力をどう思うのでしょうか。

零夏が武器を取り出さないのは、本当に一夏への手加減だけが理由なのでしょうか？

なーんてことを書きまくっていたせいで8000字も書いたくせに戦闘パートを終わらせられませんでした。

俺のバカ野郎があ！短くまとめる能力が欲しいです。

ところで、非常にどうでもいい話なんですがFate／zero非常に面白いです。ウェイバーくんの可愛さ、ライダーのかつこ良さ、アサシンの踊りっぷりなど見所がありますね。

作画も演技も一級品です。明らかな名作になることは間違いないでしょう。

でも何よりもイリヤが可愛いすぎだろオオオオオオオオオ！！キリツグズルしてたーとかよおおおお！！もう可愛くて死ぬようござアアアアアアアアア！！！！

そんなFate／zero、ご覧になっていらっしやらない方は是非ご視聴をお勧めいたします。本当に面白いですよ！

L i f e 7 全て超えるのなら、白になれ（前書き）

遅れました。まさかの一万六千字です。自己最高記録や…！！

さて、今回アンケートの途中経過を集計してみました。

「〇〇か××がいい」的な票はそれぞれに追加したので実際のアンケート数より票が多いです。

- ・のほほんさん33
- ・束さん17
- ・会長10
- ・姉さん8
- ・山田先生5
- ・ハーレム14（以上）

…のほほん神T U E E E E E ！！

うーむ、多分このままいくと彼女の単独ヒロインになりそうですね。とはいえ、他のキャラの出番が全く無くなるということでは無いんですが。

それにしても会長は意外と健闘しておりますね…まだ出てないのに。次
の話でテコ入れ入るのに。やはりのほほんさんの影響なんじゃないのか。

あと、束さん『と』のほほんさんが良いです！的な票も目立っていました。

ハーレムは実際のところ20近く票を集めてたんじゃないでしょうか。…しかしハーレムに関しては意見が完全に割れていましたね。

これについては改めて皆さんに意見をお聞きしておくべきなのかもしれません。

ぶっちゃけ、ハーレムか否かどっちだと想いますか？

アンケートは次回の投稿までを期限とさせて頂きます！

L i f e 7 全て超えるのなら、白になれ

「……そろそろ、始まった頃でしょうか」

同時刻、学生寮――

世界初である『男性同士のI Sによる戦闘』を見るためにほとんどの生徒が出払っている中、唯一自室に残っていた少女、セシリア・オルコットはそんなことを呟いた。

何故彼女がここに残っているかという点、今回の3人の模擬戦において、彼女は初日は戦闘を行わず、二日目にとめて男子2人と対戦することになっているためだ。

そのため相手の情報を一方的に入手しないように、彼女は千冬から2人の試合中は自室で待機していることを命じられていたのである。

勿論、彼女は努力でその実力に至った『代表候補生』だ。決闘においてそのような『卑怯な手段』を使う気はまったく無かったが――妙な疑いをかけられトラブルを起こすことも無いだろう、とおとなしくその指示に従い……こうして今に至る。

しかし――この待機時間は、彼女が思っていたよりも案外暇であった。

（静かですわね……一体、どれほどの人数が試合を観に行ったのやら）

『男子』というものがそこまで珍しいものなのだろうか、などと

思い：世界に2人しかいないのならば当然か、などと思い直した。
同時に、あの2人の顔を思い出してしまいセシリアは自分の眉間に皺が寄るのを感じる。

「あの野蛮人、それにヘタレ男……!!」

唇を噛みながらセシリアは唸る。

男子のことを考えるなど普段の彼女ならば到底考えられないことであつたが――やはり、何だかんだ言っても明日は彼らとの試合だ。時間が余っている自室待機ということもあり、消そうとしてもセシリアの頭の中には織斑兄弟の顔が浮かんできて、余計に彼女を苛立たせた。

ちなみに彼女の中の零夏のイメージは『フヒヒ!あの美少女僕の言葉に騙されてやがるお!』などと陰口を言う、本人が見たら割とショックを受けそうな気持ち悪いキャラである。

そんな(彼女の勝手な)脳内イメージ2人を『すみませんでしたあ!お詫びに我々を足拭きマットとしてご利用ください!』などと言わせることで屈服させ、ようやくセシリアは一息ついて――気分を入れ替えるために、紅茶を淹れることにした。

自身のものである巨大ベッド(特注品。ちなみに導入の際ルームメイトは静かに泣いた)から腰を上げ、台所の食器棚からティーセット一式を取り出す。

茶葉を取り出そうとスプーンを掴み上げて――ふと、セシリアは唐突に零夏の言った言葉を思い出した。

『――君に答えを出すのは僕の役目じゃない。一夏の役目だよ』

……あれは一体、どんな意味を持っていたのだろう。
適当に話をはぐらかしていたあの男は、どうしてだか判らないけれど……あの一瞬だけは、セシリアの方を真っ直ぐ見ていた気がした。

けれど、織斑一夏はそもそもISの基本的な知識すら欠けていて、そのくせ試験で教師を倒したなどと言うから——結局セシリアは、零夏に尋ねた『貴方にとってISとは何なのか』という質問すらできぬまま、今に至っている。

「……織斑一夏は、私の望む『答え』を持っていますの…?」

正確には——零夏が持っていない、というのが正しいのだが、それを知らぬまま、セシリアは思考の海に沈む。

彼はどのような気持ちでISを持っているのか。力に吞まれているのか、それともそこで止まらず、今も進み続けているのか。

どうか見せてほしい。そして教えてほしい。

死の際に母と一緒にいた父は、どのような思いでいたのか。父は強かったのか、弱かったのか。

彼女は心の奥底で望んでいるのだ。どうか、自分の傲慢を壊してほしい、と。本人は気付かないままに、何も知らない相手に、縋る様にしながら。

——彼女は気付かない。自分自身が『父親』のことしか見ていないということに。

一夏や零夏に向き合うことをせず、ただ自分の身勝手な幻想を押し付けているということに。

「……どうして、こんなことに期待しているのでしょうか。ただ、彼らは『最初に動かした男』である。それだけですわ」

その間違った想いが。

彼女が最も嫌う、『人の誇りを損なう』行為が——とある少年に碎かれ、姿を変える時は——もう、すぐそこまで迫っている。

その足音に気付かず、彼女は上を向いて、呟く。

「——今、あの2人を見に行っている人の中で、『強さ』を期待している人など、ほんの一握りでしょうに」

セシリアの言う事は間違っていなかった。

零夏と一夏、2人の試合は観客席を埋め尽くすほどに人を集めていたが——実際に彼女達の中で、彼ら個人のことを見ている者達はほんの僅かであった。

ただ、『男』だから。

ある者は物珍しさから。またある者は流行の会話についていくため、そしてまたある者は単なる暇つぶしに——少女達はただ、そこに来ただけだ。

一組のほとんどの女子たちもそれは変わらない。彼女達はISについて学ぶためにやって来た。『代表候補生』というものの強さも判っていて、だからこそ一夏を『無謀だ』と笑い、零夏のこととは内心『巻き込まれた気の毒な人』などと思っていた。

そう、思っていたのだ。

目の前の光景を見るまでは。

ドゴオオッ！！という爆発音が響く。

あまりの衝撃に、地面の一部が吹き飛んだ。

『ぐ、おおおおおおああッ!!』

衝撃を受けて、一夏が叫び声をあげる。地面と対応するように、白い機体は空中へ吹き飛ばされ、きりもみに回転しながらも急停止しようとする。

拳と剣の激突の結果、助走をつけて全力でブレードを撃ち込んだにもかかわらず、力負けしたのは『白式』の方だった——その事実、観客席の少女達が驚きのあまり言葉を失う。

反動で空中に投げ出され、強烈なGに視界を明滅させながらも——即座に体勢を立て直し、一夏は地上の方に向き直り、土埃が舞っている場所にいるであろう『ヘラクレス』を——兄を、睨み付ける。

その口元には、寧猛な笑みが消えることなく張り付いており。恐らくは兄のほうも同じ顔をしているのだろう、とそこにいる全ての人々が思った。

異様な程の静寂が、セカイを満たす。

誰も、一言も喋れずにただ——目の前の試合に視線を釘付けにされていた。

この戦闘が始まってから僅か数秒で、彼女達の頭の中から『男だから』などという興味本位の理由は吹き飛んで消滅している。それ

だけの光景が眼前には広がっていた。

砂煙の中で、ゆらりと人影が揺れる。

それだけで、少女達の身体が震えた。

覆い隠す砂の粒子が、彼の、織斑零夏の姿を曖昧にしていくのを見て、誰かがごくりと生唾を飲み込む音がする。

自分達が、御伽噺のような『神秘』に吞まれていくような錯覚の中——彼の存在感に塗りつぶされるように、一人一人が、巨人の姿を幻視した。

常識が崩れていく。幻想が目の前に顕現する。

誰もが信じられない現実を否定しようとして、それが出来ないことに気付き愕然としている。それ程までに信じられない事実が、容赦なく目の前に突きつけられていた。

——ヒトガタが、ISを超越している。

誰もがいつか望んで、常識に、現実にかけて諦めていったユメ。それが今、目の前にある。

子供の頃に描いた憧憬。抱いていた幻想。これはIS同士の対戦で、ただ片方がカタチを持たず人間のまま戦っているだけだと頭の中では理解しているはずなのに——誰もが、その姿に見惚れていた。

あの時の憧れをそれでも忘れられなかったから。あんな風に、英雄^{ヒーロー}のようになりたかったから——自分達は、ISに乘ろうとして

いたのではなかったか。

『ヘラクレス』。

形が無い、というそれだけのことが特徴の筈だったISは今、少女達にまったく別の衝撃を与えていたのであった。

そんな中。

ほぼ唯一、観客席の中で存在感に吞まれていない一人の少女は、笑顔さえ浮かべながらその試合を観戦していた。その神秘を彼女がすんなり納得できたのは、いまだ短い期間なれど、彼女が少年のことを少しづつ理解していたからだろうか。

そんな彼女も、言葉を発することは無い。……彼女もまた、この光景に胸を高鳴らせている一人だった。だから、水を差す一言などには要らない。そんなことをしなくても、応援することは出来ると彼女は知っていた。

（——頑張れ！れーか君！……うーん、ニックネーム普通になっちゃったなあ）

それは、彼女が零夏と共に過ごして、その力の片鱗を知りながら——なおかつ確かな信頼と期待を、ルームメイトに寄せていた故に。

最初の朝に聞こえた、彼の独白。あれほどの力を持ちながら、ソレに吞まれず『自分自身』であり続けようとしている姿をただ、布仏本音は凄いと思ったのだ——

『ふーむ。流石に剣をそのままブン殴ると結構減るね』

砂埃の中で呟いた兄の独り言の音が——ISを通じて、まるで耳元で言われたかのような明瞭さで一夏に届いた。

彼の言うとおりに、お互いのエネルギーは一夏が785、零夏が540。開始は800だったことを考えると数字の上では一夏が優勢に見える……が、実際は当然そうではない。そもそも、素手での戦闘は零夏にとって、ただのシールド性能の確認に過ぎないのだから。その証拠に、彼の台詞には油断こそカケラも無いが——やや『余裕』が含まれている。その事実にブレードを強く握り締めながら、『弟』である彼は改めて、底知れない零夏の実力を痛感していた。

(強い……ッ!)

今のは自分にとって完璧な一撃だった。にもかかわらず、こちらの剣は相手の拳に打ち負た。

それはつまり、零夏という存在はそれほどに遠い位置に立っているという証明に他ならない。いや、それとも——これは自分がまだまだ未熟だという証拠だろうか。どちらにせよ、一夏がまだまだ彼に追いつけていないのは確かな事実だった。

足りない。何もかもが。

ならばもっと速さを。もっと力を——そう、一夏は望む。今、彼にできるのは愚直なまでに剣を振るだけだった。迷う必要も止まる理由も存在しない。

だから、一夏は再び零夏に向かって加速した。

土煙の中であろうと、ISのセンサーはその姿をハッキリと捉える。一夏の専用機としてそのカタチを最適化しながらも、白式は詳細なデータと計算結果を提示した。

距離接近、接敵まで残り0・7秒。目標は移動せず。

（届かなくても諦めねえッ！何度でもやってやる！！）

——白式が視界に表示した情報に従い、攻め入るための完璧なタイミングで彼は零夏に剣を振り上げ、

『じゃ、力は十分判ったから——次だ』

たんっ、という軽い音が聞こえた。

ハイパーセンサーがアラートを鳴らすのと、一夏が驚愕に目を見開くのと——どちらのほうが早かったか。それ程までに一瞬の出来事だった。

先程まで動いていなかったはずの零夏が、目の前に立っている。

『な……ッ!!?』

移動の兆候は無かったはずなのに、何故——!?

予想を裏切る目の前の光景に、思わず一夏の身体が硬直する。

そして、それは戦闘では致命的な隙である、と一瞬遅れて彼は気付いた。

だが、目の前の存在はその硬直を見逃す程、甘い存在ではない。

ほんの一瞬が引き伸ばされるような感覚の中、流れるような動作で零夏は拳を引き絞る。

一夏は硬直したまま、その一連の動作を成す術もなく——いや、むしろ動きに魅せられるように——見ていることしかできなかった。

『——油断は禁物、だね』

細い腕から放たれた、鋼鉄をも砕く一撃。

それは吸い込まれるように腹部へと叩き込まれ、凄まじい衝撃と共に、白式を再び吹き飛ばす。

『ぐ、おおおおああああッッ!!!!』

——警告。胴部装甲破損、損傷拡大!——

ISの防御を貫通した痛みに叫び声を上げながらも、一夏は白式の警告メッセー^スジが表示されるのを視覚ではなく、感覚で理解した。ISと自分が同一になっていくような高揚感^{ファースト・シフト}は、一次移行が進行している証だろうか。

凄まじい速度で流れていく視界の中、それでも強引に機体を動かし姿勢を取り戻そうとする。ギシギシと身体が軋む音が確かに聞こえたが、それら全てを無視した。ISの補助が無ければとくに気絶しているほどのGに耐えつつも、それでも彼の顔から笑みは消えない。

(——やっぱ凄えな、零夏は!!!)

そこに込められているのは、兄への惜しみ無い賞賛だった。

零夏のことをずっと近くで見ていたのは、誰よりも弟の一夏だ。今戦っている兄のことを、この場の誰よりも——あの千冬の想いさえも越えて、一番誇りに思っているのは自分なのだ、と一夏は思っている。口には出さないけれど、姉と同じかそれ以上に——兄として、織斑零夏は一夏の憧れだった。

だからこそ、自分も、アレに追いつかなければならない。

その名前を傷付けないために——守られる弱い自分から、誰かを守る自分になるために。

改めて、一夏は一瞬で遠く離れた零夏を見据える。
彼は動かない。ゴキゴキと拳を鳴らして調子確かめつつ、獣の
ような笑みを湛えながら、零夏は一夏を待っていた。

『——次は技だ。ほらほら、かかって来なさい』

零夏が言った明らかな挑発。

その言葉に込められた想いは侮蔑ではなく、弟の成長を望む兄と
して——手伝ってやる、という意思表示だった。

発言の意味を正しく理解して、そのスパルタっぷりに思わず苦笑
を漏らしながら……一夏はブレードを構え直し、改めて零夏に向き
直った。

そして、深呼吸を一回だけ行ってから——腹の底から声を出し
て、叫ぶ。

『いくぞ、零夏あああっ!!』

瞬間、爆発するように白式が加速した。

彼との距離を、少しでも縮めるために——少年は、何度でも剣
を振るう。

「……すごい」

ぽつり、と真耶の声がピットの中に響いた。

声にこそ出さないが、無言で残りの2人もその発言を肯定した。
千冬は僅かな笑みを湛えているのに対し、箒は呆然としているという違いはあったが。

とはいえ、台詞が感嘆に満ちているからと言って、真耶が観客席にいる少女達と同じように零夏の存在感に吞まれていた、というわけではない。元『代表候補生』として、また教師として、彼女が目していたのは彼らの『実力』についてである。

「零夏くんは一体どこであんな技術を……？それに、一夏くんの方も凄い成長スピード……」

「確かに、あいつの動きは段々キレが良くなっているな……白式を使いこなし始めた、ということか」

2人が会話している間にも、専用の機材が詳細なデータを割り出しそれぞれのISの推定出力などを算出している。彼女達の目の前にあるモニターでは、詳細なデータやエネルギー残量と共に、零夏と一夏が鎬を削り合う光景が写っていた。

2人の戦いは、最初の威力を競うような戦闘から、武道の稽古のような『打ち合い』へとシフトしている。通常の武道と違うのは、片方が素手で、それでいて相手を完全に圧倒しているということだ。

一夏の横斬りを、零夏は屈んで避ける。

『白式』の袈裟斬りを、『ヘラクレス』がブレードの腹を殴りつけることで逸らす。

弟の不意を付いた回し蹴りを、兄が同じように蹴り飛ばす。

人間の反射速度の限界を超越した世界の中で、零夏は一夏の攻撃を紙一重で回避しつつ、避けきれないものは拳で軌道をずらして立ち回っていた。

ISの性能だけではなく、技術という点でも零夏は一夏を越えており———それどころか、千冬から見ても零夏は、世界大会に出場していた数々の猛者に匹敵するレベルの戦闘能力を有している。

いまだに武器を使用していないにも関わらず、である。

「……ISだけじゃない。これは、零夏自身の強さ……?」

呆然と呟く筈をちらりと横目で見ながら、千冬は真耶との会話を続ける。

「だが、やはり零夏の地力がずば抜けているな。まだまだ一夏では届かないだろう」

「そうですね、残念ですけど……そういえば、二回目の一夏くんの突進の際、『ヘラクレス』はまるで、瞬間移動のような動きをしま

したよね？あれはどういった原理なんでしょうか？」

「原理、という程でも無い。……零夏はただ単純に、反応できない程のスピードで踏み込んできただけだ」

「ええっ！？ど、どう見ても消えてましたよ！？私はてっきり、高速移動する単一仕様能力なのかと……」
ワン・オフ・アビリティ

そう、零夏が先程行ったことはただの単純な『踏み込み』だった。しかし——あらゆる戦闘で基本であるはずのその行為は、余りにも高度な『技巧』と『速度』で行われることにより、人間の目では捉えられない程にまで到達したのだ。

まるでフィクションの世界だな、と千冬は一瞬考えて、ISも登場する前はSFの産物でしか無かったことを思い出した。

（まったく、束が絡むとロクなことが起こらないな……）

とはいえ——人間の目で捉えることはできなくても、ISのセンサーで感知することは本来なら可能だったはずだ。それを一夏ができなかったのは、本人が反応に追いつけていないか、もしくは白式が情報を処理しきれなかったかのどちらかだろう。あるいはその両方だろうか。

恐らく、その問題はファースト・シフト一次移行を完了させれば解決するだろうが……その時こそ、零夏は彼自身の持つ『武器』を取り出すのだろう。

戦い続ける弟達をモニター越しに見ながら、千冬はふと、昔のことを思い出した。

遠い日の思い出。

膝をつく自分と、それを驚愕の眼で見ている一夏。そして……寂しそうな笑顔を浮かべた、零夏の姿が、蘇る。

あの日戦っていたのは零夏と自分で、一夏はただ見ていただけだった。その記憶から数年が過ぎて——自分と一夏は変わったのに、零夏は何も変わっていない、ということを千冬は実感する。

そう、あの時に『勝者』だった零夏は確か、『敗者』である自分にこんなことを言っていた。

——僕はどうしようもなく弱いんだよ、姉さん——

「……やれやれ。いつになったらあいつは気付くのやら」

「？織斑先生？」

真耶の眩きには応えず、千冬は映像の中の弟を見る。そこには、圧倒的な力を持って佇む零夏がいる。その姿は英雄ヒーローのように堂々としていて、観客席にいる女子からはさぞ格好良く見えているのだろう。

だが、千冬は知っている。零夏は本当は臆病で、穏やかに過ごするのが好きで、戦いなんてしたくない性格の持ち主で、中身はどうしようもないヘタレで、格好悪くて、人をからかって遊ぶのが趣味のような少年なのだ。

そのどちらも、織斑零夏だ。

そんな当たり前のことを——普段から自分自身に言い聞かせているくせに——彼は実のところ、まったく判っていない。

「『力』だけで私に勝てるものか。もっと堂々としている馬鹿者め」

勝負というものは、敗者が負けを認めたからこそ成り立つのだと彼女は思っている。

だから、決して口には出さないけれど——心の中で、千冬は零夏に言っただけだった。

——お前は弱くなんてない。

『世界最強』の、この私が保証してやる——

どれくらいの時間が過ぎたのだろうか。

不意に——ひたすら剣を打ち込んでいた一夏の動きが、止まる。

僕はその硬直に気付いて——しかし攻撃はせず、バックステップで大きく離れることを選んだ。

ズザザ、という音を立て、お互いの距離が10メートルほど開く。

「……ようやく、かな？」

『ああ。待たせたな』

眩いた僕に応えるように、静かに一夏は眼を閉じた。

ゆらり、と空間が揺らぐ。眼を閉じたはずの彼の視界にはきつと、白式の『言葉』が届いているのだろう。

フォーマット フィッティング
初期化と最適化を完了。

もう大丈夫、やっと貴方と戦える——と。

『——白式、展開ッ!!』

一夏が、宣言する。

それと同時に、その身体が光の粒子に包まれ、どことなく褪せたような白色だった装甲が、分解され別の……いや、『本来の形』に組み換えられていく。僕が殴り壊した装甲も修復され、ただ純白に染め上げられていった。

ファースト・シフト
そうして、一次移行は完了する。

ブオンッ!と調子確かめるように剣を……『雪片式型』を軽く振るい、一夏はゆっくりと眼を開けた。

——『白』だ。

先程までの工業的な凹凸は消えて、どことなく西洋的な鎧を思わ

せるフォルムに変化した白式に感じた印象は、その一言に尽きた。
先程まで僕が感じていた中途半端な感覚は消え去って、刃のような鋭い気配がこちらに伝わってくるのを感じる。

「……おめでとう、と言うべき場面なんだろうね、これは」
『何言ってるんだよ、ここがスタートラインなんだろう？ 零夏が言っていた意味がわかったよ——確かに、さっきまでの俺は『戦場』に立ってすらいなかった』

強く笑って、一夏は言う。

ようやく、白式は一夏の『専用機』になったのだ。彼にしかわからない嬉しさを感じているのだろうか？ 恐らくは、僕がその想いを一生感じることは無いだろう。ISは、女性と一夏にしか使えないものだから。

そうして、達成感を纏った弟に軽口を言いながらも——僕は、自分の表情が緊張で強張っているのを感じる。

前座は終わり、彼は本当の戦場に立った。……それはつまり、僕もまた紛い物ではない『戦場』に立たされたことを意味していた。
今から始まる戦闘は、先程とは比べ物にならないくらいに僕の『死』への恐怖は増すだろう。

手加減している状態では対処し切れなくなって、一夏を傷つける可能性が増した、という意味でもあるし、何より——

魂が、警鐘を鳴らしている。

アレは——『雪片式型』は、己を傷付け得るものだ。

僕の身体は英雄の力を手に入れてはいるものの、決して『サーヴァント』になっていくわけではない。

霊体として行動することは不可能だし、聖杯が与えた『狂化』などのクラス別スキルも存在しない。最も大きな特性である『物理攻撃を無効にする』という効果も、人間の身である僕には与えられていない。

つまり、現代の兵器でもAランクに届いていれば、『十二の試練』ゴッドハンドを突破し僕を殺すことは可能なのだ。

そして、目の前の雪片式型とその能力『零落白夜』はISという兵器の中でも最強の攻撃能力を持ち、恐らくその攻撃はAランクに届くであろう代物だ。それが何より、僕は恐ろしい。

どれだけ強くなっても人が刃物を恐れるように、心が勝手に拒否反応を起こす。目の前にいるのは弟だというのに、トラウマが蘇りそうになり、逃げ出したいという恐怖が湧き上がってきた。

ああ——なんて、無様だろう。

結局、こんなチートを持っても僕のココロは臆病なままだ。強さの頂点に辿り着いた姉さんと、目の前で駆け上がるように強くなっていく一夏を見ていると、自分が違うということ強く自覚してしまった。

『けど、こうして向き合って改めて思うよ。零夏はやっぱり強いってさ』

一夏の言葉に、思わず苦笑が漏れる。

その眼に映っているのは、本当は僕じゃない。ヘラクレスという、名前を知らない者がいない程の英雄のものなのだ。物語の主人公のように、それを気にしない程傲慢でいられれば、あるいは僕の在り方も違ったのだろうか。

「一夏。僕は――」

そんなことを思いつつ、僕は一夏の言葉を否定しようとして、

『――「どうしようもなく弱いんだ」、だろ?』

思わず、息を止めた。

『あー、やっぱりそう思ってたろ? 前に千冬姉と戦った時もそんなこと言ってたしなー』

からからと笑いながら、一夏は言う。

対して、僕の身体は硬直していた。台詞を言い当てられたから、というのもそうだけど、一夏が何故そんなことを言い出したのかを理解できなくなったからでもある。

一夏はさっき僕のことを『強い』と言っていた。けれど、今の台詞当ては僕の内心を理解しなければ分からないことのはずだ。自分の弱さが嫌いな僕に、どうして一夏はそんなことを言うのだ。それ

が、全く僕には理解できなかった。

「そんな昔のことを……覚えてたんだ」

『忘れねえよ、あんなの見せられたら。今俺たちを見ている人達と同じだ。……なあ、零夏』

「……なんだい？」

『零夏はさ、きっと束さんがTVで言うずっと前から、『ヘラクレス』のことは知ってたんだろ？』

「そうだね……少なくとも、自分に力があることは知ってたよ」

『あ、やっぱりそうなんだな。……うん、だからだ』

よく、わからない。彼は何を言いたいのだろう。

まだ愚問が解けない僕に、困ったように笑いながら一夏は言葉を重ねる。

『俺さ、中学に入ってから三年間、ずっと剣道やってなかったせいで、色々な勘とか全部抜けちゃったんだ』

「それ、箒ちゃんに言われたんじゃない？」

『……う。ま、まあとにかく、力を持続けるならずっと鍛錬してなきゃいけないんだ。で、今見て分かったけど、零夏はきっちり自分の力を使いこなしてた。つまり、それだけの鍛錬を零夏はしてたんだろ？』

確かに、僕はある程度身体を動かしたりはしていた。

戦闘経験があってもそれが現実に行われたものではない以上、どんな力を持っているかくらいは確かめなければならないというものもあったし、身体を動かすのも嫌いではない。束さんに色々バレてからは様々なヘンテコ訓練をしたりもしたが、今はその話は置いておこう。

『だから分かったんだ。零夏はずっと変わら……ない。それは凄いことなんだってようやく今、実感できた』

確かに、僕は変わってない。でも結局、それは何もしていないっていうことだ。『劣化』はしていないかもしれないけれど、『成長』もしていない。ただ変わらない日々を求めているそんな僕が、どうして強いと言われるんだろうか？

『ああ、そこだよな。零夏はさ、勘違いしてるんだよ』
「……勘違い？」

簡単な話だろ、と一夏は呆れたように——けれど胸を張って、僕に言った。

『——力なんてなくなたって、零夏は元々強いんだ。弟の俺が保証するよ』

きっと、千冬姉も同じことを言うぜ、と一夏は言葉を締めた。
力はただ力であり、それが強さを決めるわけじゃない。僕が教えるまでもなく、一夏はそれを理解していたのだ。だから——英雄の力がどうかじゃなくて、僕の在り方、それこそが強いのだと彼は言った。

それを聞いて、僕はどんな顔をしていただろうか。

……今の言葉が、本当に真実なのかは分からない。

そもそも、たった一つの言葉で、僕が今まで感じてきた想いが全て変わっていくわけではない。今でも僕は自分のことを弱いままだと思っているし、実際に力のない僕を一夏や姉さんが見たら幻滅する可能性だって十分に在り得た。

でも。

それでも、僕は。

『ヘラクレス』でなく、織斑零夏の強さを——誰かが認めてくれたのが、嬉しかった。

『死』から逃げ出している自分を肯定してくれたことに、救われた。

強くなくなっても、日々が平和ならそれでいいと思っていたはずなのに、どうやら僕は救いようのないバカで、欲張りだったみたいだ。一夏に言わせれば、『男なんだから当たり前だろ』なんて返されそうだと苦笑する。

その笑いはたぶん——さっきのような、マイナスなものではな

かった。

織斑千冬の弟として、織斑一夏の兄として、その名に恥じない――プラスの笑顔だったと思う。

『――ははっ。やっぱり、一夏は強いなあ』

静かに、零夏は呟いた。

いつの間にか、身体の震えは止まっている。ひよつとすると、こんな気持ちでいるのは今、この時だけかもしれない。試合が終われば元通りになるのかもしれない。

それでも――今の彼は、死に怯えることなく、まっすぐ立ち向かっていた。

『主人公体質ってヤツかな？漫画の世界に行けば、並み居る敵をなぎ倒して生徒会長になれたりするかもね』

『なーにバカな話してんだよ……現実とフィクションを一緒にすんな』

『ダウト』

『え!?!何が!?!』

軽口を言い合いながらも、一夏は目の前の兄がどこか変わったことを察する。

自分が今、ようやくスタートラインに立ったように、零夏も『何か』を始めるようとしているのか。ともかく――これからが、彼の『本気』であることは間違いない。

『雪片式型』を正眼に構える。

一夏も零夏も、エネルギーの残量はそこまで残っていなかった。『ヘラクレス』がエネルギーを減らしているのは恐らく、素手できつちり剣を弾いていても、完全にダメージを削ることはできなかった、ということだろう。

勝負の決着は、じきに付く。

それを全員が理解した。

『……英雄^{ヒーロー}になんて、ならなくていいんだ』

不意に、零夏がぼつりと言葉を漏らす。

呟きながら、ゆらりと左腕を真上に掲げ、翳すように空に向ける。

『偽物でも、模造品でも構わない』

そのまま左腕に右手を添えて、彼は何かを持ち上げるような構え

を取った。

まるで空を掴むように。天にナニカを求めるように。

『ただ、僕は——一夏の兄でいるくらいには、強くなるって、決めたから』

言葉に応えるようにして、零夏の纏っていた空気が、変わる。

(……なんだッ!?)

ISのセンサーよりも先に、一体の人間として——織斑一夏は、その違和感に気付いた。

世界が軋む音。

「これは…ッ!？」

「き、機材の故障ですか!？」

「違う! 計器に異常はない…それどころか、反_・応してすらいらないだと…!？」

一夏と同じように、ピットの中の三人もその現象に驚愕する。彼女達の目の前のモニターでは確かに異常が起きているのに、最先端の計測器は何も感知していない。明らかに、現代の科学では説明できない光景が広がっていた。

『現実』が、歪んでいる。

言葉では形容できない、常識を超越した光景だった。

零夏の翳した手が『世界そのもの』を侵食するように、何かを削るような異音を出しながらその場所だけが歪んでいた。

ISの自己進化のような、『空間が歪む』ような現象とは、全く別のモノだと千冬の知識は訴える。だが、彼女にわかるのはそれだけだ——それ以外のことを、一切理解できない。

『ヘラクレス』が発していた存在感を、何十倍も圧縮したような——自分の知る世界を根本から破壊してしまいそうな感覚。今まで生きている中で、ソレの意味を理解できるものは、篠ノ之束を含めても存在しないだろう。

これこそが、『魔術』——いや、『魔法』。

——科学とはまったく違う概念。この世界では消え去ってしまった最後の幻想。ラスト・ファンタズム人類がどのような技術を用いても再現できない奇跡が今、目の前に顕現する。

神の遺産。人々の祈りの結晶。呪いの証。

とある世界の魔術師は——それを、『宝具』と呼ぶ。

その歪みがやがて消失し、世界が元の色を取り戻してもなお、一夏の思考は、完全に停止していた。

それほどまでに、目の前の光景は理解を超えていて、見惚れてしまふものだったのだ。

先程の構えのまま、零夏の手には剣のようなナニカが握られている。ような、としか表現できないのは、その形状があまりにも現実離れしていたからだ。

それは、剣というにはあまりにも大きすぎた。大きく、ブ厚く、重く、そして大雑把すぎた。

それはまさに——『岩塊』だった。見ているだけで潰れてしまいそうな神秘を持つ、斧剣とでも呼ぶべきジャンルのその武器の真名を……零夏は、静かに口にした。

『――――ナインライフズ 射殺す百頭』

その名が示すのは、英雄ヘラクレスが扱った、数多くの武器。それら全てを一つにし、『状況に応じた最適の武器を具現化する』という概念武装――

その内のひとつが、この斧剣だった。

自分の持つ雪片よりも巨大な、人の身には余るであろうその斧剣は、しかし零夏の手完全に馴染んでいる。

何も知らない一夏でさえ、一目見て理解した。――ああ、あれは彼の剣なのだ、と。

『……一夏。今から僕は、この世界に生まれて初めて本気を出す』

零夏の言葉に、一夏は一気に現実に戻される。

同時に、兄の言葉の意味を理解し、身体を震わせた。

『――受け止めてみせろ――!!』

その震えは武者震いか、それとも恐怖によるものか。――考え

るまでもない。

『武者震いに決まってんだろッ!!』

叫び、剣を握る力を強めた。

強く強く、己の全力を——いや、それ以上の、白式の力も含めた自分の中のエネルギー全てを彼は剣に込める。空を飛ぶエネルギーさえも剣に注いで、一夏の脚が地に付いた。

所有者のその意志に反応して、『雪片式型』の実体剣の部分が粒子を出して消失し——エネルギーで構築された、白い刀身が現れる。

——【零落白夜】、使用可能——

白式のメッセージを視界の端に捉えながら、真っ直ぐ一夏は零夏を見る。

彼の手にあるソレは、かつて織斑千冬が使っていた剣。

世界最強たる現代の英雄の剣と、神話の時代の最強たる英雄の剣が今、時を越えて並んだのだ。

——何度目かの、けれど最も短い、痛いほどの静寂が訪れる。

千冬が、箒が、真耶が、本音が、全ての人々が呼吸を忘れた。決着一瞬を逃さないために、まばたきすら停止させる。

そして、

同時に、兄弟達は踏み出した。

『『う、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！！！！！』』

極光の白剣と、巨大な斧剣が振り上げられる。

膨大なエネルギーが、絶大な魔力が、奔り、ぶつかり、火花を立てて、収束する。

10メートルの距離は一瞬で消失した。

余りにも眩い白光も、体中を襲う衝撃すらも無視して、零夏と一夏は相手の顔から目を離さずに、全ての動作を完了させる。加速したスピードを足した、人智を超えた攻撃力が狭い空間に集中した。

振り下ろす前から——間違いなく、これは人生最高の一撃だと2人は同時に確信する。

そしてまた、これから先、この斬撃を超えるものがあるとしたら——それが生まれるのは、きっと同じ相手なのだろう、と兄弟は思う。その時が来るまでに、強くならなきゃな、などと場違いな思考が浮かんだ。

そうして、二つは衝突し。

光の奔流に包まれ——わずかに遅れて、凄まじい爆発音が響いた。

『『『きゃ、きゃあああああああッ!?!?』』』』

最初の一撃の比ではないその規模に、アリーナの周囲を守る防壁がビリビリと揺れ、一部は何かの破片が当たったのかヒビが入るものすら存在した。

思わず、観客席の少女達は顔を手で覆う。あまりにも強大な、意識を奪われそうなほどの光と音の暴力が襲い掛る。

だから——勝敗を決めるブザーの音には、誰も気付かなかった。

どのくらいの時間が過ぎただろうか。

ようやく目と耳を回復させた彼女達は、恐る恐るアリーナを見る。グラウンドには巨大なクレーターが出来ており、今の一撃の凄まじさが端的に表されていた。

彼らはどうなったのか、と砂埃が舞う中を少女達は目を凝らそうとして、

『……やっぱすげえな、零夏は』

その前に——力を全て出し切った、というような一夏の声が聞こえた。

え、ひょっとして弟くんが勝ったの！？という叫びが少女達の間で広がって周囲がざわめく中——とある女子は、いち早くモニタリングされていたエネルギーの残量表示を見つける。

「ふわ……接戦だったんだね……」

のほほん、と呟いたその声はザワザワと響く話し声に消える。
そして、更にそれを上書きするように拡声された兄弟の台詞が周
囲に響いた。

『つたく、こんなんで弱い弱い言ってたっつーんだから、いい加減
嫌味のひとつも言いたくなるぜ』

『いやあ、どうだろうね？始まる前はアレを使うとは思ってなかつ
たよ僕』

『というか、実際俺は最初の一撃でハンデがあつたのに負けたのか
……』

白式…エネルギー残量0
ヘラクレス…エネルギー残量43

「「あっ……」」

モニターに表示された数字によろやく気付いて、箒と真耶の声が
重なった。

それを見てよろやく一息ついて、千冬はやれやれという表情で椅
子に座り直す。横の棚からインスタントコーヒーを出し、帰ってき
た弟達になんて言ってるのか、などと千冬は思った。

——やがて、砂埃が完全に晴れる。

そこには、大の字になって倒れている一夏と。

斧剣を地面に突き刺して、そこに寄りかかる零夏の姿があった。

ぼんやりと一夏の身体が光り、『白式』が解除されガントレットとして待機形態に変化する。

良くやってくれた相棒を一撫でしてから、一夏は零夏の方を向く。それに応えて、零夏は立ち上がり一夏に歩み寄った。

「まあ、僕はお兄さんだからね。——今回は勝たせてもらったよ」
「ああ。でも、いつか越えてやるからな」

そうして、兄は弟に手を伸ばす。
その手を握って立ち上がり、弟は笑った。兄も、それに釣られるように笑顔を見せた。

観客席から、歓声が上がる。

ピットの中では、箒が急いで外に出ようとロックされたドアを蹴り飛ばし、千冬がどこからか出した出席簿で制裁されていた。

世界初の男子IS戦。その勝者は――

――兄である、織斑零夏だった。

Life7 全て超えるのなら、白になれ（後書き）

推敲終了。『誤字』はミミズのように這い出てくる……！！

さて、今回の話。まずはセシリアさんのお話でもしましょうか。

この作品の彼女は、『男』というものを全て『父親』と重ねてしまっています。故に零夏たちのことを最初から『自分より下』という先入観を持ちながら扱ってしまっていますね。

これはとても傲慢なことだと想います。『はー、わたくし傲慢ですわーマジっペーですわー誰かにプライド碎いてほしいですわー』的なキャラが今のちよろいさんです。なにこれウザい。

だからこそ、彼女は一夏と真正面から向き合って、その姿を見た時に『もっと知りたい』という恋心を芽生えさせる……という設定です。この作品では。

まあ、何故こんなネタバレをしているかというと一夏VSセシリアは都合によりカットだからです。だって原作でやってるし……。次の戦闘は零夏VSセシリアになりますね。

さて、次。零夏の弱さについてです。

チートが無いと弱いというのが零夏の自己評価ですが、実際彼はそこまで弱くありません。そもそも、死という絶対の事実からある程度逃れている時点で見方によっては『強い』ですよ。

とはいえ、一夏からのお墨付きを貰ったからといって彼が『あ、俺強いんだ』と急に最強主人公になるわけでもありません。当然ですね。

ただ、彼は弟に胸を張れるくらいには強くなりたい、と願い始めました。もしヘタレのままだったら、零落白夜に怯えて目を逸らし試

合に負けていたのは零夏のほうだったかもしれません。

ここらへんの描写は本当に苦勞しています。言葉にできないことを文章にするのは難しい……

さて、最後に『ヘラクレス』の強さについて。

感想でもさんざん言われてた百頭、ついに出せましたよ！

とはいえ今回の本編でもおなじみの斧剣バージョンです。あの斧剣はアインツベルンがヘラクレスに縁のある神殿の柱を加工して斧剣にし、聖遺物として使ったようです。

とはいえ、聖杯戦争で武器として使ったので、多分百頭の武器リストにはしっかり入っているでしょう。

で、斧剣による『本気の一撃』が、エネルギーを全力でつぎ込んだ零落白夜の一撃とほぼ同じ威力、という具合ですがいかがでしょうか。バランスの扱いが難しいです…。

ちなみに、士郎くんが使った九連撃は単純にこれを9回、というわけではありません。

今回のアレとはまた別のベクトルで用いた『本気の一撃』です。イメージとしてはunlimited codesの『巨人の一撃』。相変わらず例えがわかりにくいな俺。

FateZeroとかを見るとパラメータはどう表現すればいいのか本当にわからなくて困りますよ…そもそもセイバーは魔力放出入れて敏捷Aなのだろうか？

さて、今回はVSセシリアさん…に行けたらいいなあ。

まずは零夏の自室待機からです。ある程度楯無さんへのテコ入れが発生しますよ、ファン必見！

今度は遅れないように頑張ります、それでは

Life8 誰もが欲し、望むもの（前書き）

前回、楯無さんの出番があると言ったな。

あれは嘘だ

申し訳ありません。尺などの様々な都合でこんな事になってしまいました：

いや、生徒会長って解説役として便利じゃないですか？姉さんは前回散々解説ポジションにいたのでじゃあ次はちよっと別の人に出番あげるかー、ということで急遽予定を変更した結果今回は会長の出番がナシということに。

：そして結局、出来上がった本文を見返してみると千冬さんとのほぼさんさんの大勝利でした。あとモッピーも。どうしてこうなった。

アンケートは次回の話を投稿するまで、ということにさせて頂きます。

ハーレムについてのご意見をお寄せ下さった皆様、本当にありがとうございました。

Life8 誰もが欲し、望むもの

——試合の後、ピットに戻った僕と一夏を待っていたのは、

「アリーナの土を丸ごと吹き飛ばす気か、馬鹿者共」

という姉さんのありがたーいお言葉と、すばーん！という出席簿による無情の一撃だった。

今更の説明になるけど——IS学園の中でも『専用機』を保有している人物はほんの一握りでしかなくて、それ以外の人達は当然、学園が貸し出す『訓練機』で日々の鍛錬に励んでいる。

ということは、その『ラファール・リヴァイヴ』や『打鉄』うちがねなどのISを使う練習には当然、安全で広いスペースが必要になるわけだ。そんなわけで、IS学園では各生徒が申請すればアリーナの使用权利と訓練機をレンタルすることができる。普通はこの二つの申請をしてから練習やらをするわけだね。

仮にも難関入試を突破して入学してきた少女達だ、空を飛ぶことに対してやる気が溢れていないわけがない。そんなわけで——この学園の訓練機およびアリーナ使用許可予約は、常に一杯だそうである。

つまり、僕たちが使ったこの第3アリーナも当然、この後に使う人達がいたわけで。

『飛ぶ鳥跡を濁さず』ということわざを完璧に無視してしまった弟達に対し、してはいけない（戒め）という意味を込めて姉さんは愛の鞭を振るったわけなのである。……確かに僕たちも悪いけど、

今たくましく成長を遂げた肉親に対してなんて仕打ちなんだい姉さん！

「他人に迷惑をかけるのを怒る。家族として当然のことだろう？」
「なんという正論」

相変わらず他人に厳しく、身内には更に厳しい姉上殿でございました。

まあ、実際のところは『教師』という建前もあるし、今この場では個人的な言葉を言うべきではないって姉さんなりに判断した結果なんだろうけどね。

——より正確に事実を言うなら、彼女は山田先生や箒ちゃんに普段の自分を見せるのを躊躇ったのだろう。

些細な日常会話から実は姉さんが『おい零夏、お前は枕になれ。一夏はマッサージをしろ。全身くまなくやるように』などと下着姿で言い放つだらしねえ人間なのだとバレるのが嫌だったに違いないのだ！

いやはや、こんな姿をファンが見たら『世界最強のブリュンヒルデ』が『ブリュンヒルデ（笑）』になってしまおうよ……やべえよやべえよ……

……しかしいつも思うんだけど、姉さんは女性なんだからもって年頃の弟に気を遣うべきだよなあ。

「頭の中で余計なことを考えるなこの馬鹿者め（シュバツ）」
「（パシィッ） 姉さん、図星を突かれたからって暴力に訴えるのはよくないって」

「何が図星だこのヘタレめ。第一、家族に対してそんな目を向けて

いるのかお前は？」

「と、一夏に身体を触られて微妙に頬をほんのり染めていたお姉さまが申しております」

「……（シュバババババッ！！）」

「……（パシシシシシッ！！）」

「ふ、2人の間で超高速で出席簿の応酬がーっ！？」

無駄に高度なそんな攻防は、いい感じに山田先生のツツコミでオチがついていたのであった。流石本音ちゃんと並ぶ癒し系女子だ！本当にありがとう先生！

あ、念のため言うておくけど僕は姉さんの攻撃を防御しているだけだからね。反撃とかしてないよ？あくまで暴力的なのは姉さんだけだ、ということをごここに一応記しておくことにする。

『……ぐふう（フラフラ）』

『い、一夏大丈夫か！？流石に今の一撃は…うひゃあっ！？』

『……ぐえー』

『あ、わ、わわわわ……（ななななんだこれは一夏が私に抱きついててててて）』

ちなみに、僕と違って割と疲労困憊だった一夏は残念なことに姉

さんの一撃を受けそのままダウンしてしまい、箒ちゃんの胸に顔から突っ込むというT O L O V Eるを起こしていた。いや、どうしてそうなるんだ後ろに倒れるよというツツコミは恐らくするだけ無駄なのだろう。

……うん、なんというかその——いつものことだけど、一夏はいっぺん爆発しろバーカ!!

「……はっ!?! 姉さん、まさかここまで狙っていたのか……!?!」
「ふっ」

不敵な笑顔がとんでもなく似合う美女が目の前にいた。
流石我が姉である……大した奴だ……。

ちなみに、真っ赤になりながらも口のニヤけを隠せない箒ちゃんの顔は非常に面白かったと言っておこう。これが恋する乙女の顔ってやつなんだろうか。

多分これを見ていた東さんは光の速さで録画に走ったんじゃないだろうか。なんとなくそんな気がした。

『な、なんでバレたの!?!』

貴女もいっぺん、妹に殴られておくべきだと思います。

……さて、喧嘩とも言えない微笑ましいコミュニケーションに一区切りがついたところで、そろそろ真面目な話に戻るとしよう。表情を改めた僕に、姉さんも出席簿を下ろして真顔になる。

「姉さん。明日はまず、一夏とオルコットさんの対戦だっけ？」
「そうだ。お前と先にやらせるとオルコットが気絶する可能性もあり得るからな」

大真面目に返す姉さんに、山田先生は『え？え？』という顔をして僕達の顔を交互に見ていた。急な雰囲気の変わり方に驚いたのか、それとも今の発言が信じられなかったのか、どちらだろうか。

気絶させるなんてそんなことはない———とやりたいところだけれど、実際は十分に有り得るから困ったものだ。ISの防御をブチ抜いてしまうほどに僕の攻撃の威力は大きいからね。

というか、入試の時に倒した先生がまさにいい例だ。17秒で決着したあの試合のように、ヘラクレスの能力は初見の相手に対して非常に有利なのである。

「まあ、白式的能力も大概な初見殺しだし、ひょっとしたらオルコットさんを気絶させちゃうかもよ？」

「いや、零落白夜は私が使っていたからその理屈は通じんな」

「ありゃ、そうか。まあ才能はありそうだし一応可能性は考慮しといたら？ほら、今回も僕のエネルギーけっこう削ったし」

「……えーと、零夏くんのエネルギーが減っていたのは最初素手で戦っていたからでは……？」

「その通りだ真耶。実際のコイツは今の一夏を無傷で倒せる」

姉さんの言葉に思わず苦笑する。……それは事実だけど、もうちょつと一夏をいたわる発言もしてあげたらどうなんだい姉さん？心の中で思ってるだけだと山田先生は誤解しちゃうかもよ。

——そもそも、僕にとっての『シールドエネルギー』というものは全て束さんが用意した『攻撃を喰らったように見せかけている』だけのまやかしに過ぎない。

先程の戦闘は周囲には接戦に見えていたかもしれないが、実際のところ僕は傷ひとつ付いてはいないし、そもそも僕は事実上生身で戦闘を行っているのだからシールドエネルギー無しでも戦闘が可能だ。つまり——ISを相手にしているにも関わらず、僕は手加減しているのである。

けれど。

圧勝したからと言って、僕が一夏を評価していない、ということにはならない。

……本当なら、彼女とは真面目に戦う気なんて僕は無かった。I Sに乗れないから彼女の言葉に付き合う義理も資格もない、というのも本音だが、それ以上に僕は戦闘に関する『誇り』^{プライド}なんてものを持っていなかったのだ。

僕は弱い。だから、強さを誇るなど出来るわけがない。——そう、ずっと思っていた。だけど、

——こんな僕でも、誇れるものが出来てしまった。

いやはや、困ったことに手軽な逃げ道を潰されちゃったわけだ。やっぱり織斑家に生まれたというのは壮大なフラグだったんだなあ、と思う。だけど、僕は今まで一夏の兄であることに、姉さんの弟であることに——後悔したことなんて、一度も無い。

「ふん。少しはマシな顔になったな」

「……え？」

何時の間にか僕の顔を見据えた姉さんが、機嫌良さそうに笑いながらそんなことを言い出した。

おや、僕は今どんな顔だったんだろう？というか隣にいる山田先生が何時の間にか顔を背けていた。え、なんですかそのリアクション？ひょっとして気持ち悪い顔だったのだろうか……すっごい気になる。

「さて、そろそろ会話も切り上げ時だな。零夏、お前は明日の試合とこの後の生徒のためにグラウンドをきっちり整備をしておくように」

「……えっ？いや、その試合僕も出るんだけど……？」

「知らん。土を吹っ飛ばしたのなら責任を取れ」

「なにその鬼畜っぷり！？というか、それなら一夏も手伝わせるべきで……あ、ごめん箒ちゃん。やっぱいい、一夏はそのままでもいいからそんな絶望した顔をこっちに向けないで」

「つて一夏くんっ！？な、何やってるんですかあああ！！」

どうやら先程のことを根に持っているのか、姉さんはサラリと理不尽な要求を僕に下していた。なんてこったいこの休日下着女め！まあ、正直僕が悪いからやるべきなんだけどね……

今更箒ちゃんと一夏の状態に気付いたらしく、『不純異性交遊ですー！』などと叫ぶ先生を横目に、僕はがっくりと肩を落としながらすくすくことアリーナに引き返すことになった。やれやれ、土つてどこにあるんだか。あと、非常にどうでもいいんだけど、百頭でスコップって具現化できるのかなあ……？

そうして歩きながら、ふと、明日のことに想いを馳せる。

——果たして、セシリア・オルコットという少女は一夏とどんな戦いをするのだろうか？

原作のようにエネルギー切れという展開は有り得ないだろう。彼女が慢心を消し去って勝つか、はたまた一夏の刃がその身体に届くのか。

そして、僕と彼女はどんな戦いをするのだろうか。

口元に笑みが浮かぶのを感じながら——誰に言うわけでもなく、僕は独り呟いた。

「——悪いけど、負けてあげないよ。なにせ僕は、『織斑零夏』なんだから——」

——さて、そういうわけで翌日、試合当日。

「どうしてこうなった」

現在、僕は昨日のオルコットさんと同じ理由（相手のISの情報
を不正に入手しないため）で、自室での待機を命じられていた。

そんなわけで暇な僕は寮の部屋でソファ―に沈み込んで改めて昨
日のことを振り返り、やや眉を八の字にしながら——そんな一言
を呟く。

本当に、僕は後先考えずに色々やらかすのをどうにかした方がい
いんじゃないか。何かこの悪癖で将来大変なことをやらかす気がし
てならない……

あ、別に試合のことを後悔しているわけじゃないよ？大観衆の前
で宝具発動とかやってしまったのは色々マズかったと思うけど。：
…いやはや、協会がこの世界にあつたら間違はなく執行者が仕向け
られているだろう暴挙だね。とはいえ、この世界には協会どころか

魔術すら無いから問題ないんだけど。

恐らくは射殺す百頭のこともIS特有の『単一仕様能力』^{ワン・オフ・アビリティ}として処理されるだろう。たとえ疑問に思う人がいたとしても『篠ノ束の作品ですから』の一言で済んでしまうから多分大丈夫のはず。…束さん便利すぎるなあ……

そんなわけで、あの戦いではむしろ僕のこれからの人生に関して得るものがあつた。だからそこに文句を言う気は無いんだけど……こう、なんというか……『シリアスじゃない部分』で僕、昨日は色々なモノを失ってしまったんだよねえ。

「昨日はすごい人気っぷりだったもんねえ」

「遠巻きに見ていたけれど、アレは確かに凄かったわね。ふふっ」

「言わないで！申し訳なさで胸が痛いから！！」

2人の少女達の言葉が、僕の心にグサグサと刺さって痛かった。

……いや本当にごめんね、迷惑かけて。

あの戦闘の後、僕と一夏は一躍『時の人』となった。

ただでさえ男子操縦者として有名だったのに、なんと強さも兼ね備えていた織斑兄弟。一夏のイケメンっぷりや僕の『令装』やら宝具の神秘性も人を惹きつける要因になったらしく、昨日からずっと

僕達のもとには数えるのも面倒になるほどの女子が殺到していた。

実はついさっきも（具体的には一夏VSオルコットさんの試合が始まるまで）この部屋に女子が多数押し寄せてきて、非常に騒がしい空間になっていたのである。しかもその騒音の大半が『キャアアお兄さまわたしのことも妹にしてええええ!!』という叫び声。これには流石の僕もドン引きである。

……というか例え本人じゃなくてもこんな台詞を聞いたらドン引きするわ! どういうことなの! しかも叫ぶ少女の中には上級生までいたし……年下のお兄さまってどうなのさ。

いや、確かに精神年齢は僕が上なんだけれども。なんだか姉さんの気分の一端を味わってしまったよ。

にもかかわらず、この姉妹はテンパる僕を横目に笑顔で少女達に対応し、落ち着かせ、そして整理券を配り解散させるなどという神がかった手際の良さを見せてくれたのだ。……なんという交渉力だ。この学校の生徒会って本当に凄い。

「ああ、気にしないでください。私達は色々慣れていますからね」
「私は邪魔で、お姉ちゃんがすごいんだけどね」

「いや、それにしたって……わざわざクッキーまで焼いて持ってきて頂いたのに、部屋の前が女子で埋まった、なんてさぞかし引いたでしょう? 虚さん」

さて、いい加減に本音ちゃんの隣にいる目の前の先輩についての説明をすることにしよう。

彼女の名前は布^{うっほ}仏^{ふつ}虚^こ——苗字の通り本音ちゃんのお姉さんで、

IS学園の生徒会に所属している三年生である。

ぼわーんとした本音ちゃんとは反対にキリッとした雰囲気を纏う言うならば『メイド長』のような人で、人当たり・処理能力に加えて紅茶まで淹れるのが上手いという極めて有能な先輩だ。

そして更に彼女が持ってきてくれたココアクッキーも非常に美味しい。しかも僕が大食いなのを事前にリサーチしてくれていたらしく袋いっぱい的大量に用意してくれていたという親切っぷりであった。

なんて素晴らしい人なんだッ！なんというか、こういうメイドさんが一家に一人いるとすごい生きているのが楽しくなると思う。

「うーん、しかし何個食べてもうまいなあ……しつとりとしていてそれでいてベタつかない。ココアは……あれ、まさかこの味から察するにお手製ですかこれ？」

「ふふ、ありがとう零夏君」

「意味深！」

さりげない動作でお皿にクッキーを追加しつつ、にこやかに虚さんは微笑んだ。

……あー、こういう微笑みとかを見ると、性格は真逆だけどやっぱり本音ちゃんのお姉さんなんだなーと思う。柔らかい笑顔がそっくりだ。元々顔立ちは似てるしね。

原作だと彼女はこれから弾と流れるようにフラグを建設していくんだけど——この有能さを考えると、僕が介入してでも迅速にフラグ設立をしておいたほうがいいかもしれない……！今度、偶然を装って弾とエンカウトさせればいい雰囲気になるんじゃないか？ひょっとすると弾の実家のメシ屋のメニューにお菓子が追加され

る日が来るかもしれないんだ、やってみる価値はありますぜ！そう
なったら多分週3くらいで通うよ僕！がんばれ弾、主に僕の幸福の
ために！！

……などと、脳内で将来の食生活に想いを馳せている僕であった。

そんな中、思考を現実に戻すと……本音ちゃんが空になったクツ
キーの袋を持ち上げて『んあゝ』と大口を開けていた。どうも中に
残った欠片を食べたいらしい。相変わらず動作がいちいち可愛いな
あ本音ちゃん。でも、女の子がそんなことしていいのかい？

って、あ。虚さんが何時の間にか妹の後ろに回りこんでる。そし
てそのまま静かに拳を振り上げて――

ごちんっ！

「意地汚いわよ、本音。しかも男の人の前でそんなことしないの」

「へううう……れーか君、お姉ちゃんがぶったゝ」

「おっとっと。あーほら、よしよし」

虚さんが本音ちゃんにゲンコツを落としていた。なんというか、
織斑一家も傍から見るとこんな風に見えているのだろうか？結構痛
そうな音だったけど。

そんなことを考えつつ、隣から身を乗り出して小動物のように抱

きつてきた本音ちゃんの頭を撫でてやる。うん、コブにはなっていないね。そのへんの手加減はキツチリ虚さんもわかっているみたいだ。

ああ、それにしても女の子の身体って何故こんなに柔らかいんだろうか。束さんや姉さんのおかげでポーカーフェイスは身についていると自負しているけど内心ちよっとドキドキだ。本音ちゃん可愛いし。いやはや、この可愛さが癒し系でなければ危なかったかもしれないぬ。

「ところで、僕のあだ名は『れーか君』なんだね本音ちゃん」

「はふう……ん〜？ 『おりむー』だと一夏君と被っちゃうでしょ〜？」

「うん、そうだね。『お兄さま』よりそっちの方がずっと良いよ」

「でも、れーか君ってお兄ちゃんみたいだね〜。あ、そういえばお兄ちゃんだったねえ」

「ほれほれ妹よナデナデしてあげよう。わしゃわしゃわしゃー」

「わわわ〜、いい気持ち〜♪」

「（……この2人はどういう関係なのかしら……バカップルにも兄妹にも飼い主とペットにも見えるわ……まだ出会って一週間くらいよね……？）」

ああ、本当に可愛い生き物だなあ、本音ちゃん。この子も一人に欲しいよまったく。

そんな風に彼女の頭を撫でることに集中していて、虚さんがこちらのことを不思議そうな目で見ていたことに、僕はまったく気付かなかったのだった。

『……あれっ？私の出番は？』

そんなわけで、視界の隅に映る人影から全力で目を逸らしつつ――
――次回に続きます。

Life8 誰もが欲し、望むもの（後書き）

こうして、零夏は学校中の人々から『お兄さま』と呼ばれることが決定したのでした。どこのエルダーだよ……

さて、今回は前回の反動から思いっきり日常話でしたね。そんな中、零夏のちよっと成長した姿を描写してみたり。

やっぱりウチの主人公は『兄』という属性が濃いです。まあ精神年齢が高いので当然とも言えるんですが、元々あった素養にヘラクレスの力強さが追加されて更に鉄壁になった、といったところでしょうか。

のほほんさんが懐いている理由もここにあるんでしょね。

書いてて急にデレすぎじゃね？とも思いましたが元々一夏に抱きついてくるような子なのでまだまだ恋愛感情には至っていないのでしよう。

零夏との恋愛イベントはもっと劇的であるべきだ！ということできつとつご理解をお願いします。

いやあ、恋愛を自覚させるイベント早く書きたいなあ。

さて、虚さん関連の話は次回の後書きにまわすとしましょう。

で、ここからは完全に僕のどうでもいい話になるんですが、皆さんはFateの外伝である『プリズマ・イリヤ』はお読みになっているでしょうか。

僕はコンプエースをこの作品のためだけに買っているのですが、ちよっと今月号を見てくださいよ。

お、お嬢様 アアアアアアアアアアアア!!

本当にどうしてこうなった。続きが気になりすぎて死にそうです。

設定集・虎の巻（前書き）

風邪をひいたのでちょこつと設定集をお送りします……
どんだん楯無さんの出番が遠のいていく！何故だ！

次の話はもう半分くらいは書きあがっているのでサクッと書いて早
めに投稿したいと思います。

設定集・虎の巻

世の中には、言葉では形容できない不可思議なものが存在する。道理に沿わぬ、まるで意味がわからないモノ。しばしば『混沌^{カオス}』と呼ばれるソレは、実はいつでも僕達の前に広がっているものなのだ。

そう、今この瞬間にも、わけがわからないモノが僕の目の前に存在している。それはまるで、世界を汚染するような奇妙な感覚だった――

「タイガアアアア！道場オオオオ！番外編――！！！」
「いえ――――い――！！！」

どんだんぱふぱふー。

やる気のないSEと共に、僕の耳には余りにも見覚えがありすぎるブルマを着た白い少女と、竹刀に胴着を着た野獣のようなオーラを纏う女性の声が響いていた。

えっ、何これは（ドン引き）

周囲を見渡してみると、いつの間にか自分がどこかの道場のような場所のいることに気付く。立て掛けてある竹刀に『野獣先生』と書かれた掛け軸、なにやらデフォルメされたアホ毛少女が隅でお茶を啜っているのが印象的な道場だった。

ていうかツツコミどころしか存在しないんだけどマジでここ何処だろう？ などと思っていると、目の前の2人が僕のほうを見据え声をかけてきた。

「ホアー！ 危険な領域へと突入も辞さないタイガー道場へようこそ少年！！ ジル・ド・レエに勝るとも劣らぬSAN値直葬なこの空間に、ついて来れるかア！」

「さっすがタイガ！ Zeroのアニメが現在進行形で放映されてるのにネタバレを辞さない発言だね！！」

「何を今更なことを！ 感想コーナーでEXTRAのネタバレまで全開なこの作品でその言い訳は今更すぎるわ！！ とうかあの人自分で名乗ったし！！」

キミ達は何を言っているんだい？ わけがわからないよ。

なにやらハイテンションな2人に僕、ついていけなくて困惑中で

ある。

というかそっちの小さい方、貴方は僕の中の人のマスターですよ
ね、どう見ても。なんでここに居るんですか？あと此処はどこです
か？

「そんなレイカに便利な言葉を二つ教えてあげる。『平行世界』『
ご都合主義』」

「おうおう！カレイドライナーの説得力パネエな！……ああ、ちな
みに解説しておくところ←はタイガー道場。……本来ならバッド
エンドを救済するクリームヒルト的なお助けコーナーよ」

「今回は設定説明のコーナーとして作者の都合により急遽企画され
たんだよねー」

「その通りッ！だから今のわたしはタイガ・フジムラなどというと
ある高校の美女教師ではないしこっちのちっこいのも○○ちゃん
じゃなくて単なるブルマを履いたコスプレ18歳でしかないのよ！
！」

「ち、違うよ！わたし18じゃないよ！？あくまで普通の小学生だ
もん！！」

「黙れロリブルマ！最近漫画で出番が多いからって調子に乗りおっ
てエエエ！！」

「きゃああ！？竹刀はやめてよタイガ——！！！」

待てエ！ナインライブズ射殺す百頭ッ！！

バシイイイイン！

「な、なんじゃとう！？唐突にバカデッカイ斧剣が現れた！？」
「ひよ、ひよっとして……守ってくれたの？」

……そこまでにしておけよ藤村。いくら他人の空似だとしてもその娘に手を出したら僕が許しません。その娘には色々縁があるし幼女を殴るとは教師失格だろう。

ちなみにもし攻撃したならギャグ補正の限界をブチ破るアイアンクローで攻撃するよ？……よし、いい子だ。理解したなら速やかにその竹刀を下ろしなさい。

「(……こええええ!!あれが主人公のオーラなの!?タイガー道場の主であるこのわたしがブルッて一步も動けないZE!!)」

「(レイカすごい!後で肩車してもらおう!)」

ヒソヒソ声で話し合う謎の師弟を横目で見ながら……僕は深い深い溜息をついて、面倒くさいので細かい思考をブン投げることにした。

もうアレだ、ここは恐らくツツコミを入れてはいけない場所なんだよ。今僕の視界の端でデフォルメされたアホ毛少女と黒髪ツインテが寝転がってダラけている所もたぶんスルーすべきギャグポイントなんだよ。

「その通り!タイガー道場で深いことを考えてはいけないのだ!(戒め)」

「さーて、茶番はこのへんにおいて!まずは主人公、織斑零夏のステータスの公開だよー!!」

……えっ、僕のステータス?

ちょっと待った、聞いてないよそれ！？プライバシーの侵害とか
何も考えてないじゃないか！

く、は、話せシヨツカー！や、やめろー！なにをするきさまらー
！！うわああああ、僕の内面が曝け出されるううううう！？

【織斑 零夏】

読み…おりむら れいか

誕生日…9月27日（一夏と同じ）

身長…174cm／体重…65kg

特技…年下の世話、大食い

好きなもの…平和／苦手なもの…死

天敵…英雄王（ただしこの世界に存在していない）

CV…意見募集中です

専用機…無形状特殊分類IS『ヘラクレス』（ただし偽装）

英雄の力を内包する少年。

しかし、絶大な能力を保有しているにも関わらず『平穏』を求めるといふある種の異常さを軸として行動する。

・略歴

今作の主人公。織斑一夏の双子の兄で、織斑千冬の弟。

自分の異常を隠してのんびりと生きていたが、ある日篠ノ之束に秘密を暴かれ不思議な関係性を構築。

それでもなお平穏を望んで暮らしていたところ、弟がISを動かしたことを発端に束の手でISを動かせると『でっち上げ』られ、IS学園に強制的に送り込まれることになる。

この世界に起こる可能性のある知識の一部を保有しているので、それを用いて自分や周囲の危険を回避したいと本人は思っている。とはいえ、零夏というファクターが存在するためこの知識はあくまで参考程度にしかない。

・人物

その能力に比べて非常に平凡な感性を持つ常識人。男のハラペコキャラという誰得属性持ち。

性格は弟やその周囲の少女達をからかったり、逆に攻撃されて酷い目に遭ったり、巨乳が揺れるのを注視してしまったり、精神的な重圧からヘタレになったりするどこにでもいる少年。

実は『転生者』であり、絶対の概念である『死』に触れたことがトラウマになっている。このため自分や他人の『死』に怯え、死ぬことと殺すことに対して過剰な拒否感を示す。

その体験を二度としたくないという願いから『ヘラクレス』の能力を手に入れたが、自分の弱さとのギャップに苦しむことも多々ある。しかし、これは一夏との模擬戦で多少改善された模様。

前世のことも含めて精神年齢が同世代の少年少女よりも上であり、他人からは『兄』というイメージを持たれることが非常に多い。他人への気配りも非常に上手いためある種のカリスマを元々持っていた模様。

とはいえそれは『信頼』や『憧れ』を獲得するスキルであり、弟のように『恋』の気持ちを抱かせることは少なかったりする。

『レイカ』という女の子のような名前だが外見はしっかりした体つきのお兄さん。今後女装等をする予定は一切ないのであしからず。

・能力

世界でただ一つしか存在しない形のないIS、『ヘラクレス』の保有者。

飛行能力こそ無いものの、パワー、スピードはすべてのISを超越する。さらに本人の技術も超一流で将来は国家代表間違い無しいのではないかと……などと様々な専門機関には分析されている。

しかし実際の彼の力はISによるものではなく、かつてとある世界で行われた『聖杯戦争』に呼び出された英雄としての『ヘラクレス』の能力。

それはこの世界に存在しない『神秘』の結晶であり、故に零夏は生身であるにも関わらず現代科学の集大成であるISに勝利する。その力はまぎれもない『世界最強』であり、全盛期の『ブリュンヒ

ルデ』でも彼に勝つことは不可能。

しかし、あまりにも強力な力であるため時折本人の意思とは無関係に、まるで自分が英雄ヘラクレスそのものであるかのような錯覚錯覚を起こす場合もある。

死亡すら覆す最高クラスの防御宝具『十二の試練』と、状況に応じてそのカタチを変更する『射殺す百頭』ゴッドハンド ナインライブズの二つの宝具を保持している。

元々ヘラクレスというのは一部の天敵を除いてあまりにもチートな存在であり、このままではIS相手なんぞ冗談抜きで勝負にならないため、ISと戦闘を行う際には作者の都合で用意された特殊スーツ、『令装』を装備する。

これにより、事情を知らない人が見るISとしての『ヘラクレス』は、搭乗者を絶対に傷つけさせないが燃費が非常に悪いビーキーな機体、という扱いとなっている。

・保有スキル

零夏は聖杯とは無関係の生身の人間なので、聖杯が与える『クラス別スキル』は存在しない。

なお、ここではヘラクレスの能力としてのスキルのほかに、零夏が持つ精神の在り方としてのスキルも表記する。

戦闘続行…A

生還能力。瀕死の傷でも戦闘を続け、決定的な致命傷を負わない限り生き延びる。

織斑零夏の何よりも望むもの。十二の試練と非常に相性が良い。

心眼（偽）…B

直感・第六感による危険回避。

ただしギャグ補正によりランクダウンする場合がある。

勇猛…B

威圧・混乱・幻惑などの精神干渉を妨げるスキル。

零夏の心には怯えが残っているのでランクダウンしている。が、それでも現代の技術で零夏に精神干渉を行うことは不可能。

追加効果として格闘能力を向上させる。

神性…？

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。

ヘラクレスは主神ゼウスの子であり、死後神々の列に加えられた彼は最高の神霊適性を持っている。

織斑零夏がこの特性を保有しているかどうかは不明。

彼は『神様にこの力を貰った』と言っているが、それが現実に起きたことだったのか、がそもそも曖昧である。零夏は能力をどうやって獲得したのか（『死』に触れていたこともあり）よく覚えていない。

【零夏の持つスキル】

兄属性…B

お兄さんとしての素質を示すスキル。

Bランクほどあればほとんど全ての対面する者に『あ、この人お兄さんみたいだ』という印象を与える。精神年齢による判定なので、この世界のほとんどの主要キャラに対して有効。

ちなみに、A以上だとほぼ強制的に呼称が『兄貴』『ニーサン』などに变化する。

死の恐怖…EX

命を失うことに絶対的な恐怖を感じるスキル。ここまで来ると呪いレベル。スケエエエエイイス！！という叫びとは全く関係ない。

『死』という概念に向き合う場合、ランダムに最大二段階までパラメータが減少する。

逆に、それを打ち破ろうとする場合に通常時を越えた能力を発揮することがある。

・所有宝具

『十二の試練』
ゴッドハンド

ランク…B

種別…対人宝具

レンジ…一

最大捕捉…1人

由来…ヘラクレスの十二の偉業

ヘラクレスが生前の偉業で得た祝福であり呪い。

型月世界の定義で『Bランク以下』の攻撃を無効化することが可能。更に、蘇生魔術を重ね掛けすることで代替生命のストック11を有するので、事実上12回殺さないと死ぬことがない。

さらに既知のダメージに対して耐性を持たせるため、一度殺した攻撃で再び殺されることはなくなる。

何故Bランクなのかわからない、と言われる程のチート宝具（Aランクの攻撃を無効化できないからだろうか？）。

IS世界ではそもそも『Aランク以上の攻撃』というものが極めて少なく、『令装』による偽装エネルギー表示がなければ戦闘にすらならないのが実情。故にヘラクレスとまともな勝負ができるのは千冬が乗る『暮桜』か、今後成長した一夏の『白式』くらい。

零夏がヘラクレスの力を欲したのはこの宝具を求めたからである。故に、この宝具の存在は物語で重要な位置を占めることに。

『射殺す百頭』 ナインライブズ

ランク..

種別..

レンジ..

最大捕捉..

由来..

ヘラクレスの持つ万能攻撃宝具。生前の偉業「ヒュドラ殺し」で使った弓を元に、彼の持つ武技を流派の域にまで昇華させたもの。状況・対象に応じて様々な攻撃方法に変化する上、様々な武器はあらゆる防具である盾でさえも使用可能。

——という説明がWikiではされているが、実際は本編で使われたことが無いのでかなり作者の独自設定が入ってしまった宝具。

この作品でのナインライブズの特性は以下の二つ。

- ・武装という概念ならどんなカタチにもなる不定形宝具である。
- ・それぞれの武器には設定されいる『奥義』のようなものが存在し、それこそがこの宝具の本質である。

具体的には、『斧剣』『弓』などの武器が使用者の望むままに、自由自在に切り替わる。

あれ？これ呂布のゴッドフォースじゃね？どう考えてもこの宝具のランクA++EXじゃね？などという点には目を瞑ってください。お願いします。

この設定における『奥義』の中で公式で明言されているのは対人用の『ハイスピード9連撃』、対幻想種用の『ドラゴン型のホーミングレーザー9発同時発射』の二種類。

他に格ゲーである『Fate/unlimited codes』では100回斬り付ける斬撃もあり、ヒュドラの毒矢なども存在するのではないかと推測される。

・人物との関係性

『織斑 一夏』

双子の弟。

普通に仲の良い兄弟であり、兄も弟も根底では自分に無いモノを持つ相手として憧憬を抱いている。

ちなみに、零夏はなんとか一夏の鈍感っぷりを直そうと色々試したものの挫折したという過去があったりする。その時零夏が出した結論は『もう面倒だから爆発すればいいんじゃないかな』だった。

『織斑 千冬』

姉。ヒロイン候補の一人。

零夏に色々思うところはあれど、自分の家族として接している。本来零夏 of 精神年齢は千冬よりも高いため、彼女は自身も気付かぬまま零夏を頼りにしていることがたまにある。零夏で遊んだりするのは信頼の証拠。

『篠ノ之 束』

近所のお姉さん？ヒロイン候補の一人。

彼の異常性を明確に明らかにしたのは今現在この人だけ。

零夏に対して特別な感情を抱いているのは確かだが、それが恋愛であるかどうかは不明。研究者としての知的好奇心か、あるいは自分を超える存在であることへの憎しみである可能性すらある。

しかし、彼女はそれでも彼に惹かれているのだ——彼女にとってただ一人の、理解できない存在として。

『篠ノ之 箒』

近所の女の子。素直でない妹ポジション。

彼女自身は零夏に対しては複雑な感情を抱いているためそっけない対応になりがち。しかし嫌いというわけでもない微妙な心中である。

零夏にとってははにかい甲斐のある妹のような存在。とはいえ彼女を傷つけるつもりは全く無く、たまに助言をしたりすることもある。まさしくお兄ちゃん。

『布仏 本音』

ルームメイト。ヒロイン候補筆頭。

零夏にとつての癒しその1。ちなみに恋愛的感情はまだお互い持っておらず、周囲では恋愛に発展するかどうかで賭けが行われている……かもしれない。

意外に空気を読める少女であり、身近に一人いると人生が楽になる。

『セシリア・オルコット』

(今の段階では)ライバルA。

通称ちよろいさん。アニメ版と原作では胸のサイズが結構違うため作者がどっちにするか困っているキャラでもある。まあシャルロットのほうが困るのだけでも。

男子に対して自分勝手なイメージを抱いているため、零夏のことを『人の話を聞かないヘタレ』扱いしている。しかし、一瞬だけ見せた真面目な零夏に『もしかして強いのか?』などといった感情も抱く。

今の段階では単なるかませキャラでしかない。恐らく次回以降のキャラ解説で詳しく説明します。

『山田 真耶』

担任の先生。ヒロイン候補……一応。

零夏の癒しその2。しかし本音ちゃんの登場でキャラ被りが……ッ!

『布仏 虚』

ルームメイトのお姉さん。

初対面に近いのでお互いの距離を測っている状態。とはいえ、お互い悪人ではないと理解しているようだ。

「これは酷い」

「もうチートすぎてびっくりだわねー」

説明が終わり、そんな師弟の言葉がむなく道場に響く。

確かに、こうして振り返って確認すると戦闘能力が尋常じゃない。これにどうすれば勝利できるかが思い浮かばないレベルである。ヘラクレスでこれならギルガメッシュとかどうなっているんだ。

……という感想を思い浮かべるのが普通なのだろうか——正直、僕はそれどころじゃなかった。

——なんだよ、『兄属性』ってええええ!! 巨乳に釣られるって
エエエエエ!!

恥ずかしい。恥ずかしすぎて死にそうである。いや、死にたくないけど! 死ねないけど! 穴があったら入りたいというのはこの状況のことを言うのだ……

うずくまり負のオーラを滲ませるそんな僕のことを遠めに見ながら(というか微妙に距離を離しながら)、タイガとロリブルマはカメラの方に向き直って語り出した。

タイガ「さて、主人公がヘタレたところで今度は読者さんからの質問に答えるわねー」

ブルマ「この作品、曖昧な部分が多いからけっこう感想欄でツッコまれたりするんだよね……」

タイガ「実際のミスの場合もあるから疑問があれば指摘してくれると嬉しいわ!」

ブルマ「それじゃあ、バシバシ答えていこー!!」

タイガ「おうともよ! それじゃ、一問目!」

Q、なんで男が2人いるのに部屋が別々になったの?

タイガ「以下の理由からだYO!」

- ・二週間程度で変更できる予定だったから
- ・2人を一緒にするのは篠ノ之束の何かの策略なのかではないかと疑われたから

・○○○

・—————

ブルマ「あれ？後半二つの理由が見えないよししょー！」

タイガ「ソッチは本編に絡むから閲覧制限ねー。今後明かされるから次回以降を待て！」

ブルマ「解説コーナーなのに回答しないの！？」

タイガ「こまけえことはいいんだよ！二つ目！！」

Q I Sと零夏の力関係はどんな感じ？

ブルマ「そうね、実際の殺し合いの場合……ヘラクレスはほぼ無敵なんじゃないかしら？」

タイガ「一対一なら負け無し、限定条件のもとでAランク以上の攻撃を持つ機体でやっと五分つてとこねー。チートは伊達じゃないってことよ」

ブルマ「へー。ちなみに例を出すとどんな感じ？」

タイガ「周囲一面が海で『ヘラクレス』は移動不可、その上で『紅椿』が常にバックアップをしている『白式』とか。あ、ちなみに『紅椿』は零夏くんに攻撃されず、白式は機体の性能を限界まで引き出しているという前提ね」

ブルマ「なんだか微妙にネタバレじゃ……えっ？……それで……『五分』……？」

タイガ「というか、作者にはこれでも白式が負けるビジョンしか見

えないわー。サードシフトくらいまで成長してチート兵器が出てこないとうしろもなしの可能性すらあるのよ」

ブルマ「……なんでアインツベルンは呼ぶ時にバーサーカーにしたんだらうね……」

タイガ「泣くな弟子よ。まあ、『試合』の範疇ならいくらヘラクレ
スでも架空設定されたエネルギーを0にすれば勝ちだから、『暮桜』
くらいの性能があればいい勝負になるわよー」

ブルマ「タイガタイガ、その人世界最強だから。もう無理ゲーのレベルだから……」

タイガ「何故菌糸類が枷をつけたかっていう理由はここに有るのかもねー。じゃ、次ー」

Q 斧剣は元々は神殿の柱を加工したものだから百頭で変形できるのかしくね？

ブルマ
「……………」

タイガ「……せ」

ブルマ「え？」

タイガ「たわけッ!! 見逃せと言ったのだ、キャスターっ!!!!」

ブルマ 「ええええええええええ！？」

タイガ「あー、ゴホン。すみませんでしたこれに関してはこちらのミスです。完全にやらかったです」

ブルマ「というか名言をパクりすぎじゃない？」

タイガ「言い訳をさせてもらうなら『聖杯戦争中に使用したから武器として登録されたはず』だとか、『士郎が斧剣から能力を読み取

れたから問題ない』みたいな理由があるんだけど……」

ブルマ「……説得力に欠けてるわよ」

タイガ「すんませんでしたアアア！二次創作故の設定変更ということでお許しください！！」

ブルマ「……はぁ。本編で使われてない武器なんて使おうとするからそうなるのよ……」

タイガ「うぐう、言葉が胸に刺さる！つ、次の質問……あ、これが最後ね。パパッと回答して、終わりっ！にしちゃいましょうか」

ブルマ「またそういうネタを挟む……」

Q タイトルからして酷い。訴訟も辞さない

タイガ「法廷で会おう！」

ブルマ「そこは否定しようよ！！」

タイガ「いやあ、正直な話このタイトルでランキングに乗るなんて思ってもみなかったわ。どうしてこうなった」

ブルマ「みんな支援ありがとう！感想もポイントも作者のやる気の源だよ！！」

タイガ「とうかね、何故かGoogleで『僕は違います』って検索すると二番目に来るのよコレ」

ブルマ「へ？うっそだー、何言って……いやああ本当に出たあああ
ああ!？」

タイガ「意外なところで影響って出てるもんね……本気で驚いたわ」

ブルマ「というわけで、今回の設定解説はここまで！」

タイガ「次回はいつやるか不明だけど、新しい情報が出てきたらその内やるわよー」

ブルマ「みなさん、また次回にお会いしましょう!!」

まあ、次もタイガー道場になるとは限らないんだけどね。

「!？」
「」

設定集・虎の巻（後書き）

- ・チエル先生
- ・モッピー
- ・ネコカオス劇場
- ・らっきよ謎ルーム
- ・路地裏同盟

ククク……タイガー道場だけが無秩序な語り場と思ったら大間違いだッ！

そんなわけで設定集をお送りしました。コピペも多少含むとはいえこれだけで8000字も書いたという。おかしいな、風邪っぽいきの中の突貫工事として書いたはずだったのに……

しかし、最近は冷えますね、皆さんも体にはお気をつけください。

僕は学習能力がないので前にもこんな後書きを書いたのに二度も同じ内容を書いております。バカだこの作者！

風邪でやる事がなかったという事で適当に携帯をいじくっていたところなにやらFateで新企画をやるそうですね。アポクリファってなんぞ！

個人的に今某所でジャンヌちゃんについては興味が出てきたところなのでこれからの展開に注目していこうと思います。

ああ、ダメだ頭が回らない。本当はもっと書くことがあったんですか病み上がりゆえ今回はこのへんで。

ひよっとしたら後々見返して修正を入れておくかもしれません。それでは

Life9 仮面を付けて、言葉を紡ぐ（前書き）

また風邪ひきました。いや、治っていないと言うべきか。

今日関東寒すぎですから！秋とは何だったのでしょうか、最近鍋が美味しい季節になりつつあります。鶏肉うめえ。

さて、雑談はこれくらいにして告知のほうを。

・今回でヒロインアンケートのほうは締め切らせていただきます。皆様ご協力ありがとうございました。詳細の発表は次回とさせていただきます。

恐らくハーレムは無しになりますが、たまに番外編で他のヒロインのフォローを入れる、という形になるのではないかと。

何故か既に姉さんのプロットは脳内で完成しております。なんだかんだ言って非常に姉さんは動かし易いなあ。逆に会長は全然動きません。難産でした。

動け、動いてくれよ！ぐぬぬ…

あと、もう一つどうでもいい募集をします。

前回のスーパ―はっちゃけ道場モドキが何故か大人気だったので、ここらへんで二回目のアンケートを取りますよー！！

・もし次に設定解説やるなら、どんな方式がいいですか？

1 タイガー道場 （タイガー・ロリブルマ）

- 2 おしえて！チエル先生 （チエル・ネコアルク）
- 3 中田ジョージのカオス・ヴィレッジ （ネコカオス・他）
- 4 人形会社・ガランドウ （トウコ・鮮花？・他）
- 5 路地裏同盟！ホームレスと化した少女達 （さつき・シオン・白猫・他）
- 6 ヒロイン力の変わらないただ一人の存在 （モッピー）
- 7 宝石劇場・ブルマ抜き編 （ルビー・サファイア）

ちなみにどれにも零夏くんは出ます。

多分次の解説は鈴ちゃんが出てきてからだと言うのに今から募集するとか誰得感が否めませんね！

まあ、一応言うだけ言っておくことにしておきます。ちなみに作者的にはモッピーがめっちゃ書きやすいのでオススメだZE！

……逆に、ジョージだらけのヴィレッジは勘弁してください。

選択肢に入れておいてなんですが声を脳内再生すると大変なことになる予感しかしませんので……

Life9 仮面を付けて、言葉を紡ぐ

———そうして、その戦場を垣間見る。

空中で、二機のヒトガタが空を飛んでいた。

片方の機体が手に持つ刃を握り締めながら、敵に向かって突進する。

それを迎撃せんと、もう片方は周囲に射出したビットからビームを放ち、迎撃。

先程から、この繰り返しだった。

『———!!』

本体の隙を見つけて接近を試みても、あらゆる方向からのオールレンジ攻撃はその悉くを妨害する。例えるならそれは、『結界』とも言うべき代物だった。

その能力と精度に舌を巻きつつも、『剣』の機体は止まらない。強引に機体の進行方向を変更し、ビームを避け、弾き、時には被弾しながら——『銃』を持つ機体へと少しづつ迫っていく。

———誇りのために。

かつて共に戦場で戦った者の想い——それを背負っている自分は、負けられない。例えどのような壁が、障害が、敵がその前に立ち塞がろうとも——彼は己に課せられた宿命として、それを切り裂き突破すると決めたのだ。

故に、剣を掲げる。前を見据える。

逃走は無く、闘争へと向かう。ただ、彼が望むのは一つのことだけだった。

目の前の敵を打ち倒し、その手に勝利を掴んでみせるのだ——

ガガガガッ キュイインン

キラキラバシユウウン!!

ヤメローモー!!

「――今の私は、阿修羅すら凌駕する存在よッ!!!!」
「何言ってるんですか会長! やめてくださいよ本当に!!」

ここまで壮大なプロローグを展開していたくせに。

電子音を響かせながらゲームに対してノリノリで叫んでいる目の前の出オチ少女に、そんなツツコミを我慢できなかった僕を責めることのできる人間など、誰も居ないはずである。

「あ、勝てたわ！ いやあ、相方の子も優秀だったわねえ」
「話を聞けエエエエエ！」

——IS学園の生徒会は、普通の学校のように『選挙』で選ばれることがない。

ではどんな方法で委員を選出するのかと言うと……最初に全ての代表である『生徒会長』をとある方法で決定し、その会長が他の委員を自由に指名するのである。

うん、自由。学年も国籍も関係無しに、本人の思うとおりの統治組織を構築可能なんだよこの生徒会。イーノック、そんな政治で大丈夫か？ 個人的にはどこの国の王政だとツッコまざるを得ない。

ちなみに、本音ちゃんが仕事をせず半ば幽霊委員と化しているのも、この自由度の高さゆえだろう。……まあ、ほとんどの仕事

が虚さん一人で行えているという事実が大前提なんだけど。

さて、今述べたようなそんな強権を行使でき、更に様々な名誉や将来に向けてのコネクションなどを手に入れることができる——事実上の『学園の王』とも呼べるほどに力を持つのが『生徒会長』なのである。

そして、誰もが羨むその役職に就くためは、たったひとつの——けれど、極めて困難な条件を満たさなければならない。

そう、それこそが——

——『最強』であることなのだ。

「ふー……面白かったわねこのゲーム」

「いやいや、無断で人のゲーム始めとしてその発言ですか。僕達一応初対面なんですけどそのへんわかってます？」

「あ、そういえばそうだったわね。ゴメン☆」

「うぜえ！初対面なのにこのウザさだよ！！」

「でも許して！あ、本当に今更だけど私が生徒会長の更織楯たてなし無よ、

よろしくね？」

「お嬢様……自己紹介したからって無断利用が許されるわけではないと思いますが……」

「ぶー。いいじゃないこれくらい。二話も放置されたんだし」

「酷すぎる台詞禁止！」

咎める僕の発言に軽口で返しつつ、人をからかう笑みを浮かべながら（何故かその動作ですら上品な印象だ）、彼女——更織楯無はそんな言葉を放っていた。

……貴方の気持ちは判らないことも無いけど、敢えて言わせて頂こう。

「——メタ発言はモウヤメルンダッ！」

「宇宙にただ一人、出番に関して文句を言う権利が！私にはあるのだよー！」

「ガ○ダム好き同士みたいな会話になってるね」

うん、どうしてこんな会話になったんだろうね本音ちゃん。まさか会長とこんな会話を繰り広げることになるとは思ってもみなかった。そもそも何故元ネタを知っている。

というかそれ以前に、このゲームのネタが果たしてどれくらいの人に通じるのかが僕は疑問だよ……仮面さんのほうはわかり易いと思うんだけどね……あ、ちなみに僕の持ち機体は初代です。ジャベリン楽しいよね。

ちなみに、今の対戦は鍛えられた猛者が集うオンライン対人戦であり、初見であるはずの彼女が何故勝利できたのか僕は極めて疑問

である。どんだけセンスがズバ抜けているんだ。

……いや、相方が優秀だったおかげなのだろうか？ ひょっとすると有名ランカーだったとかかな。気になってゲームのリザルト画面を見ると、相方の名前は――

『KNZS』

……ん？ この名前……いや、まさかね。世間は広いし、あの子も今は一夏の試合を見ているはずだろう。うん、そうに違いない。

『へくしっ。……風邪……？……やっぱり試合も見ずにゲームはよくない……かな……でも「白式」は……なるべく見たく、ないし……』

買えよ！あんたロシア代表だろ！ていうかさりげなくPS3ごと
持っていこうとするなア！僕の5000回くらいやった元帥データ
が丸ごと入ってるんだよそれ！！

……この光景を見ていただければわかると思うが、この会長、人
をからかうことが趣味なのである。それも初対面だろうと一瞬で仲
良くなって遊ぼうとするからなるべく僕としては近寄りたくない相
手でもある。だって微妙に僕とキャラが被っている気がしてならな
いんだ……！姉キャラだし！

え？お前はヘタレだからキャラは被ってないって？何言ってるの
さ、この人も妹に対しては結構なヘタレですよ。いるよね、身内に
は特に不器用になってしまいう天災肌の人って。あ、ちなみに誤字で
はないです、念のため。

『ううう……ッ！れ、れーくんのバカー！ヘタレヘタレー！！』

やかましいわ！人が反論できないタイミングで悪口を言うな！！
……うん、この人の時みたいに転生のことがバレそうだから関わ
りたくないっていうのもあるんだよね……

さて、どうして僕はこんなヘンテコな状況に陥ってしまったのだろうか？

——時刻は、数十分前まで遡る。

『『『キャアアお兄さまあああああああ！』『』『』』』

『ええい、なんなんだこの声量はーっ！？キミたちは一体何処の黒子ちゃんなんだ！！』

『そんなんっ！？モブだからって黒子扱いは酷いと思います！！』

『違う！僕が言っているのはテレポーターのほうだ！どこの世界に集団で突撃してくる黒装束の連中がいるってのさ！！』

『／アッサシン！／』

『微妙にネタバレをするの本当にやめろオ！！』

自室の中で、ドアの向こうの女子に叫びながら——零夏は非常に困っていた。

昨日の試合の後から、彼はずっと多数の女子に追い掛け回されて休む間も無い状態が続いている（校内の男子トイレ全てに張り込ま

れていた時には流石の彼も『姉さん！助けて！誰か助けてエエエエ！！』と叫んでしまった程である）。

なんとか昨日は彼女らの包囲網を突破したものの、今朝、つまり起きて食堂に行こうとしている今この時にはなんと部屋の前で待ち伏せされている有様だ。

いくら凄まじいスベックを持っている彼でも、流石に廊下いっぱいに詰めこまれた女子の群れを突破することはできない。いや、正確には出来るのだがその場合は相手にケガをさせてしまいかねないのでその選択肢は除外せざるを得ない。

そんなわけで、零夏はこれからどんな行動をすればいいのか途方に暮れていたのである。

これが彼だけの問題であつたならば他に対処法もあつただろうが――しかし、ここにはルームメイトの布仏本音も居る。このままでは彼女は食堂で朝食を取ることも出来ないだろう。

『……うーむ。これはちよつとマズいかもなあ』

『すぴー』

『つてこの騒音の中寝てるし。たくましいね本音ちゃん……』

ちなみに、今日の彼らの模擬戦は『実戦を見学し戦力分析のレポートを書いて提出せよ』という立派な授業なので、当然の如く遅刻したらブリュンヒルデ式の制裁が待っている。自室待機を命じられている零夏はともかく、本音に関してはそういう意味でも今の状況はかなり危険なだった。

（……しかし、そのことを恐れていないあたり、今待ち伏せしてるのは上級生か他のクラスの娘なのかな？）

ひょっとして他クラスの授業まで中止になったんだろうか、昨日は教師もチラホラいたし有り得ない話じゃないよなあ……などと零夏は状況の悪さに溜息をつく。

『最初の模擬戦は午前中から始まっちゃうし、さてどう切り抜けよう……』

本音を抱えて外に飛び出すか？などと割と本気で考えながら彼は窓の外の様子を確認しようとして――

『ねえねえ。お困りなら助けてあげようか？』

――生徒会長に出会ったのである。

い、今ありのまま起こったことを話すぜ！親方！窓から生徒会長が出てきた！

なんというか、ベランダヒロインよろしく、唐突に自分の理解を超えた自体が発生すると思惑というのは硬直するものなのだなあ、と僕は今更ながら理解した。殺気でもあれば反応できたんだろうが流石のチートボディでもこの展開は予想外である。

さて、そんなわけで僕はその後前回説明したように、

『虚ちゃん。外の女子をどかしてあげて？私は中で待ってるからー』
『……承知しました』

『つてもう一人いたのか！？というか見知らぬ人、勝手に僕のゲーム機をいじらないでくれませんかねえ！』

『うーむにやむにや……あ、お姉ちゃんだ。なんでここにいろの？』

『本音、あんまりみつともない姿を見せないの。……すみません織斑君、少々ご迷惑をおかけします』

『え、いや……多分迷惑をかけるのは貴方ではないんじゃないでしょうか』

『あ、零夏くん。このガ○ダムのゲームやらせてー？ガン○ム』

『……（うん、多分アレはスルーすべき相手なんだな）えーと、お姉さん？今から外に出るんなら、僕も一緒に行きますよ。当事者ですしね』

『そうですか？では、お願いしますね』

『……あれっ？（想定していたリアクションと違う！？このままでは二話分くらい放置されてしまう予感しかないわ！？）』

『なんだかメタなこと考えてる顔してるよ』

という遣り取りを経て外にいた女子たちを（布仏姉妹の手により）解散させることに成功したのだった。で、そのまま会長のことをスルーして優雅にお茶会を開始し、時間切れまで粘って面倒ごとを避けようとしたのである。

まあ、それもさっきのツツコミ所満載のボケで潰されてしまったわけだけでも。まったく、原作通り本質がまるで掴めない人だ、そういう意味でも厄介だなあ……

そんな溜息をつきつつ、とりあえず僕はソファアに座り直して本音ちゃんをナデナデして気分を落ち着けることにした。

彼女は特に嫌がることもなく気持ち良さそうに目を閉じて身を任せている。おお、余りの癒しパワーに僕の心がすごい勢いで回復していきますよ！（二度ネタ）

それを見た会長もTVの電源を消して、微笑みながら僕の向かいの席に座り、虚さんの頭にそつと手を乗せ、優しく撫でまわし始めた。……むう。アレか、これは『動物系少女愛護検定・推定一級』の僕に対する挑戦なのか更織楯無ッ！！

そんな微妙に変になりつつある空気には一切動じず、『え、なんで対抗してるんですか』という虚さんの冷たい視線すらもモノともせずに、会長は僕に上品な笑顔を向けたまま言葉を投げかけてきた。

「ふふ、我慢比べは私の勝ちだったわね？」

「……ええ、そのようですネー。おお、くやしくやしい……」

「れーか君、今凄くどうでもよさそうな表情してるね」

「（むう、ここで怒ったりしてくるなら舌戦に持ち込めたんだけど……そう上手くはいかないわね）」

「（私物に手を出されてもきっちり感情を制御している……本音が懐く理由の一端かしら）」

発言内容は一夏あたりならイラッと来て言い返してしまいそうな内容だが、僕にとってはどうでもいい話なのでそんな挑発には引かなかったりはしない。フッフ、僕をあの単純鈍感バカと一緒にしてもらっては困りますよ！

勘違いされそうなので今のうちに言っておくと、僕は別に会長のことが嫌いなわけではない。ただ、この人相手に『本心』を見せたら付け込まれる予感しかないのでこういう態度になっているだけなのである。

べ、別に負けたのが悔しいと思って意地悪してるわけなんかじゃないんだからねっ！……うん、本当に全然悔しくない。むしろ虚脱感を感じるばかりだよ。そもそも何の勝負だったんだコレは。

「はあ……で、もうツツコミ入れちゃったから仕方なく会話はじめますけど……一体僕のところは何しに来たんですか？会長」

「よくぞ聞いてくれました！昨日の試合がすごかったからサインを貰いに来たのよ！（大嘘）」

「ほう。つまり、サインをあげたらおとなしく帰ってくれるんですね？」

「ええ、考えておくわ（帰るとは言っていない）」

「お2人とも、話が全く進んでいませんよ」

思わず虚さんのツツコミが入るほどにボケボケとした会話が展開される。

とはいえ、実際の僕達はお互い笑顔を向けてはいるものの目は全

く笑っていないというのが実情だ。会長が何故こんな『気』のようなものを張り詰めさせているかは不明だが、少なくとも僕は――

――さりげなく自分の部屋を探ろうとしている相手に、気を抜く気など無いのである。

世間では目立たない事実だけど――IS学園は戦闘技術のことだけで

なく、スパイに対する対策や機体の整備の基本的な事柄なども学んでいる。具体的には爆弾の解体とかを実習でやるようなトンデモ学園なんだよね、ここ。

そして、その頂点に立つ人物が『戦闘』だけでなく、『諜報』という観点から見ても優秀な人間だというのは別に不自然な話ではない。彼女は普段あらゆる機関の侵入に対処しているだろうし、経験も知識も十分なのは間違いはずだ。

更に、『ミステリアス・レイディ』という名の彼女の専用機はナノマシンを搭載した特殊な機体であると聞く。どの程度の性能なのか詳しく知っているわけではないが、ひょっとすると空気中に散布すれば何かしらの盗聴器やカメラのような諜報に特化した機能さえ

も持っているかもしれない。

そして、僕は篠ノ之束直々に専用機を渡された（ことになっている）世界で二番目の男子搭乗者だ。情報を探る理由も十分に存在するし、彼女の動きを警戒するに越したことは無いはずである。

今現在、彼女がISまで使用してこの部屋を探るために使用しているかは不明だが……さすがチートと言うべきなのか、身体の動作や視線の動きを見て、彼女がこっそり隙を見て『僕の部屋の各所に意識を向けようとしている』という事実を僕は理解していた。

具体的には『ベッドの下』や『本棚の裏』、『カバンの中』などに。

……………。

（エロ本の隠し場所かアアアアアアア！！！！！）

なんで意識を向けているのがそんな微妙なところばかりなんだよ！そんな判りやすい場所に隠すわけ無いだろ！もっと天井とか壁とか空間そのものを調査するべきだろオッ！！

てっきり危険物とか、束さんの謎アイテムがあるかどうかを確認しに来たのかと思って警戒してたのにシリアスな臭いが全然しない

じゃねエかアアアア！

そんな風に銀さんの如く内心キレつつも、僕はなんとか顔に笑顔を貼り付けて無言の牽制を続けていた。

い、いや、別に本当に室内にエロ本や何かがあるわけでは無いよ？ 無いのだけれど、ここで彼女の暴挙を許すと後々原作の一夏みたいになってしまう可能性が高いからね？ そ、それだけは阻止しなければならんだ……！

べ、別に誤解を生みそうな泣きエロゲが室内の各所に隠してあるなんてことは無い！ 無いからね！！

「……はあ。本当に貴方って隙が無いわねえ」

「それはこっちのセリフですから」

僕の内心を知ってか知らずか、会長は眉をちよつと顰めながらそんな言葉を放ってくる。その言葉、そっくりそのままお返ししますよ更織先輩。僕の心は今冷や汗かきっ放しなんですよ。体はチートのおかげで一切動じてないように見えますけど。

「いやね、入学の時に貴方の素性に関して問題が無いのは判ってるんだけど、あんな試合を見せられたら黙って放置するわけにもいかないでしょう？」

「なら普通にドアから入ればいいでしょうに。ちゃんと来てくれれば一夏のことも紹介しますよ？」

「それだと今より更に心構えをされてしまいそうじゃない。まあ、人払いのタイミングとしても丁度良かったからね……正直、今からするお話は誰にも聞かれないのよ」

そう言ってから、先程まで纏っていた笑みを消して——彼女は真顔になった。

それと同時に、先程までのグダっていた空気も静かに引き締められていく。

……ここからが本題ということなのだろうか？部屋云々で僕の弱点から隙やらを引き出してこの話に持っていくのが会長のプランだったのかもしれない。それが彼女なりの交渉術なのだろうか……ここからは、僕も真面目な言葉で応対するべきか。

そうして、僕が話を聞く体勢になったのを確認してから、彼女は——恐らくは本人としても複雑な想いを込めて——その言葉を、口にした。

「——ねえ零夏くん。貴方、生徒会長になるべきよ」

本音ちゃんと虚さんが驚愕したのを、なんとなく気配で察する。

そして、僕は――――

Life 9 仮面を付けて、言葉を紡ぐ（後書き）

キリがいい所で次回に続きます。

やっと次はセシリア戦ですよ！また長くなる予感しかしませんよ！もし投稿が遅れたら一万字を超えてるんだなあ、とお考えください。文章が長くなると推敲の手間ががが：

さて、今回は楯無さんの回でした。そしてEXVS回でした。趣味の産物すぎるわ！ちなみに僕は清々しいレベルの廃人です。ヘアアアア！

ちなみに冒頭のアレは実はただのギャグのための描写というわけでもないです。まあ、弟のこともちよつとは補完しておかないといけませんよね？つまりそういうことです。

そしてチラッと登場したKNZSさん。一体何者なんだ：というボケは置いておくとして、作中でのこの子はややオタク的な趣味を持っています。アニメ鑑賞が趣味なんだから多分間違ってませんよね。

恐らくこの時系列での彼女は『白式が私の機体の開発止めた：妬ましい：試合なんかしても絶対見ないもん』とか考えつつ、ストレス解消にゲームやってたんだと思います。

：なんか、性格が内気とかいうレベルじゃないんですが大丈夫なんでしょうか（ちなみに、観ることを義務付けられているのは一組の生徒のみです）

んで、後々クラスの評判を聞いて資料室にこっそり向かって、ようやく零夏の雄姿を確認。

『こ、これはまるで私が憧れるヒーロー…！？』と驚愕する展開に

なる予定です。しかし、このままだと一夏に惚れそうもないのが困りものですね。

しばらくマジで出番がないKNZSちゃん、一体どこで登場させるべきなのやら。

あ、ちなみに一応言っておくと『ミステリアス・レイディ』が諜報に使えるとかはあくまで作者の勝手な妄想でしかないのでご注意ください。

そんなことをしなくてもIS展開すればサーチとか楽勝なんですけど、彼女の場合はナノマシンを部分展開して色々便利に使えるんじゃない？などと思った結果をちみっと書いてただけです。

しかし、ナノマシンで水を操るか…ス○リガンやAR○Sみたいでワクワクしますよね！

Life10 たった一つを、求める心(前書き)

俺「ああああああああああ!! (迫真)」

俺「どうしたんだ琥珀くん! 病院へ戻ろう!!」

遅れて本っ当に申し訳ありません…! 一万字は書いた、許してください! なんでもしますんで!!

【アンケートのお知らせ】

・もし次に設定解説やるなら、どんな方式がいいですか?

- 1 タイガー道場 (タイガー・ロリブルマ)
- 2 おしえて! チエル先生 (チエル・ネコアルク)
- 3 中田ジョージのカオス・ヴィレッジ (ネコカオス・他)
- 4 人形会社・ガランドウ (トウコ・鮮花?・他)
- 5 路地裏同盟! ホームレスと化した少女達 (さつき・シオン・白猫・他)
- 6 ヒロイン力の変わらないただ一人の存在 (モツピー)
- 7 宝石劇場・ブルマ抜き編 (ルビー・サファイア)

まさかのジョージ最多で僕今めっちゃ困ってます。うん、どうしよう。感想コーナーには鬼畜しかおらへんでえ…!!

Life10 たった一つを、求める心

——『愛情』の反対は『無関心』である。

とある人が昔、そんなことを言ったそうだ。

愛というのはつまり他人に感情を向けていることであり、どのような悪意も憎悪も、その対象に想いを向けているという点では好意の反対にはならず、この二つは同じ点があるというのである。

なるほど確かに、本当に脅威たり得るものに対して最も有効な策は『関係性を持たないこと』であることは明白だ。君子危うきに近寄らず、という言葉はまさしく的を射ているんだね。

さて、この言葉から考えると——悪意の一種である『嫌悪感』や『侮蔑』という感情も、場合によっては『好意』になり得る、という理屈が通じることになる。

もちろん、その逆も当然有り得ることも忘れてはいけなが。いわゆるヤンデレというものは『好意』が行き過ぎて他者を傷つける悪い例だし、善かれと思って行ったことが悪い結果を生むということとは良くあることだ。

まあ、日々の暮らしを平和に生きていけば『悪意』にまで転じる場面を拝むことなどあまり無いと思うけど。

むしろ僕は今までのセカンドライフでその逆——つまり、悪意が好意に転じる場面を数多く見てきた。

そして。

目の前に広がっている光景も、その一つである。

『……ああ、一夏さん……うふふ、ふふ、おおーっほっほほほ！
』
「これは酷い」

まあ、ここまで酷いのは……流石の僕も初めてだったけどね……！！

第3アリーナ・Bピット。

試合に出る選手の控え室として使われるその設備には、実に様々な機能が付加されている。

例えば、選手が（この場合ではセシリアであった）準備を整えたり、出撃の待機をするための控え室。

例えば、空中にISを射出するためのカタパルトデッキ。

そして、試合を観戦・監督するための機材などが用意された、教員・研究者向けの管制室だ。現在そこには三人の人影があった。

ついさっきまで、零夏と共に待機時間の暇を潰していた、楯無・虚・本音達である。

『姉さーん！これもうパパッと不意打ちして終わりでいいんじゃないかなー！』

『バカなことを言うな。授業の一環なのだからさっさと正気に戻して来い』

『えー？僕アレに話しかけなきゃいけないの？姉さん何とかしてよ出席簿とかでさー』

『断る。断固として断る』

『面倒だからって二度言わなくてもいいじゃないか畜生！！』

『？なあ千冬姉、なんでセシリアはあんな調子悪そうなんうごがばばばげべば！？』

『黙っている元凶』

『……（私も足ぐらい踏んでおくべきか……）』

何故彼女達がここにいるのか。

それは、観客席のほうが昨日よりも更にギュウギュウとなり、座る座席など無くなっていったのが原因である。前は立ち見ギリギリ数人いるかいけないかというレベルであったが、今回は会場に入りきれない生徒のために整理券を必要とする程だ。

このような形になったのは、一夏と零夏の人気が入学時よりも大きな広がりを見せていたということと、昨日の時点では興味を持っていなかった強さを求める思考の少女達にも興味を持たせた、という理由からである。それほどまでに、零夏の強さは圧倒的だったのだ。

もちろん、楯無には『生徒会長』という大きな権限があるのでムリヤリ席を用意することもできたが、割り込みのような行為は楯無としても望むところではない。

さらに、本人いわく『せっかくなので落ち着いた場所で観戦しようか』という単純な理由もあり、彼女たちはセシリアが出て行って誰もいなくなったタイミングを見計らって、こっそりこのBピットに侵入して、

——入って早々、奇妙に悶えるセシリアを目撃してしまったのだった。

マイペースに懷からお菓子を取り出した本音を除いた2人は思わず顔を見合わせ、お互いの顔がなんとも微妙な表情をしているのをしっかりと確認する。……どうやら、今のは自分の目がおかしくなったわけではないようだった。

そして彼女達は静かに頷き合い、まず機材を色々いじくって完璧な視聴環境を整え、次にマイクに汚れがないか（使わないのに）チェックし、果てには椅子の固さを無駄に調べて、できる限りの現実逃避をしてから——

「なにあれ」

「変人ではないでしょうか」

——嫌々ツツコミを入れた。

彼女としては珍しく、会長としてではなく年相応の少女の表情を浮かべながら楯無は困惑する。

これでも幼い頃から色々あって人生経験は豊富な方である楯無だったが……流石にあんなデレデレな顔をしてうわ言を呟くIS搭乗者を見るのは彼女としても始めてだ。気分は『やだ、こんな時どんな顔をしたらいいいのか判らない……』という一種のアヤナミ状態である。

おまけに、主の思考に忠実に反応したのか、ISまでも精密動作でクネクネしているのが更に不気味さを増している。ぶっちゃけた話、零夏や楯無だけでなく観客のほぼ全員がドン引きしている始末だった。恋する乙女は盲目とは言え、どうしてこうなった。

なんとも言えない空気の中、助けを求める気分で2人は後ろに座る本音に質問を投げかけていく。

「ね、ねえ本音ちゃん、彼女とは同じクラスなんでしょ？ えっと……アレはどういうことなのか判る？」

「ん、多分おりむーのせいなんだろうけど」

「一夏君の……？ い、一体なにをしたらあんな状況になるの……」
「細かいことはわからないけど、ちょっと前にれーか君が『一夏、露骨なフラグ立てだなあ』って言ってたから恋愛がらみなんじゃないかな」

「でも、恋だけであんな風になるものなの？ うーん……才能？」

「なんて嫌な才能なんでしょうね……」

本音の返答を聞いて、虚と楯無は思わず嘆息した。

零夏に一夏、それにセシリアという、『専用機』を所有する三人。一年一組に所属するそれぞれの人物が変な人格の持ち主というのは

どういうことだろうか、と自分のことを棚に上げて楯無は思う。

しかも、あのクラスには確か篠ノ之束の妹もいたはずだ。ひょっとして、今のうちに対策を考えておかないと振り回されたりするのであるのか？……これは今のうちにクラスの子の調査をしておくべきね、とこっそりと彼女は心に決めたのであった。

（……ああ、そうだ。『人格』と言えば――）

ふと、彼女は先程の会話を思い出す。

待機室となっていた部屋で、楯無は零夏にこんな台詞を言っていた。

『貴方は、生徒会長になるべきだ』と。

そう自分が言った時に、彼が返した言葉は、次のようなものだ。

『――無理ですね。僕は貴方と違って、他人の命なんか背負えま

せんよ』

だからお断りします、と彼は言った。

苦笑しながら言うその表情は、言い表しようのない無力感のようなもので満ちていて、決してふざけて回答したわけではないようだが——楯無にとって、それは理解のできない返答であることも確かだった。

彼女がこんな言葉を言ったのは、決して伊達や酔狂のためなどではない。

この学園の生徒会長というものは確かに大きな力を持つが、それは『生徒を守るため』に用意されるものなのだ。実際、権力には大きな責任が伴うものであり、織斑零夏はその責任を背負えるだけの強さを持っていると楯無は思っている。

——彼女が零夏の戦う姿を見たのは、昨日が始めてではない。

一週間か、もう少し前だったのだろうか。

楯無はふと、世界で二番目の男子が入試を行う日に、たまたま会長としての手続きのためその場所に来ていた。

当時の彼女にとっては、その行動はただ『なんとなく』行っただけだった。無形状のISというものが気になり、その持ち主の入試

をなんの気はなしに見学に行ってみようと思ったのである。

そして、彼女の見ている前で、入学試験は始まった。

試合の開始を告げるブザーが鳴る。

それを聞いて、対戦相手の『打鉄』が銃を持ち上げた瞬間、

『ヘラクレス』が、相手を地面に叩き付けていた。

『……は？』

思わず呆然としてしまった彼女を、誰が責められるだろう。

そのまま動きを止めることなく、零夏は敵に拳を振り下ろす。ガ
ンガンガン！という三回の攻撃で相手の『打鉄』の『絶対防御』が
発動し、エネルギーが0になる。試合はそれだけで終了した。

その試験を記録していた映像データの長さは、わずか17秒。実
際は開始前や開始後の余分な空白が含まれているので、戦闘そのも
の時間は更に短かったはずである。

それは決して、『戦闘』などと呼べるものではなかった。

恐らく彼は『瞬間加速』イグニッション・ブーストか、それに類する技術を用いて接近し、そのまま相手を地面に叩きつけたのであろう。しかし、その場で向かい合っていた対戦者の教師はその準備動作にすら気付けなかった。――ロシア代表である楯無の目にでさえ、ISを起動させて動画を再確認しなければわからなかった程だ。

……楯無は、自他共に認めるこの学園の『最強』である。だからこそ、彼女は正確にその能力チカラの差を理解してしまった。

目の前の存在は自分よりも遥か上にいて、きっと何をしても自分は勝てないのだ、と。

(……酷い冗談よね、まったく)

けれど、そんな化け物じみた能力を持つ零夏は、『命を背負えない』のだと言う。

正直な話、何を言っているんだ、と言いたくなった。それだけの強さがあるなら、誰かを守ることなど容易いはずだ。強者には強者としての責任があるのよ、と彼女は最早説教と化した言葉を彼に言う。

それに対し、彼は苦笑の色を濃くしながらこう応えた。

『僕は強くありませんよ。ただチカラがあるだけで誤解されちゃ困りますって』

『貴方の戦いを見て、そう思わない人なんて居ないと思うんだけど？』

『あの17秒の試合ですか？アレは要するにただの「逃げ」ですよ』
『……？』

詳しく聞いてみれば、あの戦い方は『自分がどうすれば傷つかないか』を考えた結果でしかないのだという。

曰く、相手は零夏を飛ばない機体として認識し、なおかつ武器を持っていないことから『油断』とはいかないまでも、大なり小なりの気の緩みを持っていたのだ。故に、彼はそこを突いた。そして結果的に、彼は確かに無傷で戦闘を終えたのだ。

けれど、そのどこが弱さなのだろうか。

彼は自分の力をしっかりと制御できている。それに、臆病なことでは悪いことではなく、何かを守るための戦いではむしろ役に立つこともあるはずだ。零夏の言い分はどこか矛盾している、謙遜など本来は必要ないのではないか。

そう楯無は言ったのだが……それでも、零夏の寂しそうな笑顔が消えることはなかった。

『——僕にとって、生命っていうのは重すぎますから。けれど——』

その続けられた言葉に一応は納得して、楯無はこの会話を打ち切った。

けれど、彼のことをまだ楯無は理解できていない。一体どうして、

そんな意味が込めるに至ったかを、彼女は確かめなければならない、
と思ったのだ。

本当は心のどこかで、自分より強くあってほしいという幻想を抱
きながら。

——楯無は、これから試合を始めるモニターに視線を向けた。

さて、そんなことを生徒会役員達が考えていたとはいざ知らず。
僕はとりあえず、オルコットさんを正氣に戻す作業を行っていた。

「おいオルコットさーん」

『いちか、さん……うつ、ぷふふふうふふ』

やばい、彼女のキャラがどんどん酷い方向に向かっている気がする。
このままでは後続のヒロインに思いつきり人気を取られてしま
いそうなほどだ！ええい、仕方ない。ここは多少のリスクは覚悟し
てとっておきの必殺技を使わせてもらうことにしよう。

「……ここだけの話、一夏は今の君みたいなのじゃなくて落ち着い
てる女性が好みだよ？」

『ふふふうばあああっ！？そ、それは本当ですよっ！？』

「……間違っではないかいヨー（姉さんの考えて）」

なんだか女性として色々ダメな声を発してしまっていたのが……ま
あ一応、オルコットさんが元通りになったようで何よりである。
……こういう対処の仕方を完璧に身につけてしまっている自分が
ちょっと悲しいなあ……鈴ちゃんの時といい、このタイプの発言に
対して恋する乙女という生き物は反応が早すぎだと思う。

『い、一夏！？お前はおとなしい黒髪美女が好みだったのか！？』

『え、な、なんだ急に！？』

なんだかAピットでそんなセリフが聞こえてきたけど、僕には関係なさそうな話なのでスルーすることにしよう。うん、しーらね。

そうこうしている間に、ようやく正気に戻ったオルコットさんは周囲の観客の『あのさあ……』というなんとも言えない視線に気付いて顔を赤くしていた。よかった、自分がおかしいことをしていたと自覚していてくれたんだね……

とはいえ、そろそろ意識を真面目な話に切り替えるべきだ。

コホン、と僕はひとつ咳払いをして、宙に浮いた彼女を見上げた。

「さて、いい加減始めてもいいかな？消化試合とは言え一応これ、授業らしいしからね」

『むっ……『消化』ですか。貴方はひょっとして、わたくしがどう『変わる』か、最初から全部わかっていたんですの？』

「さて、どうかな」

気持ちを綺麗に切り替えたのだろう——オルコットさんの表情が、先程までの色ボケたものではなく、真面目なものに……戦闘者としてのソレに変化する。

それを見て、僕も弛緩していた気を引き締め、同時に、武器を取り出してあらかじめ準備を整えておくことにする。

「——『射殺す百頭』」

ナインライブズ

『っ!?!?』

ゴオッ! という音と共に魔力が放出され、そのまま『世界が歪む』光景を一瞬だけ挟んで——ゆらり、と巨大な斧剣が姿を現した。その異常な光景を見て、オルコットさんが驚愕に目を見開く。…：：：そういえば、彼女は宝具（IS能力扱いだけど）を見るのは始めてだったか。

『ワン・オフ・アビリティ単一仕様能力…：！?!?まさか、貴方もっ』

「一夏が出来てるんだから、別に僕ができておかしくないけどね」

も、ということやはり一夏も零落白夜を使って、彼女に何かしらの印象を与えたのだろう。…：：結局、姉さんは試合の結果を僕には教えてくれなかったんだよなあ。まあ、この戦闘が終わったらゆっくり聞けばいいか。

ギシリ、という音を立てながら——斧剣を持ち上げ、上段に構える。

不思議と、気分は軽かった。

昨日の決意が響いているのかどうかは判らないが…：：少なくとも、僕は自分で決めた願いを達成したいと思っているらしい。会長に言った言葉を嘘にしないためにも頑張らないといけないかな。

そんな思考をしつつ、彼女との距離を測りながら戦略を組み立てていると——不意に、オルコットさんが僕に言葉をかけてきた。

『…：：織斑零夏。どうして貴方は、わたくしの最初の問いに答えなかったんですの?』

最初、というの……『ISをどう思っているか』、もしくは『お前はどんな強さを持っているんだ』という話だったっけか。

IS云々のことは正直、『僕は本当はIS乗りじゃないんです』としか言えないからどう反応すればいいのか迷う。ここは後者について返答すべきだろうか。……いや、それよりも。

「どうして、今になってそんなことを言うんだい？」

『一夏さんは、貴方のことを『強い』と言っていましたから』

僕の質問に、彼女は複雑な表情を浮かべながらそう応える。

『……今まで、わたくしは男性というものに勝手な思い込みをしていました』

「ということは、今は違うの？」

『ええ。世の中は男女で分かれているわけではない、それぞれの人がある。決して男子は足拭きマットだけではないのだ……それが、一夏さんが教えてくださったことです』

「一体僕の弟とどんな会話を繰り返してたの？」

『だからこそ、一夏さんが「強い」と貴方を評したのが不可解でした。そして実際に、貴方は確かな強さを持っている』

スルーですか。

まあ、真面目な空気だからツツコミはやめておこう……

ともかく、彼女が言いたいのはい——『どうして自分を弱く見せるような発言をしたのか』という疑問の説明をしてほしい、ということだろう。確かに、本来僕は別に彼女の言葉に真面目な回答をすることも出来なかったわけじゃない。

それをしなかったのは、『面倒だから』というのと『一夏の出番を奪うこともないだろう』という考えからだだったが……それはあくまで建前でしかなくて、本当の理由はそうではなかった。

……うん、今なら僕も言える。今まで彼女にはマトモに向き合っていなかったし、もういい加減に自分の本音を晒しても構わないだろう。

「僕はね、自分を強いつて思えたことがないんだ」

『……え?』

「あはは、よく『何を言ってるんだ』って他人には言われるんだよねこの言葉。——でも、これは僕の嘘偽りない本音なんだ」

——『例えば』の話になるが。

よく『究極の選択』などと呼ばれる仮定がある。

目の前には崖があつて、そこに自分の大切な人が2人落ちそうになっている。自分が助けられるのは一人だけで、もう片方は必ず死んでしまう。さて、このような状況で貴方はどちらを助けるだろうか?

これは、『この世^{アンリ・マユ}全ての悪』がとある魔術師に問うたことと同じものである。

どちらかを見捨てるのか、それともルールを超越して両方助けるのか、あるいは自分の身を捨てて二人を救おうとするのか。

……屁理屈も含めれば、回答はいくらでも存在するだろう。もちろん現実こんな条件が起こっても、両方を救うことを諦めるのは間違いだ。この問題の本質は、どちらを選んでも大切な何かを無くしてしまう状況で、『どう最善を尽くすか』を探すことにあるので

ある。

「——けれど、その状況では、僕はきつと何もできない」

それは、数多くある選択肢の中で、最も愚かな選択だと思う。

だけど、この事実を認めなければいけない。どんなに強い力を得ても、それでも『死』という概念を目の前にしてしまったら、僕はきつと一歩も動けない。目の前の2人どころか、自分の身すら失い絶望に沈んでいくだろう。

『な、何故ですの！？そんな選択、愚かだとわかっているのに！！』

「……これは意思がどうか、身体がどうか、そういう問題じゃないんだよ」

そう——いわば、『魂』の問題だ。

それが、『死』を経験したということ。何にも代え難い『生命』という神秘を、何一つ残さず消去される。生きるコトと隣り合わせで、それでも決して交わらない、世界で一番残酷な必然を識^しってし

まった故の――

僕の全てを蝕み続ける、どうしようもないくらいに致命的な――
――『弱さ』だった。

目の前のオルコットさんが口を動かそうとして、それが出来ないのを見る。

いつの間にか周囲は静けさに満ちていて、どうやら僕の表情や雰囲気はよっぽど今の話に説得力を付加していたらしい。……唐突に変な話を始めているように見えるはずなのに、聞き入ってもらえているのも不思議な話だ。

まあ、それは無理のない話でもあるのだろう。この世界で生きている生物のなかで、唯一僕だけが本物の『死』を知っている。それを恐れる気持ちは間違いなく、織斑零夏にしか理解できず、織斑零夏にしか表現できない。

何度目かの台詞だけど――やっぱり、僕はどうしようもなく弱かった。

一夏や姉さんが認めてくれてもこの真実だけは譲れない。だから、

こんな僕が強さのことなんて語れるはずはなかった。だからこそ、僕は彼女の言葉に返事をするのを放棄したのだ。

それは、とても恥ずべきことで。
それは、とても当たり前のことだった。

「——だから、僕は強くなりたいんだ」

『――え？』

止まった世界で、誰もが思わず思考を停止させた。

……あれ、そんなに意外なことだったかな？今のが僕の『目標』
なんだけど。弱よいから強つよくなりたいたっていうのはそこまで不思議な
ことでもないだろうに。

辺りを見渡してみても皆目が点のまんまだった。というか、なん
で僕に切っ掛けを作らせた本人まで同じリアクションをしてるんだ
か、と思わず僕は苦笑を漏らす。

——今までは、弱くてもいいと思っていた。

戦うことなんてせずに、惨めなままでのいるのが自分の姿なのだと
思っていた。

でも……一夏や、口にはしていないけど姉さんも想っていてくれ
たんだ。

僕は自分が思っているよりはちょっとだけ強いらしくて、彼らに
とっては誇れる家族だ、と思われているということ。そのことが、
僕は本当に嬉しかった。

だから——せめて、彼らの名に恥じないくらいに、僕は強くな
るって、決めたんだ。

『ふ……ふ、ふふふふっ』

ふと視線を前方向に戻すと、いつの間にかおかしそうにオルコッ
トさんが口元を抑えていた。

そのリアクションに、今更ながら僕は自分の恥ずかしい独白を思
い返し、ちよつと気恥ずかしさを覚える。一夏のこととはとやかく言
えないなあ……僕もけっこう、恥ずかしい台詞が好きなのかもしれ
ない。

『うふふふ、ふっ……ああ、ようやく判りましたわ。貴方は間違いなく、一夏さんのお兄様です』

「うう、なんて的確な精神攻撃だ。これが成長の証なのか」

『ふふふ。わたくしも先程自分の殻を脱ぎ捨てたばかりの若輩者ですが、代表候補生という先達として力を振るわせていただきますわ』

だから、と彼女は続ける。

同時に、彼女のISに何かしらのエネルギーが充填されるのを感じて、僕は思考を戦闘用のソレに切り替える。

——口の微笑みを、敢えて消さないままで。

くるり、と蒼い機体が舞踏のように回る。

それを合図として、僕も剣を握る手に力を込めた。

『——その強さ、示してみせなさいっ！このわたくしと、『ブルー・ティアーズ』の前にッ！！』
「ああ——君は今から、僕の『敵』だ、セシリア・オルコットッ！！」

その二つの叫びと同時に。

『強さ』というただ一つを求めながら、両者は戦闘を開始する――

ISにおける『早撃ち』というものは、人間が行うソレとはやや

違う意味合いを持っている。

インフィニット・ストラトスは本来は宇宙空間で使用すべきパワードスーツであり、その機構は肉体で行う動作よりも『イメージ』することが重要視されている設計だ。

故に、セシリアの『ブルー・ティアーズ』が持つライフルのような銃器で早撃ちを行う場合、『才能』だけでは不十分である。努力して動作を身体に刻みつけ、思考とほぼ同時にISを操作する必要があるのだ。

代表候補生に選ばれてから、彼女は自分を高める努力を絶やしたことはなかった。基本の射撃練習も、何千回——いや、何万回と同じことを繰り返してきている。

銃身を上げる。

銃口を向ける。

引き金トリガーを引く。

『ブルー・ティアーズ』の主武器であるライフル『スターライトMK?』を使用するには、たった三つの動作で事足りる。その全体動作を行う速度は代表候補生という名に恥じることなく、コンマの世界へ突入しているほどだ。

しかし——彼女は後に、その試合のことを次のように語っている。

『——まるで、時間が止まっていたようでした』

『走馬灯』というものがある。

人間が死に近づいた瞬間に、今までの人生を一瞬で思い出す、というオカルトに近い現象だ。

今回の事象とは直接的には関係のない話ではあるが……周囲の景色がスローモーションで流れていく感覚、というものを表現するなら、その言葉はまさに適役だったのだろう。

彼女にとって、それは余りにも異彩な感覚だった。

セシリアの反射神経によるものなのか、ISのセンサーが危険を感知したのかはわからない。

だが、極限まで圧縮されているその刹那に、彼女は確かに見た。

身の丈より巨大な斧剣を投擲する、零夏の姿を。

『——ッ!!?』

瞬間、己が行おうとしていた『早撃ち』を強引にキャンセルして、反射的にセシリアは回避行動を取っていた。

銃を構えた姿勢から強引に身を逸らしたせいで、ギシギシと機体が軋む音がする。しかし、そんな瑣末な痛みだけで済んだのは奇跡的だったと断言できるだろう。

セシリアの数センチ横を、膨大な質量を持った物体が掠める。
それだけで、生じた衝撃波が彼女のISを吹き飛ばしていた。

『く、うううううううッ!!?』

思わず口から苦悶の声が漏れるが、しかしセシリアの脳内はたった今起こった事象への驚愕で満たされている。自分の積み重ねてきたことを上回られたという、その事実。

(——わたくしが銃を撃つ前に、あの斧剣を投げ終えたんですのッ!?)

言葉にすれば単純である。

だが、一体どれほどの技術と性能が有ればあのような離れ業が可能なのだろうか。

しかし、今の動作で真に驚嘆すべきは、零夏がセシリアが取るであろう行動を完全に『予測』していたということだろう。いくら零夏でも、銃を持ち上げるのを確認してからあの巨大な物体を投げる、というのは不可能である。

なら何故その不可能が現実起こったかと言うと——彼はセシリアの目の動きや気配(と、申し訳程度の原作知識)から、セシリアが最初取る行動を『早撃ち』だと読みきって事前に準備を終えていたのだ。

恐らく、ただ普通に剣を投げただけではセシリアはあっさりとソレを回避していただろう。彼女がここまでギリギリの回避をせざる

を得なくなってしまったのは、射撃動作を行う途中に不意を突かれたから……という側面も存在している。

しかし、だからといってソレは簡単にこなせるものでは無かったはずだ。（おそらく）唯一の武器である剣を投げる、というのは並大抵の度胸でこなせるものでは無いだろう。

それほどまでに己の予測を信じていたのか、はたまたフォローする手段を用意していたのか。恐らくは両方なのだろう。その全てに、セシリアは純粋な賞賛の念を抱いた。

……彼女は知る由も無かったが、この一連の流れは入試の時に見せた行動と同じようなことであった。

しかし、あの時とは決定的に違うことが一つある。

あの時の零夏は、逃げるためだけに力を使っていたが。

今の彼は、『勝利するために』その能力を駆使しているのだ。

（っ、まずいですわ、この戦法は——ッ！！）

とある理由から、セシリアもそれに気付いた。

故に、猛スピードでアリーナを覆うバリアーに衝突した斧剣のことを思考の隅に追いやり、グチャグチャに掻き乱された機体の制御を取り戻すことも放棄して——彼女は、手に持ったライフルに全神経を集中させる。

そう、

剣を投擲すると同時に跳躍していた、『ヘラクレス』に対抗する
ために——！！

『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！
！』

『ああああああああああああああああああああッ！
』

ライフルの銃口にエネルギーが集中する。

同時に、零夏が『ブルー・ティアーズ』に肉薄する。

両者の動作はほぼ同時に行われて、そして——

ドゴォン！という爆音が響き渡った。

戦闘が始まってから、まだ14秒。

2人の決着は、まだ着いてなどいない。

Life10 たった一つを、求める心（後書き）

そんなわけで続きます。

VSセシリアは二回に分けて書く予定だったんですが予想外に分量が多くなったのも確かですね。学習しない作者である。

さて、今回はしつこく描写した零夏くんの「強さ」についての総まとめみたいな話でした。

ウチの主人公は核ミサイルですらなんとかして凌ぎ、ギルガメッシュ相手ですら敵わないまでも逃げ出すことで「命を保つ」ことができます。

が、「どうあっても自分の周囲に『死』が発生する」という場合に、思考と行動を停止させてしまうという致命的な弱点を抱えているんですね。

彼のトラウマは割と深刻なモノです。冗談で死んじやうよとか言う程度なら大丈夫なんですが、混じりっ気のない『死』相手にはマジで絶対勝てません。

故になんとか遠ざけようとするのですが、もしも目の前でソレが発生してしまったら例え身体が大丈夫でも心に大ダメージを負ってしまいます。

今の彼は『死』だけでなくただ傷ついただけでも相当ショックを受けるくらい弱いです（「可能性」だけで思考停止してしまうくらい）。会長職を断った理由はここらへんに有るのでしょね。

しかし、彼はこれから強くなろうと決めました。

それがどう物語に影響していくのが『僕は違います』で一番のキモなんだと思います。

これは僕の勝手な持論でしかないんですが、「強さ」と「力」は違

うモノなのだ、というのが今回の話では根底に置かれています。

この話は後々ラウラとも絡ませる予定なので詳しくは今後の展開で…

ちなみに作中で会長に言った「けれど——」の先の言葉はセシリアに言った内容と同じです。

いやあ、楯無さんは相変わらず動かしにくくて仕方ないですね！仕方なく緩衝材として姉さんをつっ込みましたよ！

それに限らず、今回はシリ阿斯とコメディの境界がアレなことになっていて申し訳ないです。迷走の結果ですごめんなさい。って、いつも通りか……

あ、今回の斧剣ブン投げゲーに関してのツツコミは次回以降解説があるのちょっと今は我慢していただけると幸いです。うん、まあこういう風にトドメを刺すかは百頭的能力考えたら分かりやすいですよねえ。

さて、本当に今更ですがここでヒロインについての大事なお知らせです。

『僕は違います』のメインヒロインは——のほほんさんに決定いたしましたッ！！

一応ハーレム無しという方向で、ギリギリ束さんはサブヒロイン的立ち位置かな？といった具合ですね。

あれですよ、のほほんルートにおいて、ボスでありヒロインでもあるのが束さん、という黒セイバー的な立場なのです。まあボスなの

かは原作の流れで変化しますけれどもね。

他のヒロインについては、そのうちまたアンケートでも取ってI Fのエピソードでも突っ込む予定です。

それでちょっとした質問なんですけど……KNZSちゃん（何故か変換できない）って出番増やしたいっていう希望ありますか？

いや、個人的にもこの子めっちゃフラグ立てやすく、感想での人気も高かったんですが……実際のところどうなのでしょう。本音ちゃんとも接点あるし、希望が多いなら増えそうなんですけど。

それでは、ご意見お待ちしております（

L i f e 1 1 蒼い鳥、鉛の獣（前書き）

みなさん、遅れて申し訳ありません。僕です、琥珀です。

色々言いたいことや謝罪したいことはあるのですが、なんと今回は二話連続投稿なので話はソチラでやりたいと思います。

え？なんで二話なのかって？それはですね、

セシリア戦が二万字越えちゃったからです☆

……誰か僕に無駄な文章を削る能力をください。

Life 11 蒼い鳥、鉛の獣

——ISというものはあくまで『多機能スーツ』である。

ロボットではなく、言うならば肉体機能の延長線。兵器としての側面に注目している者が非常に多いISだが、実のところこの装備の本質はつまり、所有者の『能力』を強化できるという一点に尽きるのだ。

故に、『専用機』の扱いに長けている一部の者たちは、IS本体を展開させていなくてもその機能の一部を使用し使うことができる。当然、国家代表という『熟練者』の一人であり、学園最強の立場である彼女……更織楯無からすれば、ハイパーセンサーの機能だけを起動しながら試合を観戦することなど容易いことだった。

「……やっぱり、零夏君が一枚上手だったみたいね」

そうして、超高精度の映像をその眼に映しながら——楯無はぽつりと一言呟く。

同じ部屋にいた虚と本音も、管制室のステータス表示を確認すること目の前に広がっているその状況に遅れて気付き、驚きの声をあげた。

零夏が、素手で銃口を捻じ曲げている。

セシリアの表情が驚愕で染まった。

しかし——『ブルー・ティアーズ』の射撃動作は既に完了してしまっている。放出されようとしていたエネルギーは当然行き場を失い、轟音と共にライフルの先端部分が爆発した。

影響はそれだけでは済まず、周囲に広がった衝撃波は二人の身体を吹き飛ばす。飛び散った破片が火花を散らしながら互いの身体に衝突していくのを見て、一部の女子が悲鳴を上げていた。

しかし、戦う2人はそれを一切気に掛けない。

彼らはただ己の戦闘に全神経を集中させる。視線を相手から一時も離すことなく、どうすれば相手を上回ることを考えていた。

その姿を『ミステリアス・レイディ』を通した映像で見ながら——楯無もまた眉一つ動かさず、瞬きひとつしない。

彼女にとって、その程度の障害でこの戦闘を見逃すわけにはいかないのだ。

『——ちいっ!!』

『く、う——ッ!!』

吹き飛びながら閃光に照らされ、一瞬浮かび上がった2人の表情は——共に苦い。

零夏としては本来なら痛い一撃を当てたかった場面であり、セシリアとしては反応できたのにライフルを破壊してしまった、という自分への不甲斐なさが表情に表れている。この結果が生まれたのは、お互いがお互いの仮想していた力量を越えていたからか。

正直な話、楯無にとって零夏の力量はともかく、セシリアがあ

攻撃に反応できたことは少なからず驚きだった。

目の前を『必殺の一撃』が通過したのに、それを意思の力で無視するというのは並大抵のことではない。それを行うのに必要なのは、才能だけでは決して身につかないであろう『正確な判断力』なのだ。それを既に備えているというのは大したものだ、と楯無はセシリアの評価を内心で上げる。

制御を崩され不安定な姿勢ゆえ今回は一步及ばず攻撃を許してしまったが……それは零夏の『異常』とも言える攻撃能力のせいだとも言える。実際のところはあの一撃を回避できただけでも十分であると言えるだろう。

（土壇場で『覚醒』したのか、それとも——『別の理由』があるのかしらね）

それを見て、楯無は一瞬だけセシリアのことを考え……この場でその理由を追求しても意味はないか、とその思考を打ち切った。

普段のふざけたソレではなく、戦士としての気配を纏いながら彼女は戦闘を見続ける。

——心のどこかで、疼く想いを抑えながら。

ズドン、という音が背中から聞こえた。

あの爆発の直後に不安定な体勢から見事な技量で機体を持ち直したオルコットさんに対し、僕はそのまま何の行動を取ることもせず……いや、『できずに』、地面に衝突する羽目になっていた。

あまりの衝撃に大量の砂塵が巻き上げられ、一部の観客が悲鳴をあげるのが聞こえる。まあ、背中からアリーナの地面に叩き付けられたのだ、そのリアクションは極めて妥当なものだろう。

例えるなら、今の僕の身体には『ビルの屋上から至近距離で爆弾を喰らい、そのまま吹き飛んで地面に叩き付けられた』といったところか。当然、常人なら即死である。……いや、そもそも爆風を直に食らった時点で普通の人間ならバラバラになってるんだけど。

（まあ、効かないけど、ねッ！！）

——しかし。

『十二の試練』^{ゴッドハンド}は、その全てを無効化する。

心中で軽口を言いつつ、僕は叩き付けられた衝撃を利用して体勢を無理矢理立て直した。普通の人間なら骨や筋肉を傷めるような強

引な体捌きであろうと、宝具という神秘はそれを強引に可能にする。一連の動作は澁みなく完了し、一秒もかけずに僕は再び地面に両足を付けて立ち上がっていた。

そのついでに、『令装』から送られてくるお互いのステータスを視界の端で確認する。

【ヘラクレス】..残りエネルギー578

【ブルー・ティアーズ】..残りエネルギー703 右手主武器破損

(……やはり、僕の方が減りが早いか)

実のところ、この仮想エネルギーの残量は、ISとしてのヘラクレスの弱点をそのまま表していると言っても過言ではない。

前にも言ったかもしれないが、本来なんの制限もない『十二の試験^{ゴッドハ}』の能力は現在、ISとして偽装した際の『辻褄合わせ』のために、装甲をオミットして純粋なエネルギーシールドと絶対防御のみで防御を行う——という、ヘラクレスの『機能の一部』という扱いとなっている。

そして、絶対防御はエネルギーを大量に消費する。

故に、真つ当な理屈では、絶対防御が発動しやすい僕の機体は、他のISと比べ攻撃を受けた際のエネルギーの減りが大きいという結論になり……どういうわけか、僕は『打たれ弱い』という架空の欠点を背負わされることになってしまったのだ。

『一定レベルまでの攻撃を強制的に無効化する』なんてチートっぷりを正直に話すわけにもいかないから仕方ないとはいえ……こんな実際とは真逆の設定になるとは皮肉なものである。むしろ耐久あ

りすぎで文句言われるレベルだからね本当は。

恐らく、この設定を考えた時の束さんは高笑いを浮かべていたに違いない。まったく、なんていうことをしてくれたんでしょう。あの人は本当に面倒ごとばかり持つてくる気がする。

しかし、実のところこの弱点はそこまで重要というわけでもなかったりする。

コレはあくまで『仮に設定された弱点』でしかないし、ヘラクレスの身体能力なら別に攻撃を避ければいいだけの話だ。というかそもそも、ほぼ無敵状態なのが根本的におかしい。まあこのくらいは用意しないと対戦が成立しないだろうさ。

そう、本当の『弱点』は別にある。

攻撃・防御・精密動作などが極めて高いバランスでまとまっていた、英霊の経験までも保有しているこのチート能力にも実は、『IS』という存在に完全に劣っている点が一つだけ存在しているのだ。

飛行能力。

僕の持つ武器は『斧剣』という近距離用の武器である。当然、ソレを空中にいる他のISに当てるには相手の動きを完璧なタイミングで捉えて、なおかつ接近していなければならぬ。

にもかかわらず——僕が地面を蹴って跳べるのはわずか一度きりしか無い。他の全てのISが飛行を可能にしている中『飛べない』ということとはつまり、空中でなんの推進力を得る方法も無いということなのだ。

つまり、一回のジャンプではチャンスは一回きり。跳んだら最後、僕は相手の待ち構えているところにわざわざ突っ込んで攻撃を命中させなきゃなんのである。

これだけでも極めて難しい神業的なスキルを要求されるのにもかかわらず、おまけに僕はその後空中で動くことができない。

つまり、何かしらで相手を怯ませたり、あるいは一撃で勝負を決めないと、僕は重力に引かれて必ず無防備になり――ほぼ確実に攻撃を喰らってしまう。敵のISより『打たれ弱い』にもかかわらず、である。

これでは当然、ダメージレースでは負けてしまう。だからこそ、僕は初手で強引に武器を投げてまで隙を作りにいったのだが……『早撃ち』で競り勝ったはいいが、その後の強襲に反応されるとは思っていなかった。

硬直を取られやすいライフルは破壊したので一応最低限の仕事はしたと言えるが、アレで墮とせなかったのはかなり痛い。

一応、回避されても問題ないように戦術を組んではいたものの、僕の『奥の手』はかなり不明瞭なことがあるので、正直なるべくなら使わずに済ませたいのである。とはいえ、この流れだとどうなるかは判らないな。

しかし、本当に驚きだ……まさか隙を生じぬ二段構えを避けられるとは。もしもオルコットさんが原作通りの強さだったら、そもそも投げた斧剣にブチ当たってその時点で終了していただろうに。

しかし、現実はそのようならなかった。ということは、彼女も確実に強くなっているということだ。一夏がそうであったように、既に僕が識る知識の強さを越えているのだらう。

その事実が、ハンデだらけの僕の戦いがそう楽観視できないことを意味していた。

「だけどまあ——それくらいじゃないと、面白くないよね？」

しかし。

それでも、僕の顔から笑みは消えない。

言葉を紡ぐと同時に、ゆらり、と周囲の砂塵が僅かに揺らめくのを感じる。

察知して瞬時にその場を離れると——青い閃光が砂煙を引き裂き、僕の先程立っていた場所を貫いていた。

『——ええ。まったく、同感ですわ』

続いて、二つ、三つ、四つ——進行方向を阻むようにレーザーが発射される。それを回避しながら、僕は敵の姿を視界に捉えた。射撃を行ったのは彼女本人ではなく、『ブルー・ティアーズ』という、本体と同じ名前のビット兵器だ。

空気を切る音を出しながら、BTビットが僕を包囲し、睨む。行く手を阻むその姿は、言うならば彼女の誇りを守ろうとする騎士だろうか。

ならばこそ、負けられない。

僕にも、譲れないものが——守りたいものが、あるのだから。

ここからは彼女のターン、僕の耐久から考えるに攻撃は一発も貰えない。なかなか楽しい障害物走になりそうだ、と下らない考えを抱きながら僕は吼えた。

「――墜とさせてもらうッ!!」

『――撃ち抜きますッ!!』

足を止めずに、僕は左足を踏み込む。
足を止めて、彼女はビットの制御に全力を注ぐ。

そうして、僕の視界の大半を、青い光が埋め尽くした――――

一方、楯無たちがいるBピットとは反対側の、Aピット。

そこには千冬に真耶、箒といった昨日と同じ顔ぶれにもう一人、試合を終えた一夏が加わっていた。

その誰もが言葉もなく、モニターに映る試合から眼を離さない。その注視されている映像にはリアルタイムで計測されている各種データが併せて表示されており、その中の一つにこんな項目があった。

【BT兵器稼働率…47%】

それは、『ブルー・ティアーズ』がどれほどまでに性能を引き出せているか、という目安だ。

100%になればビームを『曲げる』ことすら可能にするというその兵器は、今はまだ完全には程遠い状況にある。

しかし——その表示を見て、一夏は大きな衝撃を受けていた。

「……あれで、半分も使えてないってのかよ？」

「そうだ。BT兵器というものは、本来主武器と同時に運用するものだからな。——だがまあ、ビットとしての運用は模範的とも言える」

呆然と呟いた一夏に、千冬が補足を入れる。

とはいえ、一度戦った彼だからこそ、目の前の光景への驚きは増

したのでろう。客観的に見たその光景は、本当に自分がアレを相手にしていたのかという感想しか生まれてこない。

一夏たちが見守る中、セシリアからの攻撃を受けた零夏は即座に砂煙の中から飛び出し移動を開始していた。

彼の進行方向には先程投擲し、そしてアリーナのバリアーに弾かれ落ちた斧剣がある。何をするにしても、まずはアレを取りに行くことが彼の第一目標なのだ。

入試の際には素手で相手を圧倒した零夏だったが、それはあくまで油断した隙を突いたから成功したものである。既に手の内がバレてしまっている今、やはり大威力の攻撃を行うには『武器』が欠かせないという判断なのだろう、と千冬は考える。

しかし、『ブルー・ティアーズ』もそう易々とはそれを許さない。

ズドドドドッ！と、レーザーの弾幕が降り注いだ。

それを表現するなら、壁――いや、最早『檻』だろうか。

たった一人の地を這う標的に向け、あらゆる手段を持って、BTビットは攻撃を繰り返していた。

正面から、側面から、背後から、上方から、あるいは彼本人ではなく周囲の地面を破壊し、即席のトラップを作り出す。その戦術の多彩さは彼女の努力の証であった。

加えて、対象が飛行できないという弱点を突き、地面への攻撃もしっかりと視野に入れているのは流石代表候補生といったところである。

「……すげえ」

呟いた言葉に返事はなかったが、周囲からの無言の肯定を一夏は感じる。

これがセシリアの本来の実力ならば、先程の自分は手加減をされていたのだろうか？自分と白式はそれほど弱い存在だったのだろうか？……いいや、違う。

彼女もまた、凄まじい勢いで成長しているのだ。

零夏は戦う相手を『引き上げる』性質がある。何度か兄と対峙した一夏にはそれを知っていた。強い相手だからこそ、己の全てを出そうと力を振り絞るのは当然の帰結だ。

それに、普段から辛口な千冬でさえ目の前の彼女の能力を認めている。滅多に誰かを褒めないその言葉が成長の証明でもあった。いわばそれは、世界最強のお墨付きである。

「……俺も、負けられねえな」

いまだ遠い背中に、改めて一夏は誓う。

そんな彼の決意に、後ろで密かに箒と真耶が赤面していたが、それには気付かずに一夏は彼らを……より正確に言うならば、零夏の背中を追い続ける。

一夏には、絶対の信頼があるのだ。

——自分の兄は、世界の誰にだって負けないという想いが。

ビットを操るセシリアは、上空で敵を俯瞰しながら停止していた。彼女はまだ思考を分割し、BT兵器と通常行動を同時に使うことができないためだ。

念のために言っておくと、これは別段彼女が悪いわけではない。『ブルー・ティアーズ』そのものがまだ実験機であり、実戦運用ができるような完成度ではないためである。

そのため、本来『実戦』では完全にビットの操作に専念することなどはできず、ある程度は攻撃に警戒しながら戦わなければならないのだが——

——前回や今回のように、相手が有効な攻撃手段を持っていない場合。

彼女は遠慮なくをBTビットに全力をつぎ込み、理想の動作を実現する。

（——応えてくれますわ——！！）

思考が加熱し、脳が融けてしまいそうな感覚の中——セシリアは、今までにない程に自分が『ブルー・ティアーズ』とシンクロできていることを自覚していた。

恐らくは、訓練実戦全てを含め、これほどまでに集中できたことは初めてだ。自分とISが一体化するような高揚感が、彼女を熱く熱く包み込んでいる。

己の一部のようにビットが動かせるというその事実には、ある種の全能感すら覚えた。相手がどのような難敵であろうと今ならどうにかできる気がする。それは、一流の乗り手のみが到達できる領域に彼女が足を踏み入れた証明でもあった。

だが、しかし。

言い換えれば——これを逃せば、彼女に勝機は無いということだ。

（――させませんっ!!）

一際鋭くビットを動かし、行く手を阻むレーザーを発射していく。
目の前の難敵に打ち克つために――セシリア・オルコットは戦っていた。

「す、すごいよ……」

「普通の試合じゃ、こんなものは絶対に見られないでしょうね……」

そして、視点は生徒会の一同に戻る。

目の前に広がる戦闘を見て、本音は目を丸くしながら感嘆の声を。
虚はそれに対し、妹よりも幾分か冷静な表情で相槌を返していた。

とはいえ——流石の虚もやはり内心は驚きで一杯である。

なにしろ、今行われているのは様々な意味で『世界初』の、非常に高レベルな試合なのだ。彼女更織楯無の主が普段は見せない真剣な表情をして観察をしているのもその証拠である。

客観的に虚が見た限りでは、四基の自律兵器を見事に操るセシリアの動きも素晴らしいものであったが——やはり、一際目立つのはそれらに対処している零夏の動きだろう。

ビットの攻撃が、一発も当たっていないのだ。

『——つつつ!!』

思わず、セシリアから苦悶の声が漏れる。

最高の出来で攻撃を行っているのに、それが手応えを感じられな
いとなれば、表情が歪むのは当然のことであった。

アリーナの端に落ちた斧剣までの遠い距離を走りながらも、零夏は決して焦らない。

時には一歩後ろに下がって詰んでしまうルートを回避し、時にはリスクのある跳躍も行い、吹き飛ばされた地面を飛び越える。最大限にその身体の小ささを利用して、すべての角度のあらゆる方向にセシリアが展開している『弹幕の檻』を、すり抜けるように彼は突破していた。

その動きに派手さは無いが、しかしギリギリの動きでもない。余裕を持って、次の攻撃に対処できるように確実に回避し、進む——さながら、生き残ることを知り尽くした老兵の動きだった。

その技量に、鮮やかさに、思わず観客席から歓声が上がった。両者が実験的な側面に特化しているISとはいえ、一年生の段階でここまで戦闘を行えるという事実、教師達でさえも惜しみ無い賞賛を送る。

「やっぱり、れーか君って凄いや〜……」

「ええ、本当に……凄い」

そして、何よりも少女達の印象に残るのはその表情だ。

攻撃を避け続ける零夏は——笑っていた。

楽しそうに、己と相手を高めていけることに喜びながら。

本人はああ言ってはいたが、やはり彼は弱くなどないのではないか……虚はふと、そんな感想を抱いた。

戦う、ということだけではこんなにも人を惹きつけることはできない。こうして魅力を持っているそれ自体も一つの『強さ』であり、観客とクラスメイトは応援の言葉を叫び、自分の妹も目を輝かせそれを見ていることが答えなのだ。

果たして彼に何があったのか、どうしてあんなにも自分を過小評価するのかは判らない。けれど、織斑零夏は虚や他の人々にとって確かに『強い』……あるいは、『強くなる』としている『人間』だった。

「——そっか」

納得したように、楯無も呟く。

真剣な眼差しで試合を見続けながらもつい反応してしまった楯無に、思わず虚は微笑みを漏らした。

なんだかんだ言って、本当はみんな単純なのだ。

——それぞれが抱えている色々なものを守るために強くなりたいという、ただそれだけ。

きっと、本人達に聞いても正直には答えてはくれないであろう台詞だ。だから、虚はその言葉を言わないことにした。きっと本音はこのことに気付いていたのね、と思いつつ——虚は楯無に笑いながら語りかける。

「でも、彼はもっと強くなりたいようですよ？」

「……ええ。なら、私も負けられないわね」

「会長になるべき、と仰ったということは負けてると感じていたんですか？」

「うん。でも、本当に負けてるのは力だけじゃなかったみたい。ちよつと基本的なことを忘れてたわ」

「なら、少しは私たちを振り回さないように成長してくださいね？お嬢様」

「えっそれは……」

振り回されているのは虚だけではないか、と返そうとして——『これから』は違うのだと楯無は気付いた。零夏も、一夏も、セシリアも……きっと、その他にもまだ見ぬ誰かが現れて、この一年は

騒がしくなる。

何故だか、それは間違いない、と彼女は直感で理解していた。

「……ふふっ。それは判らないわね？あと虚ちゃん、『お嬢様』はダメよ」

「失礼しました、お嬢様」

「もう、虚ちゃんったら」

「……あ、れーか君が！」

「「！」」

本音の声に、2人は会話を打ち切って再びモニターに目を向ける。その向こう側では、また戦況が変化を起こしていた。

虚からは見えなかったが——楯無の顔は、先程までのような気負ったものではなく、どこか納得したような微笑みに変わっていた。

やがて、長かった疾走が終了する。

幾多の攻撃を無傷で潜り抜け——ついに、零夏は斧剣の元へとたどり着いていた。

『このッ——！』

最後のチャンスを狙い、セシリアはレーザーを斧剣そのものに集中させる。回収を行おうとする零夏への牽制と、もし可能なら武器破壊も兼ねた射撃だった。

しかし——その攻撃でさえも、あえなく回避されてしまう。

狙いを感知した彼は、あろうことか地面に落ちていた武器を左足で蹴り飛ばして場所を強引にズラした。ドゴォ！という重い音があたりを響き、それに遅れて、BTビットから発射された熱線が空しく地面を焼いていく。

それを確認してから、零夏は蹴り飛ばした武器の元へ飛び込み——ついに、ソレを掴んだ。

『——っ、と！』

ドズザアッ！という音が響く。

手に持つ斧剣を地面に突き立て、零夏はアリーナの土を削りながら減速していく。やがて勢いを殺し完全に停止した彼は、立ち上がりその場でゆっくりと剣を引き抜いた。

もう、動く必要はなくなったのだ。

零夏が止まった意味を正確に理解し、セシリアはBTビットに帰還命令を発した。ひゅおん、という風を切る音と共にビットが舞い戻り、金属音を鳴らしながら本体の『ブルー・ティアーズ』に収納されていく。

300メートル程度の間を開けて、2人は睨み合っていた。

セシリアの攻撃は、ついに成功しなかった。

それが、あまりにも苦い事実を受け入れつつも——認めざるを得ない事実だった。納得いかない感情を抱えながら、ややジト目になりつつセシリアは一言文句を告げる。

『……さっきからどうも、原始的な手段を使いすぎではありませんの？』

『まあ、その通りだねえ。けどまあ、対抗できない君が悪い』

『くっ……!!』

苦し紛れの八つ当たりは、見事な正論で返されてしまった。

その返事に『でも文句のひとつも言いたくなるんですわよ貴方のデタラメっぷりには……!』と、セシリアはかなり妥当な苛立ちを抱く。しかし、理不尽なのも確かなのだが、言い返せない自分にも無力感を感じてしまうのも事実である。

気分を切り替えるため、彼女はひとつ大きな溜息をついた。
そして改めて、ひとつの質問を零夏に投げかける。

『……というか貴方、一体どこが弱いというんですの？』

『人間性、かなあ』

『またコメントに困る返答を……』

疑問符を浮かべながら返答する零夏にがっくりと型を落としながらも——だけどもあ、そんなものなのだろうとセシリアは同時に納得していた。

結局のところ、『強さ』なんて曖昧なものは自分で納得するかどうかだ。自分だって、この試合の前までは自分自身のことを強者だと思っていた。己の世界の外側は、きっと全て似たようなくだらないモノだと信じていたのだ。

そんな自分を、『傲慢』という壁を作っていた自分を変えてくれたのは——織斑一夏という、一人の少年だった。

『——俺は俺で、お前はお前だろ——!!』

彼の強さを認めない自分^{ワタシ}に、世界はそんなに単純じゃないと彼は言った。

否定することではなく、認めることが俺の『強さ』なのだとは

叫んだ。

その言葉に、どうして今まで気付かなかったのだろう。

その言葉で、どうして容易く壁は崩れてしまったのだろう。

きっと、理屈など無い。簡単に人を変えてしまうのが一夏という人間で、自分もまた彼の姿に魅せられた一人なのだ。だからこそ、自分はあれだけの鍛錬をしてきたのに負けたのだとセシリアは思う。

織斑零夏もまた、自分と同じだ。彼もまた、あの少年に変えられて少しづつ、自分なりの強さを探すことを始めた人間だった。

だから——セシリアは思ったのだ。彼と戦えば自分もきっと、

『強く』なれるのだと。

『——ねえ、零夏さん』

『なんだい、セシリアちゃん』

不意に。

とある決意を持って、彼らはお互いの名を呼んだ。

『このまま続けても、きつとわたくしが無様に逃げ回って、いずれ敗北するだけですわ』

『ふむ。自分でソレを言っちゃうのかい？』

『……悔しいですが、実力の差は歴然ですから』

それを聞いて、観客席から驚きの声があがった。

確かに彼女の言うとおり、既にセシリアが一方的に攻撃できる時間は終了している。彼の攻撃を避けながら足が止めるビットを当てるのは至難の業であることも確かだ。

……しかしそれでも、今の言葉はまさに『敗北宣言』に等しかった。日頃からプライドの高い彼女としては、考えられないような言葉だ。

『ですが、この戦いの終わりがそんな半端な決着だなんて、このセシリア・オルコットには認められません』

『奇遇だねえ。僕も逃げ回る相手を追うのは面倒なんだ』

呆然とした表情のまま2人の声を聞いて、今更ながら全員が再確認する。

彼らは確かに『勝利』を望んでいたが、それはこんなところで中途半端に終わるものではない。彼らが望むのはハッキリとした、己を高める結末なのだ。

だからこそ、セシリアは言う。

己の敗北も、手加減を頼むという屈辱も全て受け入れて。

『次の一撃で、決着をつけましょう』

『ああ、いいとも』

一瞬だけの、全てを賭けた戦いを。

『――インターセプター』

静かに、彼女は手を掲げ呟いた。

それに反応し、『ブルー・ティアーズ』がセシリアの手に一本のナイフを具現化する。

音声による武器の起動というのは、はイメージにより様々な行為を行うISの搭乗者としては最低ランクの恥ずべき行為である。本来、彼女のような熟練者であれば一瞬で取り出すべきなのだが――しかし、普段近距離向けの訓練をしていなかった彼女は、このナイフを取り出すのにその方法を取らざるを得なかった。

(――まったく。怠けた結果がこれですわ)

そうセシリアは内心で自嘲する。

しかし、零夏にとってはその行為は決して低俗には見えなかった。ゆっくりと集まる光の粒子と共に、短剣が作り出されていく光景はどこことなく神秘的で、まるで何かの儀式のような印象を彼に与えたのだ。

(……ああ、そうか。――『真名開放』に似てるんだな)

とはいえその行為は戦闘中では明確な隙であり、今攻撃すればあ
っけなくセシリアは倒せるだろう。しかし、零夏はただ斧剣を構え
直して、彼女より先に動くことはしなかった。彼にとって大事なの
は『勝敗』ではなく、『彼女を越えること』なのだから。

そもそも、ただ勝ちたいだけならこんな申し出は受けていない。
騎士が好みそうな『誇り』などという戦場においてあまりにも非効
率的なソレを、零夏は敢えて受け入れたのだ。

故に、ただ今は己の身に力を込め続ける。

彼から湧き上る魔力は、否応無しに周囲の空気を引き締めていく。
一夏の時と同じように、彼の存在感は威圧感を持って場の空気を支
配していた。

彼の目の前にいるセシリアも、溢れ出す気配に身体が震えるのを
感じながら――それでも、挑むように『インターセプター』を零
夏に向けてまっすぐ構える。あるいは、彼女の震えは怯えから来る
ものではなく、日本で言う武者震いなのかもしれない。

すうつ、と息を吸い込んで、吐き出す。

――覚悟は、決まった。

『――行きますッ!!』

宣言すると同時に光が溢れ、彼女の背中に莫大なエネルギーが集
中する。

同時に、勢い良く本体から二基のビットが射出され『ヘラクレス』
に向かって移動を開始した。残りのBT兵器の挙動に注意を払いつ
つも、その一連の動作を見て零夏はわずかな驚きに眼を見開く。

イグニッション・ブースト
『瞬時加速……!!?』

それは、背部にエネルギーを蓄積させ、一気に放出することで爆
発的な加速力を得る技術だ。

決してそこまで高等なものではなく、むしろ基本と言える技能。
それだけならば、零夏も別に驚きなどしない。

だがしかし、今の彼女のように『ビットを操作しながら』加速を
行うとなれば話は別だった。彼女はそもそも、通常動作とBT兵器
を同時に扱えないのが弱点であるはずなのだ。

（ビットと機体の同時制御をこの短期間で身に付けたのか……?…
…いや、違う）

恐らく彼女は自分の機体制御を放棄して、ビットの制御にすべて
のリソースをつぎ込む気なのだ、と零夏は気付き——その余りの
無茶に、思わず顔を引き攣らせた。

イグニッション・ブースト
確かに、瞬時加速を行った機体はその後真っ直ぐ進むだけだ。細
かい制御をせずにビットを操作しつつ移動をしようとするなら、こ

の方法が一番いいのかもしれない。

だがこの方法は、相手に回避されるだけで『敗北する』という余りにも危うい戦術なのだ。しかも例え攻撃を命中させても、最終的にはほぼ確実にバランスを崩し地面に激突するだろう。まさしくこの状況以外では使えない、とんでもなく大雑把な攻撃だった。

（まさか、本体を危険に晒してまでビット^{攻撃}を優先するとはね——！！）

それは自分の財産を守ろうとして宝石魔術をぶつけるようなモノではないか、と心中でツツコミを入れつつも——この場合に限っては、ソレは確かに有効だと零夏は認めざるを得ない。

いくら『ヘラクレス』でも、流石に四基のビット相手では対処にある程度の時間を必要とする。つまり、ある程度の隙は生まれる可能性があるということだ。

流石に真っ直ぐ突っ込むだけの攻撃まで通すつもりは無いが……問題は『ブルー・ティアーズ』のビットが『六つ』あり、実弾兵器のミサイルビットも搭載しているというところか。実弾のミサイルを搭載したビットには、爆風のせいで斧剣で対応しづらい。

今、彼女がレーザービット二つしか飛ばしていないのは、まず間違いない次への布石だと零夏は分析する。これを突破してからの攻撃こそが勝負の分かれ目になるだろう。観戦していた楯無や千冬達も、同じ結論に至っている。

そして、セシリアは加速を開始し、

射出されたビットも、零夏に攻撃を繰り返した。

まず、二基のBTビットが零夏に迫る。

セシリアが取った戦法は、ひとつを後方で停止し、もう片方はレーザーを乱射しながらこちらに接近させるという前衛・後衛のカタチを取ったスタイルだ。

それに対し零夏は右手に斧剣を持ちながら流れるように左手を引き絞り、

『――ふッ!!』

『ッ!?!』

握り込んでいた金属片を投擲した。

虚を突かれたセシリアはそれに反応できない。

擬似的な投擲剣と化したカケラは狙い変わらず、そのまま鋭い音を立てて後方のビットに命中し爆発する。続いて零夏は右手の斧剣を振り上げ、向かってきていたもう一つを両断した。

その投げられたカケラの正体を、セシリアもわずかに遅れて理解する。

(これは、さっきの――!!)

――『スターライトMK?』の破片。

彼は先程の爆破の際、飛び散ったライフルの破片を回収し、密か

に隠し持っていたのだ。

恐らく、飛び道具が必要になると踏んで用意していたのだだろうが———よりによってこのタイミングで使ってくるのか、と思わずセシリアは内心歯噛みする。

もとより特攻覚悟で攻撃させたビットとはいえ、足止めにすらならないとは想定外だった。やはり、自分と彼にはどうしようもない力の差が広がっている。目の前のISは己の想像の遥か上を行く怪物なのだ。

だが———それでも、止まるわけにはいかない。

もとより目の前の壁がより困難であればあるほど、彼女を奮い立たせるのだ。

『ブルー・ティアーズ』はナイフを正面に構えたまま、その勢いを無くすことなく『ヘラクレス』へと突撃を続行する。

それに対して、零夏はその場を動かずにいた。下手に動くより残りのビットに対応できるようにすべきという考えからだ。彼女自身は脅威ではなく、やはりBTビットこそが重要なのである。

300メートルの距離が、一瞬で詰められていく。

『ブルー・ティアーズ』の速度情報を考慮に入れつつも、零夏はビットが展開されるのを待った。

残り、250メートル。まだビットは出て来ない。

200。

150。

100——

(・・・?)

そこまで接近されてから、ふと零夏は一つの違和感に気付いた。

セシリアが、ビットを出さないのだ。

先程も言った通り、現在の彼女はただ真っ直ぐ突っ込んでいるだけである。いくら速度があっても、零夏にとってそんなことはなんの脅威にもならない。

それに、例え制御できたとしても技術はこちらの方が上なのだ。

このままではただ打ち落とされて敗北するだけなのだが……

(何を考えてるんだ……まだ温存する必要があるのか?)

——距離が、50メートルにまで縮まった。

ここまで、現実の時間ではほんの数秒しか経過していない。

極限まで集中力が圧縮され、引き伸ばされるその刹那——ようやく、彼女の機体に備えつけられたレーザービットが分離した。再びそれらは左右に別れ、零夏の周囲へ展開されていく。

だが、遅すぎた。タイミングを逃したその攻撃は彼に通用するこ

とはないだろう。

もう左手に投擲するモノは無いが、この距離ならば斧剣だけでも十分対応できる。あるいは本体を直接叩くことも可能かもしれない。零夏の距離に入るということはそういうことだった。

そうして、セシリアの中途半端な行動に疑問を抱きつつも、彼がとにかく迎撃に動こうと足を踏み出した瞬間――

ガパア、という音と共に、
セシリアが腰に装着されたままのミサイルをぶっ放した。

『――――ッッ!!?』

驚愕する零夏に壮絶な笑みを浮かべながら――セシリアはそのまま勢いを殺さず、どころか更に加速しながら『ヘラクレス』に突撃する。

彼女に倣うようにミサイルが併走して飛翔し、2人の周囲の地面へと奔った。この距離では迎撃も間に合わず、その周囲に逃げ道は存在しない。

――セシリアも含めて。

ミサイルの弾頭がひしゃげ、瞬間的に体積が膨張するのを零夏の眼は捉える。それが爆発する刹那、全員の思考を代弁して、楯無は思わず叫んでいた。

「――――自爆ッッ!？」

複数のミサイルが同時に炸裂する。
先程のライフルの爆発とは比べ物にならない爆発が、アリーナ全体を揺るがした――

Life 11 蒼い鳥、鉛の獣（後書き）

さて、そんなわけで11話終了。続きはすぐ投稿するので少々お待ちください。話の解説も次回のあとがきにて。

いやはや、とんでもない難産・不幸・雑事が重なってここまで遅れてしまいました、すみません。どうしてこうなった…

いやあ、この期間ってたくさんゲームが出ましたよね！EVS、スカイリム、COD（ちよつと古いかな）などなど。ハッハッハッ、廃人がこの世にはたくさん生まれていることでしょう。

——そのゲームやってサボってたんだな思ったでしょ？

ところが一つも持ってません。ははは：僕は違いますッ！（半ギレ）

周囲のエクバ勢が家庭用で大盛り上がりの中、僕は独り淋しくPS3すら持っていませんでした。そんな金ねーよコンチクショオおおお！

逆に言うと、それらにノータッチだったのにここまで遅れたってどういうことなのでしょう。いかん、墓穴を掘ってしまった気がする。この作者間違はなくアホである。

いや、冗談はさておき投稿が遅れて本当にすみませんでした：エアコン破損して極寒の中五時まで起きてた×三日とか情け無い事故が

色々あったのです。

というか、心理描写多すぎた前回の話のグダグダっぷりに猛省して今回の話を書くつもりだったのに、ひとつの戦闘にまさかの二万字も使ってしまった。てめえ、馬鹿か！最高記録ってレベルじゃねーぞ！

これに関して言い訳をさせていただくなら、セシリアちゃんは実はここですっかり成長フラグ立てておかないとこの先大変なことになってしまうのでこのような扱いとなりました。

なんだかんだ言って密度の濃い戦闘経験を原作では積んでいる彼女ですが、そのフラグの大半が零夏がいると折れるんですよね……こういう辻褄合わせも難しいところです。

というか、セシリアって近づいてくれないから近接戦闘が描写しづらいんですけど他のSS作者様はどのように対応してるんでしょうかね？

L i f e 1 2 躊躇いを消して、光を翳して（前書き）

区切りの12話について来ました！みなさんありがとうございます！

タイトルがどう見てもアレなので後々修正するかもしれません。あと本文も推敲ゼロなので修正するかもしれません。

今はとにかく、泥のように眠ります……

Life 12 躊躇いを消して、光を翳して

——ここで、数時間前の話をしよう。

零夏が楯無達と部屋にいた頃に起きた、セシリアと一夏の模擬戦の時の話である。

結論から言ってしまうと、セシリア・オルコットと織斑一夏の戦いは、『引き分け』だった。

『白式』の性能を活かし、一夏はセシリアにかなり善戦していた。効果を知らないセシリアに『零落白夜』の攻撃を一回決めて一時は優位に立ったほどだ。

しかし、『ブルー・ティアーズ』も押し返す。BTビットの弾幕で白式のエネルギーを削り、両者とも一進一退の攻防を繰り広げた。剣戟に銃撃、それと己の意志を込めた言葉を交わした末に——決着はついた。

決め手は、至近距離でのミサイルビットの爆発。

一夏を狙ったセシリアの攻撃は、彼の決死の戦術とそれによる接近速度を見誤ったゆえに、予想より遙かに近い場所で起爆してしまい——結果、両者は同時にエネルギーが0となり、引き分けになったのだ。

いや——セシリアにとって、その戦いは敗北だった。

引き分けになったのは苦し紛れにミサイルを発射しただけでしかない。誇り高い彼女にとっても一夏にとっても、それはあまりにも『惜しい』終わり方だった。

拮抗していた実力が招いた結果とはいえ、納得がいかない中途半端な結果。お互いがお互いを認めることはできたものの、それとこれとは話が別だった。

だから、セシリアは誓ったのだ。

二度とあのような無様は見せない。

そう、彼女はその身をもって知っていたのだ。どれくらいの爆発が己のエネルギーを削り、どれほどなら戦い続けられるか。

この瞬間、『ブルー・ティアーズ』に残っていたエネルギーは700弱——

決死の一撃を行うには、十分な残量だった。

『く、ああああああああああああああアッ!!』

爆風に煽られ、アリーナの土があらかた吹き飛んでいく。

衝撃波に鼓膜が打たれるのを、ISが防御する。

そうして、己の起こした爆発を受けながら――セシリアは仰向けに地面に叩き付けられていた。

『絶対防御』を貫通したその痛みに、思わず彼女は絶叫する。覚悟はしていたが、やはりミサイルの攻撃に『再び』巻き込まれるのは尋常な痛みではなかった。見れば、ISの装甲もほとんどがボロボロだ。無理をさせてしまった愛機に、少しでも申し訳ない気持ちを抱く。

それでも、彼女はまだ負けていない。まだ、戦えるのだ。

闘志をその瞳に宿したまま、セシリアは視界の端に表示される残

りのエネルギーを確認し……予想通りの『事実』をそこに見た。

【ヘラクレス】…残りエネルギー449

【ブルー・ティアーズ】…残りエネルギー42 右手主武器破損・装甲大破

『避……けて……いる……！……！……！』

あの自爆まがいの爆発でさえも、『ヘラクレス』は仕留められなかったのだ。

咄嗟に己の勘に従い、センサーを起動させながら視界を上へと向けると——そこには、空高く跳躍することで爆発を回避していた零夏の姿があった。スーツには多少の焦げ目はついているものの、戦闘に支障が出るようにはとても見えない。やはり彼の身体能力と判断力は異常なレベルだった。

しかし、ミサイルの発射を確認してから回避するという離れ業をやったのけた恐ろしい現実を前にして、セシリアは痛みをこらえながらも笑みを浮かべていた。……それも当然のことだ、彼女はようやく己の攻撃に『手応え』を感じていたのだから。

——空中にいる零夏に、攻撃を回避する手段は無い。

『ブルー・ティアーズ————ッ！……！……！』

彼女の叫びに、手足は応えた。^{ビット}

砂煙を突き破って、二基のBTビットは零夏の元へと飛翔する。

『ブルー・ティアーズ』の本体はボロボロだが、あらかじめ分離しておいたビットには傷ひとつ付いていない。ここまでが、セシリアの用意していた策の全てだった。

更に、レーザーによる同時二方向攻撃はたとえ一発を防御したとしても、もう一発を避けることはあの斧剣では出来ない。そして、砂煙の中だろうとで相手の姿は見えており——この状況で『外す』ことは有り得なかった。

全ての綱を渡り切り、ついに掴んだ勝機。

ついに、自分はここまでたどり着いたのだ。

状況を理解したギャラリーも歓声を、あるいは悲鳴をあげる。

爆風で巻き上がった土煙で、零夏の表情は見えなかった。だが、そんなことはどうでもいい。ただ、今は射撃だけに全神経を集中させるのだ。

そうして、セシリアは地に倒れながらも『ヘラクレス』へと照準を合わせ——最後のエネルギーでBTビットへ発射命令を下そうとして、

ぴたりと、世界から音が消えた。

(……………えっ?)

その状態に、思わずセシリアは目を丸くした。

身体が動かない、どころか——周囲の全てが停止している。そんな、自分の思考だけが世界から切り離されてしまったような錯覚がセシリアを襲った。

いや———実際には動いている。ただ、急激に遅くなったように感じるほどに、セシリアの感覚が鋭敏になっているのだ。

——ねえねえ、れーくんの宝具ってさ、まだ全力じゃないんでしょ？

——ええ、まあ。本気出せばISだろうと一撃で消し炭になるんじゃないですかね？

時が止まったかのような、灰色の世界。

しばらくその状態のまま彼女が呆然としていると……唐突に、周囲の土煙が揺らいだ。何かに押されるように後方に流れ出していく姿は、何かから逃げ出す生き物のようにも見える。

世界が静止している中でソレだけが動いているという異常に気付かないまま、セシリアは思わずその先にあるものを眼で追って——その中心に、奇妙なものを彼女は見咎めた。

——おお、大きく出たね！じゃあ東さんに見せてよ！科学者として越えてみせるから！

——嫌ですよなんのフラグですかそれ。……まあ、正直な話出来ないってのが正しいんですけどね

赤い波動が、溢れ出していた。
エネルギー

織斑零夏。

彼の腕の中に、ゆらゆらと得体の知れないナニカが、集まる。その手に握る斧剣から、試合の前に見た『世界が侵食されていく』感覚を、またもセシリアはその身で感じ取った。灰色の世界で色を持つという光景が、なおさらそれを助長していく。

この世界の人間では理解できないことが——彼の元には絶大な量の『魔力』が込められていた。

しかし、ここまで膨大な規模で行われるものは魔術師であってもそうそう見れるものではない。『余波』だけで周囲のものに影響を及ぼすほどの魔力を必要とするのは、『神秘』と呼ばれる、超級の魔術の証なのである。

それを見て、セシリアは今更ながら気付く。——己の知覚は、この光景を見るために自ら引き伸ばされているのだと。

——なんで？疲れるの？

——怖いんですよ、使うのが。

そして、目の前でセシリアが見ているなか——零夏は、己の中の『幻想』に意識を集中させていた。

ナインライブズ
射殺す百頭。

巨人が持つその『宝具』のことを、実のところ彼はそこまで詳しく知っているわけではない。かつて知っていた記録からも、彼の中にある記憶からも、ヘラクレスがこの宝具を使ったという結果は残っていないかったためだ。

だが、零夏は知っている。この手にあるのは、あまりにも強力な宝具だということを。

これはこの世界のどれよりも恐ろしい、人の命など簡単に吹き飛ばして『死』なせてしまうような危険なものだ。本当ならこんな臆病な自分が使うことなんて出来なかったはずの『兵器』だった。

しかし零夏は今、宝具を起動させる。

己の意志で、己の意地で、英雄の力を再現する。
ヘラクレス

（その理由が『喧嘩に負けたくないから』だなんて——バカな話だなあ）

脳内で苦笑しつつも……それでいいんだ、と彼は思った。

ヘラクレスではなく、織斑零夏の——全てを吹き飛ばす暴虐の英雄ではなく、ちっぽけで死に触れる勇気もない人間の持つ武器として、『射殺す百頭』
ナインライブズを彼は受け入れたのだ。

だからこそ、零夏は強大すぎる出力を強引に抑え込み、制限する。

望むのは化け物を殺す力ではなく、ただあのビットを破壊する程度の力だから。

（――僕は僕だ。お前じゃない――ッ!）

しかし、溢れ出すその余波だけで『十二の試練』ゴッドハンドで守られているはずの彼の腕が傷付き、そして即座に再生されていく。『令装』につく裂け目だけがその跡として遺される。

15年ぶりに『傷の痛み』というものを感じながら――それで嬉しそうに零夏は笑った。

――えー?まったくヘタレだね、ヘタレーくんはー
――やかましいわ!……まあでも、もしも僕がコレを使う日が来るなら幸せですね――

いつか、彼女と話した言葉を思い出す。
あの時は、そんな瞬間は来ないと思っていた。

でも——ホンモノの主人公が気付かせてくれた。
たとえば今は弱くても、強くなることはできるのだと。

「ああ、僕は今、幸せだよ」

その時は、僕が強くなれたって事なんだから。

ドパアツツ!!と、

周囲が魔力で満たされた。

ギヤリギヤリと石を削るような音を立てながら、物質としての境界を越えて——斧剣がその形を作り変えていく。大きさや大まかな外見はそのままに、しかし絶対的に『中身』が違うモノへと変貌していく。

物理法則を越えて、世界のルールを書き換えて、幻想が現実を叩き潰す。

空中で身動きができないまま、零夏が片手で真上にソレを持ち上げた刹那——ついに、零夏の空想が投影され、成立したカタチが世界に顕現する。

現れたのは——身に余るほどの、巨大な『石弓』だった。

それは、斧剣と同じく、時代を逆行したような粗雑な外見。鉄の時代すらも遡る遺物。アンティーク

しかし——零夏がもう片方の手に握る『矢』は、その印象に真っ向から矛盾していた。

光で出来た、不定形の矢。

原始の武器であるはずなのに、理の外のエネルギー……『魔力』で構成された光の矢は、まさしく神秘的な輝きをもってこの戦場に君臨する。

最早恐れだとか、妬みだとかそんな段階を吹っ飛ばして、ただ全員がそれに羨望を覚えた。斧剣での本気の一撃を受けた一夏でさえ、アレはあまりにも次元が違うのだと理解する。

——ゆっくりと、空へと向けて『ヘラクレス』が弓を引いた。

ようやく、思い出したようにBTビットが銃口に光を灯す。
セシリアの命令通りにレーザーを収束させ標的に攻撃を加えようと動く様を見て……しかし、セシリアは気付いてしまった。

この攻撃は、きっと届かない。
目の前の光景に見惚れてしまった時点で、自分の敗北は決定したのだ。

この一秒にも満たない一瞬で、彼はあの『石弓』を構え、そして発射しようとしている。その姿が、あまりにも——あまりにも幻想的だったから、彼女は思考を止めてしまった。それが、ひどくセシリアは悔しかった。

そして。

その攻撃の『真名』が、紡がれる。

『———』
 ナインライブズアローワークス
 其・射殺す百頭』

「其・射殺す百頭」

閃
光。

何が起こったのかを、セシリアは直接は理解できなかった。

ただ、自分の放った攻撃が当たらなかったこと——BTビットの反応がロストしたということ……彼女に理解できたのは、そこまでだった。

何も見えない。聞こえない。感じない。

白い白い光が視界を包んで、自分がどこにいるのか……身体感覚さえも掴めないまま、セシリアの意識は断絶してしまった。ISによる防御を、『余波』だけで貫かれて。

そして、それは他の人々も同じだった。はっきりと聞こえたのは、零夏が何かを呟いたところまで。その後はあまりの光と轟音に目を覆ってしまい、試合がどうなったのかを認識できずにいた。

その光景を見ていられたのは、分析用の録画機材と——ISを起動させていた、楯無だけだ。

「……冗談、よね？」

しかし、その光景を直接見ていた彼女でさえ、それは信じられな

いような光景だった。

眩い光の正体は、零夏が放った二本の光の矢。

それも、一本だけでISを纏ったセシリアごと飲み込んでしまい
そうなほどの極太の『レーザー』であった。

400程度あった零夏のエネルギーは凄まじい勢いで減少してしまっている。恐らくは、これこそが彼の切り札なのだろう。全エネルギーの半分近くを使用するとなれば、使うのを躊躇うのも当然のことだ。

しかし——真上に打ち上げられた矢が有り得ない軌道で向きを変え、真横のビットへと向かう姿を見ても、果たしてそれを『レーザー』と言い切れる人間が何人いるのだろうか。

言うならばそれは、『ホーミングレーザー』だった。

偶然にも、それはセシリアが目指す到達点の一つだ。

『偏向射撃』——ビームを曲げるという、BT兵器における机上の空論。特殊な才能を持った人間が、ISと極限までシンクロして初めて使えるソレを、目の前の男はあっさりと達成してしまったのだ。

——故に。

「……えっと、零夏くんってひょっとして人間やめてるのかな？」

「「……………」」

楯無の弦きを否定できる者など、この場には存在しなかった。

ピー、と試合終了のブザーが今更鳴った。

おそらくは確認がとれたのがこのタイミングなのが理由なのだろうな、と思いつつ、『令装』でお互いのステータスを確認する。

【ヘラクレス】..残りエネルギー82

【ブルー・ティアーズ】..残りエネルギー0

こちらの勝利だった。

その事実喜び、あるいは感慨深く微笑む——ということはずに、僕は一人土の上でうずくまっていたりした。

「……っつ、うううう……」

15年。

ゴッドハンド

十二の試練に頼りきりだったツケがまわってきたのか知らないが、これだけ久しぶりにケガをすると、痛みにも割りと敏感になるらしい。

もう治っているにもかかわらず、アリーナの中心で腕を抑えてうめき声を上げている情けない少年がそこにはいた。もちろん僕である。なんだか無駄に恥ずかしかった。

「痛い、地味に切り傷が痛い……」

必死に手でさすりながらも、僕はとりあえず立ち上がって——辺りを見渡し、今更ながらとんでもない惨状を引き起こしたことを再確認する。

グラウンドには、クレーターを通り越して綺麗な円柱状の『穴』が空いていた。二つあるソレを覗き込んでみると……どうやら地下

にもシールドは用意してあったらしく、幸いなことに僕の『矢』はそこで停止していた。

まあ、地下にも秘匿エリアがあるらしいしその程度の防備はあるとは思っていたけど……なんとか無事だったというその事実にもかく僕は胸を撫で下ろした。

「あー、良かった。手加減できてたみたいだねー」

『いやいやいやちょっとお待ちなさいな』

……ん？誰だ今の？

唐突に聞こえた声に辺りを見渡してみると――大穴の淵のあたりにボロボロの『ブルー・ティアーズ』が……つまりセシリアちゃん、うつ伏せのままブツ倒れていた。

ピクピク震えるその姿に、『あれどっか故障したのかな？』などと少し心配になる。というかあの状態でも話せるとはオープンチャネル万能だなあ。

とりあえず、彼女に駆け寄って機体ごと仰向けにしてあげることにする。

周囲に気をつけつつ、ガシャガシャ大きな音を立ててひっくり返すと顔を覗き込むと……そこには、実に不機嫌そうなセシリア・オルコットさんがいた。

「あ、大丈夫かい？顔への土とかはISが防御してくれたみたいだね」

『そうではなくてッ！今、貴方なんと仰いましたの！？て、手加減ッ！！？』

ゼイゼイと苦しそうに呼吸しながらも、オープンチャンネルで彼女は絶叫する。喋るのも辛いなら話は後にしたほうがいいんじゃないだろうか。……まあ、そういうわけにはいかないのもわかってるんだけどね。

さて、ここで解説しておくところ——ナインライフズアローワークス其・射殺す百頭というのはヘラクレスの『奥義』のひとつである。その内容は『九本のホーミングレーザーを同時発射する』という、本来ならドラゴンとかそういうヤバイ相手に使用する宝具だ。

で、今回僕が使ったのはソレを限界まで弱めた二本のバージョンである。ちなみに、これでも一本ごとの攻撃を弱めました。本来ならば地下までブチ抜いて大変なことになっているんだらうね……

——そう、『あまりにも危険すぎる』というのが、僕が宝具を使おうとしなかった理由だった。

こんなモノ全力で撃ったらISであろうと間違いなく即死してしまうだろう。

おまけに、『二本』しか撃っていなくても偽装エネルギーが350くらい削れてしまうという燃費の悪さも問題だ。威力が高くて使い勝手が悪い……まったく、どこの騎士王なのだろうか。やれやれである。

『あ、あれで……全力ではないんですの……?』

「ああいや、何かしらの外部電源(?)でも用意しないと使えない

から安心していいよ？」

『そういう問題ではありませんわッ!!』

顔を青くしながらセシリアはISを通して叫ぶ。

……しかし疲労しきった肉体のほうでは、こんな理不尽な相手と戦っていたのか、と最早色々諦めることしかできなかった。

——自分は、あらゆる面で零夏に負けたのだから。

手加減された上の負け……そんな無念を、けれどセシリアは自分でも驚くほどすなりと受け入れられていた。圧倒的な敗北というのはむしろ清々しい気分になるのか、と笑みさえ浮かべられたほどだ。それは自分を守るための、一種の開き直りとも言える。

そんなことを思いながら、目線だけで零夏を睨み付けていると……セシリアは、とある事実に気付いた。

(……ああ、本当にこの人は——)

——織斑一夏に、似ている。

双子なのだから当たり前なのかもしれないが、『ああ、そういえばまたも姉さんとの対話か……!?!』などと呟く零夏は、言葉では言い表せない『芯』のような部分が一夏と似通っていた。それが何となく、彼女にはむず痒く感じられる。

……ひょっとすると、『何か』が違い、自分が好きになっただのは零夏だったのかもしれないですわね、などと一瞬だけ考えて、

どうでもいい考えだと打ち切った。『もしも』の話を考えても、意味など無いのだから。

だから——セシリアは、どうしても言いたかった一言の方を、口にすることにした。

『——ねえ、零夏さん』

「うーむ、ど、どうしよう……ん？なんだい、セシリアちゃん」

静かな言葉に反応してか、零夏も真面目な表情を作って反応する。そういう所は誠実なのか、と頭に入れつつセシリアは言葉が続けた。

『……試合直後に、わたくしに斧剣を投げつけましたわよね？あの時のお話ですが』

「ああ、そういえば僕も聞きたかったんだよ。あの投擲は完璧なタイミングだった。不意をついて、しかも二段構えで用意してた作戦だったのに——君は一体、どうやって察知したんだい？」

不思議そうに尋ねる零夏の顔をじっと見る。その顔が、あまりにも純粹に不思議がっていたから——つい堪えきれずに、セシリアは噴き出してしまった。

くすくすと笑う彼女に、零夏は何事かと目を丸くする。それに対してちよいちよいと手招きをして、セシリアは肉声で零夏に耳打ちをした。

「――あの戦術、弟さんとそのまま同じでしたわよ？」

零夏の顔がビシリと硬直したのに再び笑って——セシリアは、自分の気が遠くなるのを感じた。

おそらくは、疲労した体が脱力したことで限界を迎えたのだろう。

薄れ行く意識の中で、セシリアは静かに誓う。

——いつか、辿り着いてみせますから

それは、一夏と同じ答え。

彼と共に歩くことを、彼女が心に刻んだ瞬間だった。

L i f e 1 2 躊躇いを消して、光を翳して（後書き）

米後書きに需要があるかは不明ですが、後で追記しますね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3669x/>

僕は違います

2011年12月12日07時46分発行